m、深さ1.04mを測る。底面付近の側壁は崩壊してオーバーハングしていた。

覆土は6層に分かれ、第4層に鉄分の凝集層が形成されていた。下層は暗青灰色の還元土壌が堆積していた。板状木製品の残片が遺存していたことから井戸側が存在した可能性がある。

出土遺物は土器と木製品がある。第518図1は須恵器椀。6は須恵器大甕の胴部片である。2は曲物側板で樺皮で綴じられていた。3は棒状木製品の破片で一端に斧状工具の加工痕が残る。長さ16.8cm、直径3.2cm。4は曲物状容器の底板と思われる。円形の板の周縁部を削り込み側板を置いたものか。底板と側板は樺皮で綴じたものと思われ、樺皮の一部は底板に差し込んだ状態で遺存していた。直径16.0cm、厚さ1.1cm。5は刀子の木柄で内部にX線透視により、内部には刀子の茎部が遺存することが判明した。また、柄元には口金と思われる痕跡が確認できる。残存長12.0cm。須恵器椀の形態から9世紀代のものと思われる。

C区第4号井戸跡出土遺物観察表(第518図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	椀	(17.0)	4.8		ABC	A	黄灰	20%	覆土
5	刀子柄								No2 覆土 残長12.0,幅1.3,厚さ1.8cm
6	大甕				ABC	A	灰		No4 覆土 外面平行叩き 内面当て具

C区第5号井戸跡(第519図)

G-26区に位置する。第69号住居跡を切って掘り込まれていた。小規模な井戸跡で、形態は楕円形で、規模は長径0.50m、深さ0.42mを測る。底面付近の側壁は崩落しオーバーハングしていた。覆土は黒褐色シルト質土で、壁の崩落土のロームを多量に含んでいた。

出土遺物は須恵器坏が検出された(第519図1～4)。土器様相から見て稲荷前Ⅷ期頃に機能していたものと推定される。

第519図 C区第5号井戸跡・出土遺物

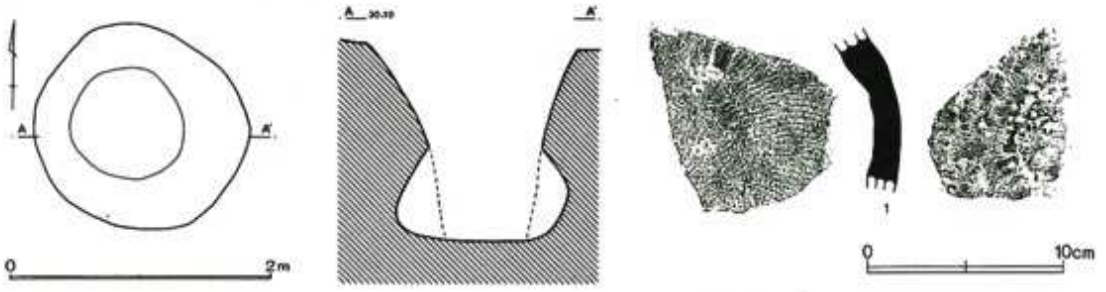
C区第5号井戸跡出土遺物観察表(第519図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.6)	3.4		ABC	A	灰	10%	覆土 底部を欠く
2	坏		1.9	(6.4)	ABC	A	灰	40%	SJ64-SK01覆土 底部回転ヘラケズリ
3	坏		0.8	(6.4)	ABC	A	灰	45%	SJ64-SK01覆土 底部外周回転ヘラケズリ
4	坏	13.7	3.9	8.8	ABC	A	明緑灰	100%	SJ64-SK01覆土

C区第6号井戸跡(第520図)

Ⅰ-20・21区に位置する。形態は円形を呈し、規模は直径1.65m、深さ1.44mを測る。底面付近の側壁は地山が崩落していた。中位から上面にかけての側壁はラッパ状に広がっていた。

出土遺物は横瓶が1点検出された(第520図1)。胴部片で外面は平行叩き、内面は絞り痕が残る。胎土に白色針状物質と石英を含み、焼成は普通である。時期的には不明確であるが、8世紀代であろう。



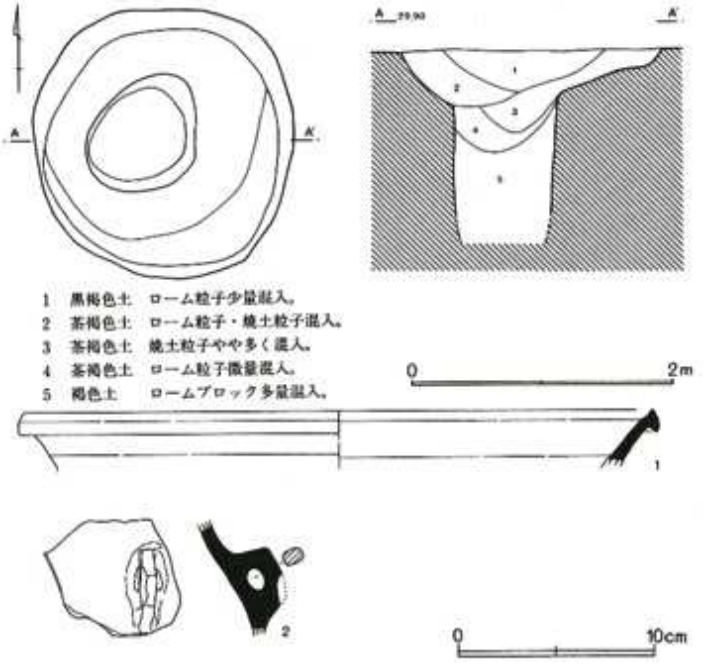
第520図　C区第6号井戸跡・出土遺物

C区第7号井戸跡(第521図)

H・Ⅰ-24区に位置する。井戸本体の上面に浅いテラス状の土壙が付属する。上面の形態は円形で、規模は直径2.04m、井戸本体は円筒状に掘り込まれ、直径は0.60mを測る。深さは1.30m以上となるが底面までは完掘できなかった。

覆土は5層に分かれる。全体にロームの混入が顕著である。出土遺物は須恵器甕と耳壺の破片がある(第521図)。時期は不明確である。9世紀代か。

第521図1は須恵器甕で推定口径32.0cm、焼成は甘く淡黄色を呈する。



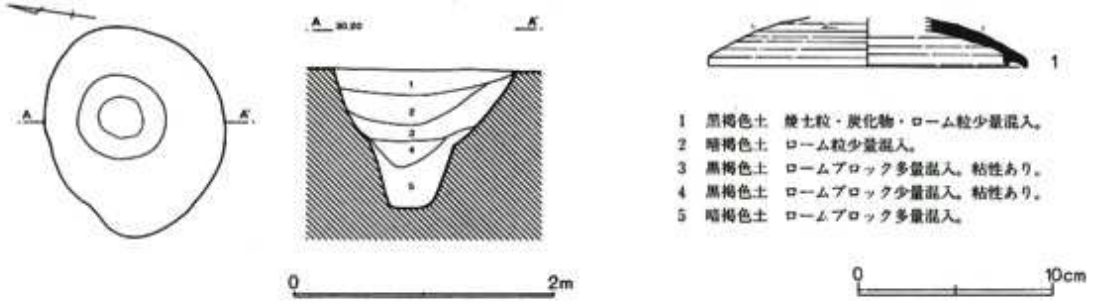
第521図　C区第7号井戸跡・出土遺物

2は須恵器四耳壺か。耳部の破片である。胎土に石英、白色針状物質を含み、焼成はやや不良である。色調は灰色。

C区第8号井戸跡(第522図)

G-23区に位置する。第47号住居跡内にあり、新旧関係は本井戸跡の方が新しい。形態は円形を呈し、規模は直径1.56m、深さ1.05mを測る。底面は窄まり断面逆台形に掘り込まれていた。覆土は5層に分かれる。黒褐色土を基調とし、ロームの混入が目立つ。

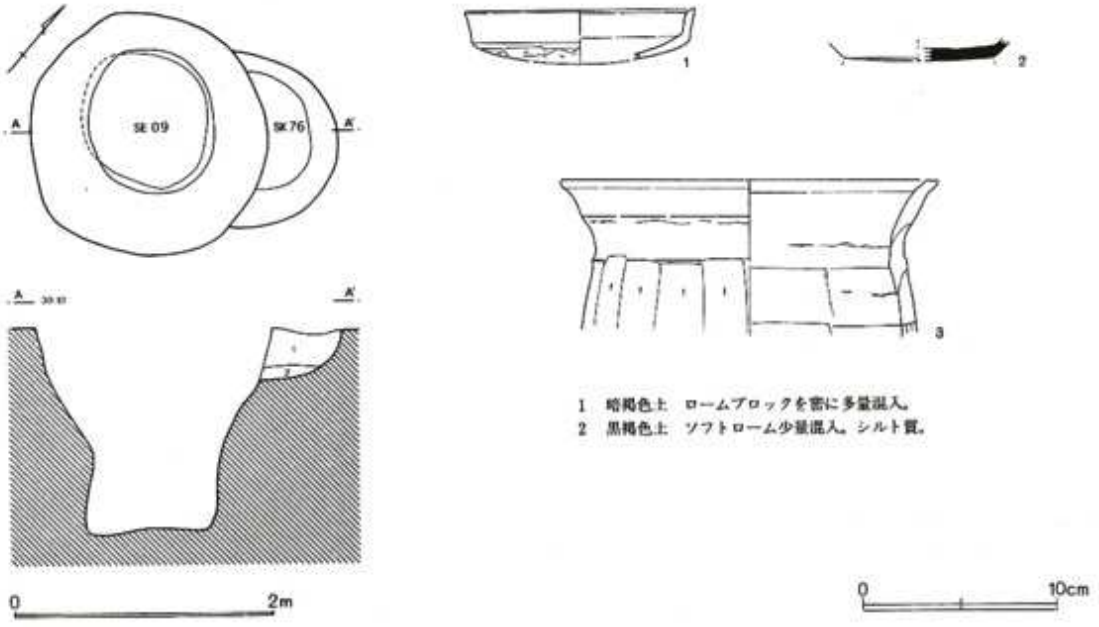
出土遺物は須恵器坏、蓋、甕がある。第522図1は須恵器のいわゆる特殊かえり蓋である。口径16.1cm。胎土に石英、白色粒子、白色針状物質をふくむ。焼成は良好で灰色を呈する。約25%が残存する。内面に自然釉が掛かりやや器形は歪んでいた。重複する第47号住居跡にも類似する蓋があり住居からの流入遺物の可能性が高い。時期は8世紀初頭以降である。



第522図　C区第8号井戸跡・出土遺物

C区第9号井戸跡(第523図)

H-23区に位置する。第49号住居跡、第76号土壙と重複し、新旧関係は本井戸跡が最も新しい。形態は円形を呈し、規模は直径1.80m、深さ1.44mを測る。底面は平坦で側壁は下半が円筒状に掘り



第523図　C区第9号井戸跡・出土遺物

込まれ、上半はラッパ状に開いていた。覆土の詳細は不明である。

出土遺物は土師器坏、甕、須恵器坏がある(第523図)。時期決定は難しいが新しい遺物で判断すれば、須恵器坏が出土していることから8世紀以降となる。

C区第9号井戸跡出土遺物観察表(第523図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.7)	2.6		ABC	A	にぶい橙	20%	覆土　体部内面は無彩か　赤彩
2	坏		1.1	(7.7)	ABC	A	灰	25%	覆土　底部全面回転ヘラケズリ
3	甕	(19.2)	8.0		ABC	A	明褐灰	25%	覆土

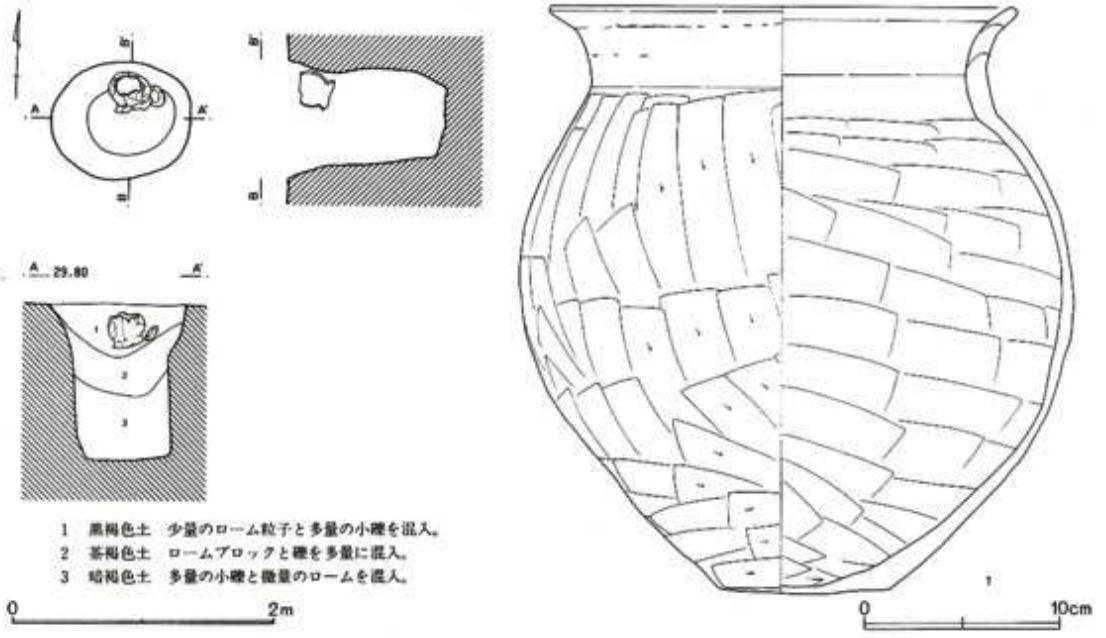
C区第10号井戸跡(第524図)

調査区南東部のM-29区に位置する。形態は楕円形で、規模は長径1.05m、深さ1.20mを測り、円筒状に掘り込まれている。

覆土は3層に分かれる。上層は黒褐色土が被覆し、土師器壺が転落したような状態で出土した。全体に礫の混入が多い。

出土遺物は土師器壺が1点ある。時期は不明確であるが7世紀代と思われる。

第524図1は土師器壺で、口径23.6cm、器高29.9cm、底径8.6cm。胎土に白色針状物質を含み、焼成は良好である。色調はにぶい橙で90%程が残存する。

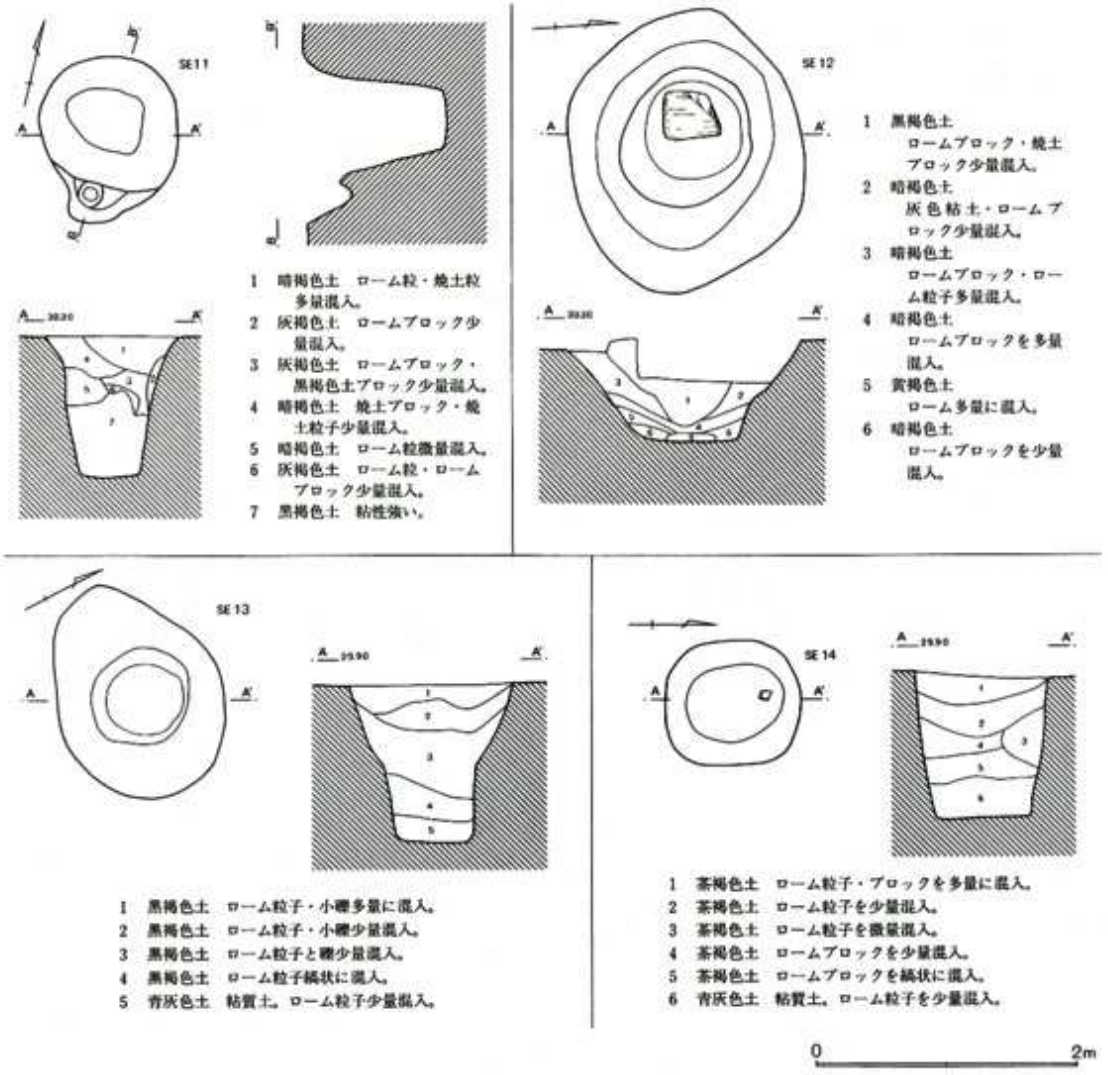


第524図　C区第10号井戸跡・出土遺物

C区第11号井戸跡(第525図)

H-20・21区に位置する。形態は隅丸方形で南側にピットが重複していた。規模は長径1.08m、深さ1.10mを測る。側壁は上端がやや幅広く断面逆台形に掘り込まれていた。

覆土は7層に分かれる。第7層は黒褐色のシルト質土で粘性に富んでいる。



第525図　C区第11～14号井戸跡

出土遺物は須恵器甕の破片があるのみで正確な時期は不明である。

C区第12号井戸跡(第525図)

H・I-21・22区に位置する。第30・31号住居跡と重複し、新旧関係は本井戸跡の方が新しい。形態は楕円形で、規模は長径2.19m、深さ0.80mを測る。基本的に断面逆台形に近い形態で掘り込まれ、中層にテラス風の弱い段が付く。

覆土は6層に分かれ、全体にロームブロックの混入が顕著である。

出土遺物は底面から板状の角礫が出土したほかは須恵器甕の胴部破片、坏の小片が出土したのみで、8世紀から9世紀代にはおさまるものと推定されるが正確な時期は明らかにできない。板状礫は加工痕が見られず板碑とは異なるものと思われる。

C区第13号井戸跡(第525図)

H-24区に位置する。形態は卵形を呈し、規模は長径1.68m、深さ1.20mを測る。底面はやや窄まり断面逆台形に掘り込まれていた。

覆土は5層に分かれる。最下層は青灰色の粘質土が堆積し、上層から中層にかけてはロームと小礫混じりの黒褐色土で構成されていた。

出土遺物は土師器甕と須恵器坏、甕の小片が出土したのみで、正確な時期は不明である。8～9世紀代であろうか。

C区第14号井戸跡(第525図)

J-24区に位置し、上面を第16号溝跡に削平されていた。形態は楕円形を呈し、規模は1.05m、深さ1.08mである。断面円筒状に掘り込まれ、底面は平坦である。

覆土は6層に分かれる。第1～5層は褐色系の堆積土でロームの混入が目立つ。最下層の第6層は青灰色シルト質土で、粘性が強い。

出土遺物は須恵器坏と甕の破片が出土したのみで図化可能な遺物はない。正確な時期決定はできないが、須恵器坏は底部周辺へラケズリが施され8世紀後半代のものと思われる。

(5) 土壙

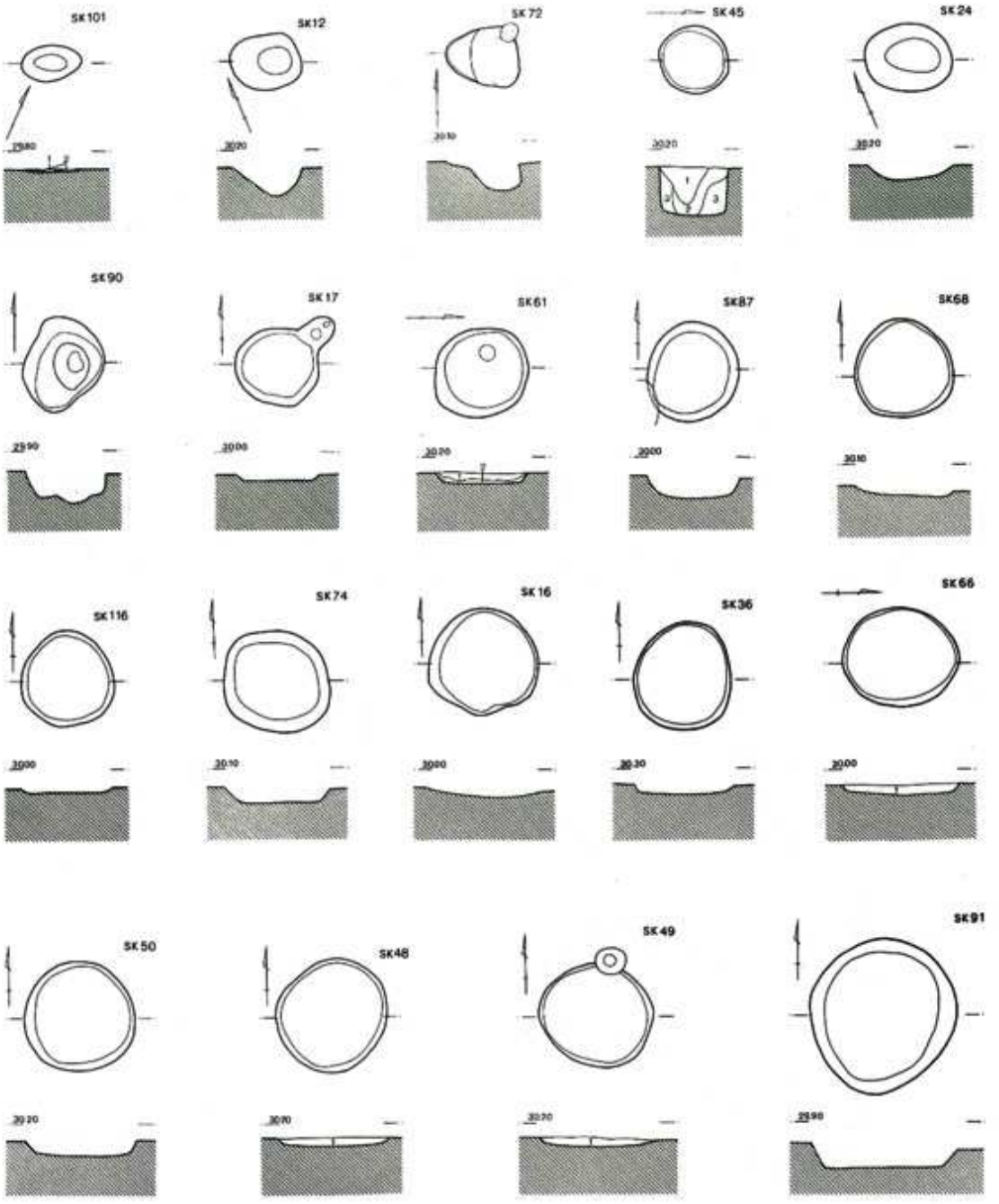
C区では古墳時代後期から平安時代の土壙は46基検出された。遺構は第526～528図に、遺物は第529～531図に掲げ、規模等の詳細は巻末の土壙一覧表に記載した。形態は円形、楕円形、方形、長方形、不定形のものがある。特に注目されるものについて幾つか触れておく。

C区第62・63号土壙(第527図)

F・G-23区に位置し、何れも第17号方形周溝墓東周溝上部に掛かって検出された。特に第63号土壙からは多量の須恵器が出土した。第17号周溝墓東周溝覆土からも須恵器の出土量が多く、本土壙の遺物と接合する例も見られることから本来規模はもう少し大きかったものと推定される。8世紀前半から後半代の土器が含まれ、層位では明確に分かれないようである。土器捨て場的なものなのか、他の遺構が存在したのかどうも判然としない。性格は不明である。第62号土壙出土土器は第529図6～9、第63号土壙出土土器は第529図10～25、第530図26～38である。

C区第100・101号土壙(第526・527図)

調査区南東部のH-27区に位置する。両土壙は3m程離れて位置していた。形態は楕円形で、何れも焼土が多量に含まれ、炉跡或いはカマドの火床面かと思われた。炉跡とすれば五領期の住居跡の可能性が、カマドとすれば第87号住居跡のように羽釜を伴う住居跡と考えることもできる。覆土の様相から後者の可能性がより強いものと考える。



SK45
1　黒褐色土　ローム粒子・ブロック少量混入。
2　黒褐色土　ローム粒子・ブロック多量混入。
3　黒褐色土　ローム粒子・ブロック多量、横縞状に混入。

SK48
1　黒色土　焼土粒子微量、ローム粒子少量混入。粘性なし。

SK49
1　黒色土　焼土粒子微量、ローム粒子まばらに混入。粘性無。

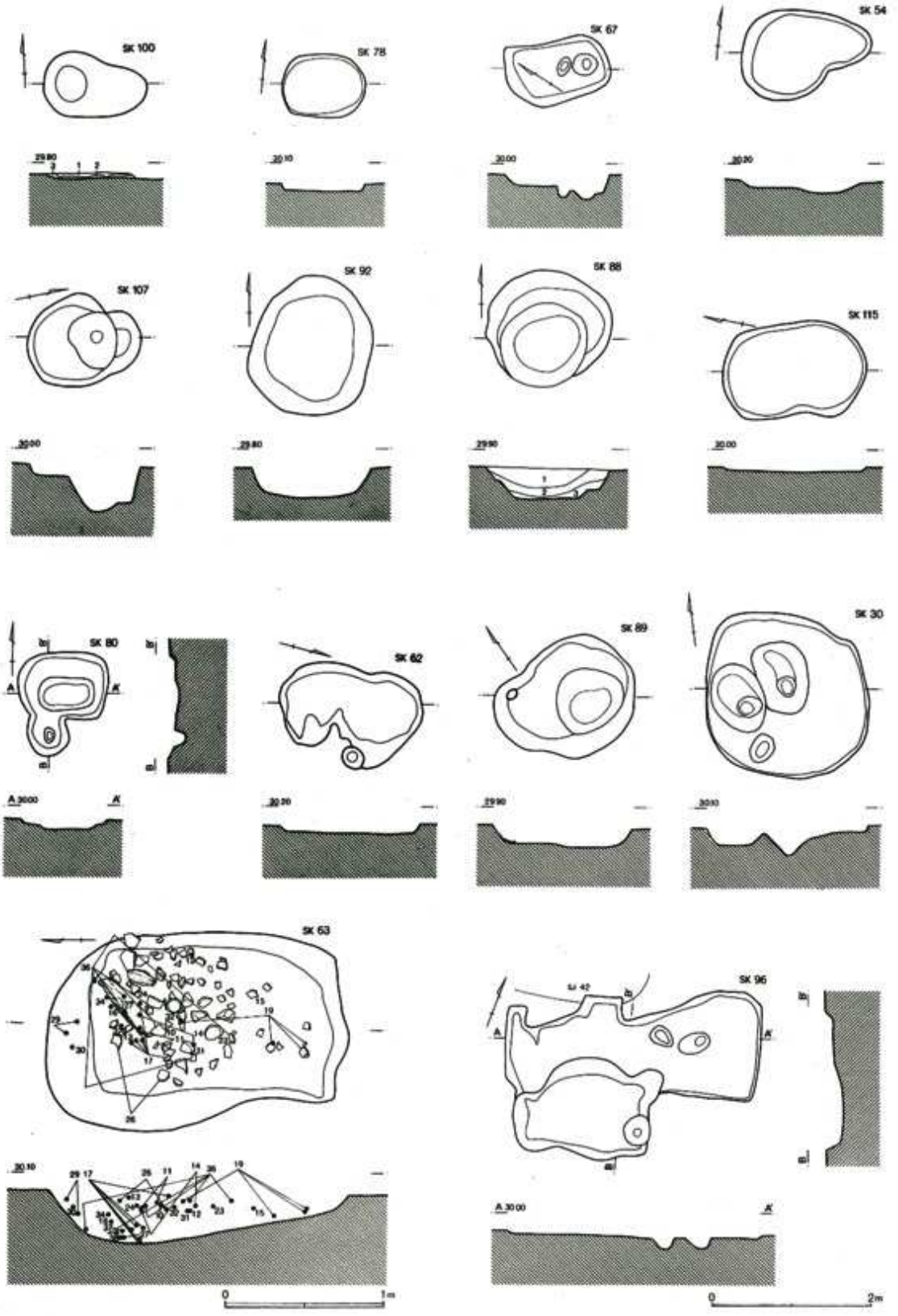
SK61
1　黒褐色土　ローム粒子少量混入。
2　暗黄褐色土　黒褐色土を斑状に混入。

SK66
1　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒子少量、暗灰色粘土ブロック混入。シルト質。

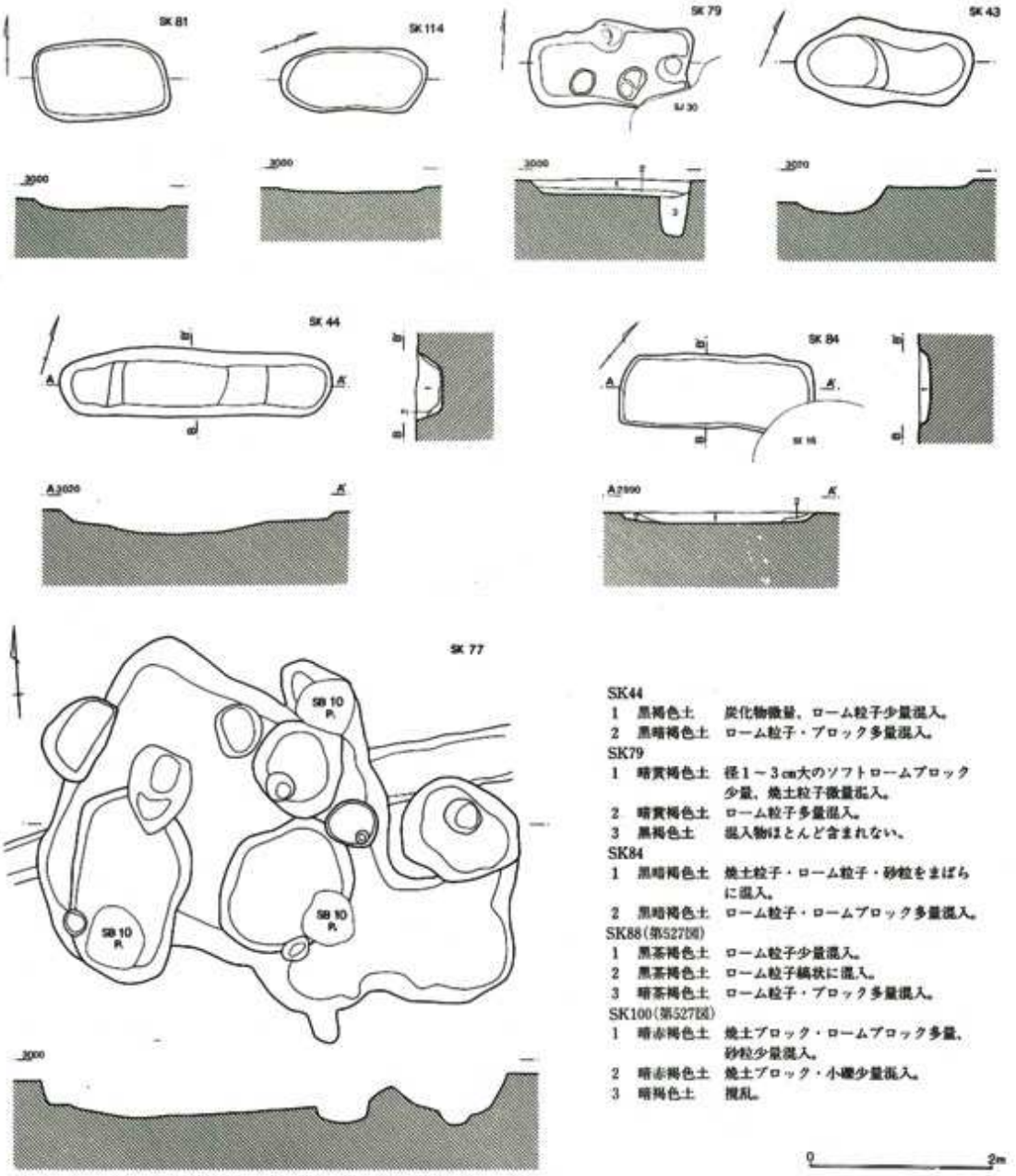
SK101
1　赤褐色土　焼土ブロック多量、ロームブロック少量混入。
2　暗褐色土　焼土粒子・ローム粒子少量混入。

0　2m

第526図　C区古墳時代後期～平安時代の土壙（1）



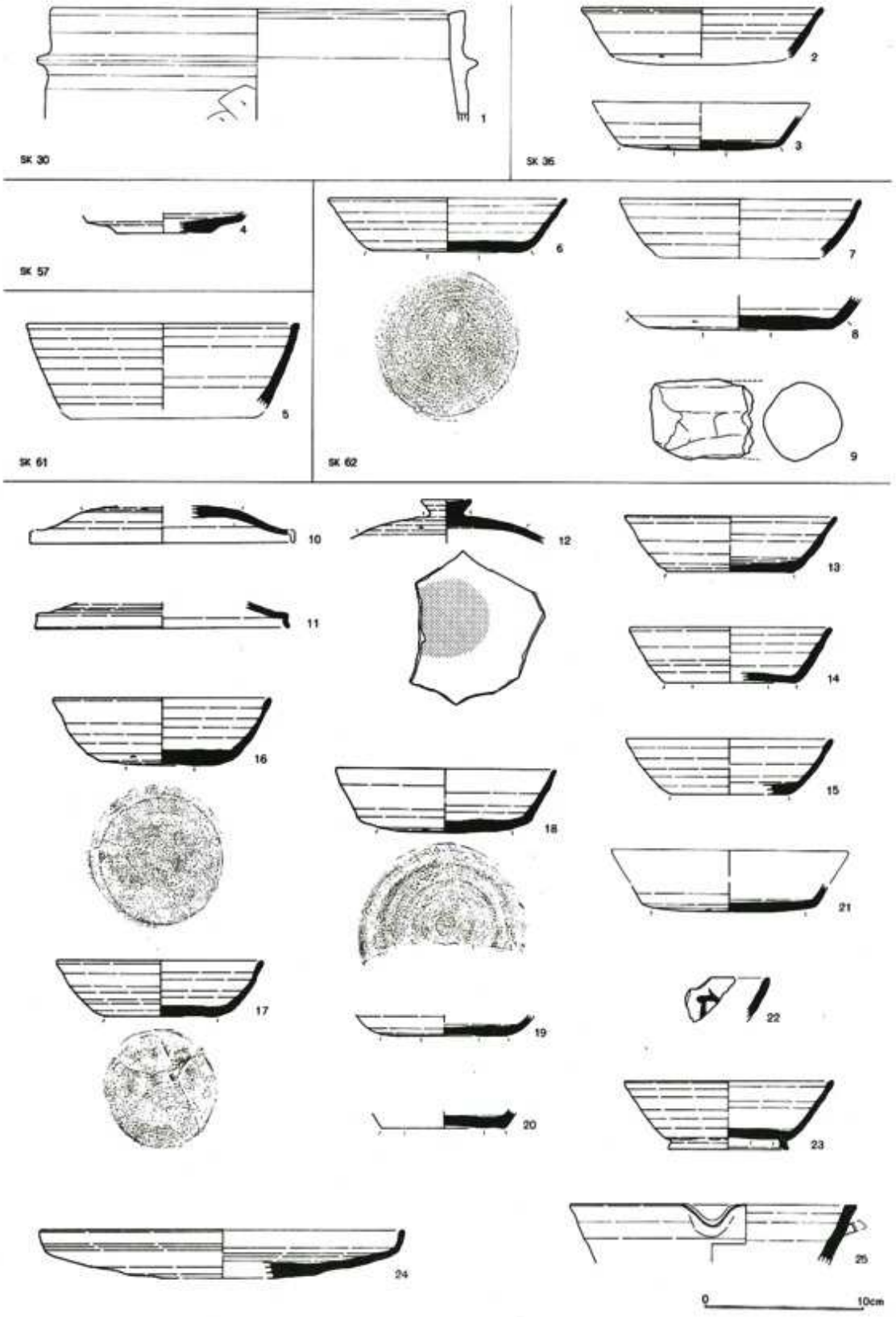
第527図　C区古墳時代後期～平安時代の土壙(2)



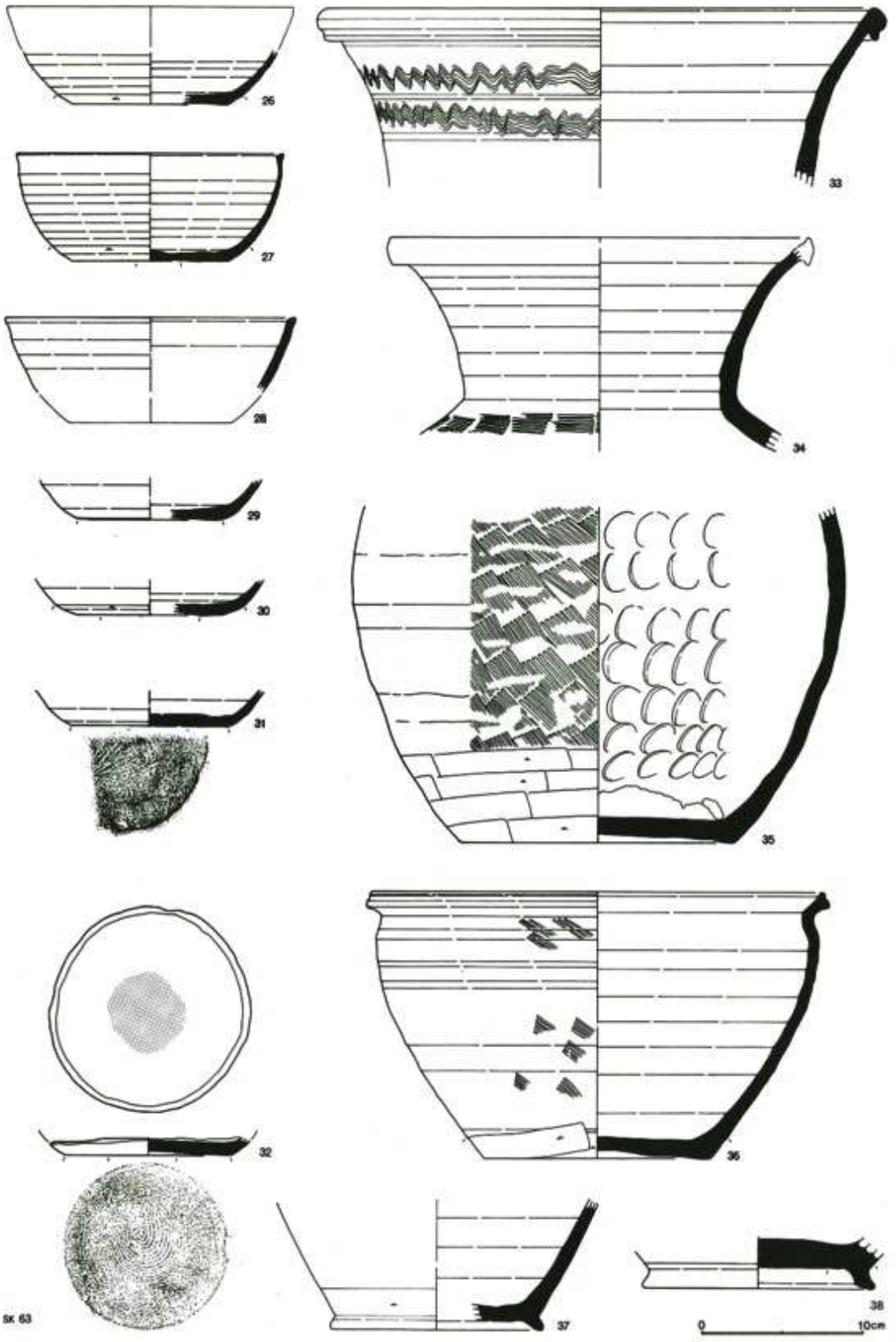
第528図　C区古墳時代後期～平安時代の土壙(3)

C区古墳時代後期～平安時代土壙出土遺物観察表(第529～531図)

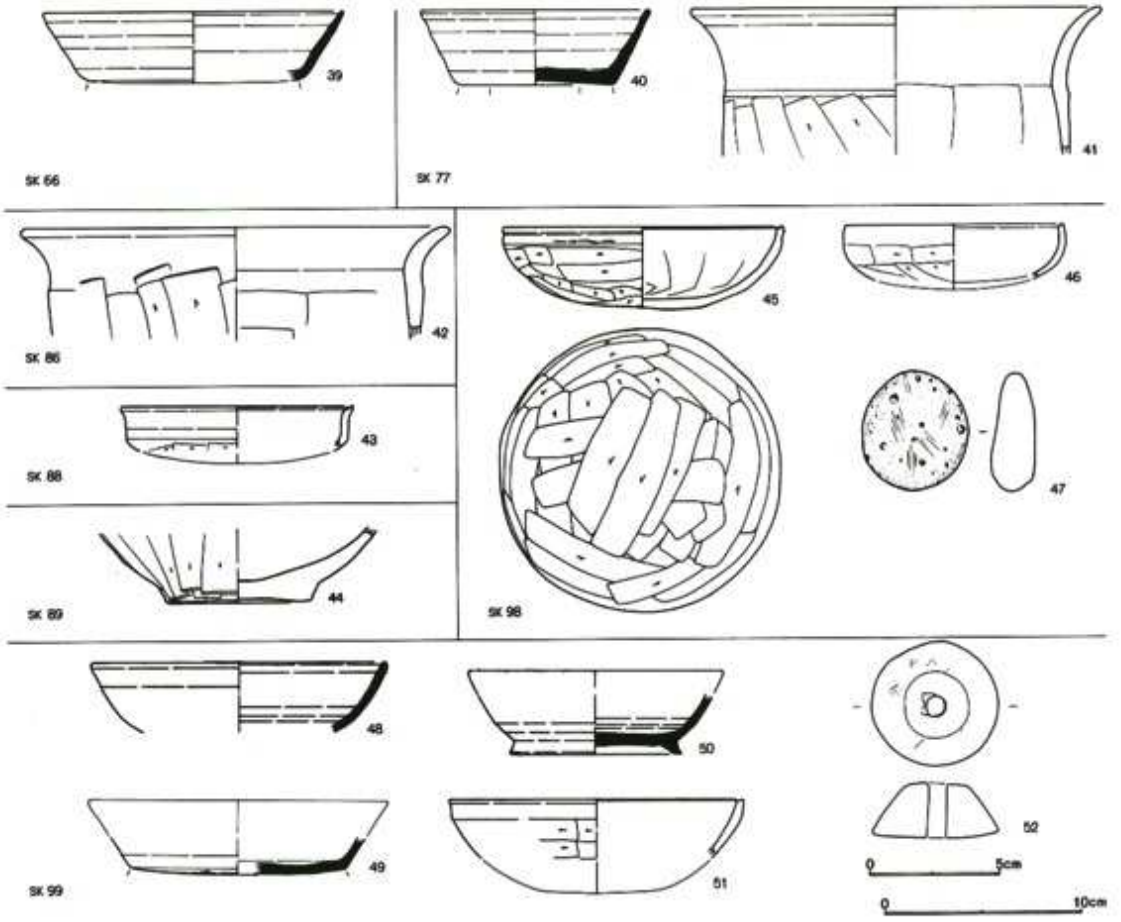
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	羽釜	(26.0)	7.0		ABE	B	にぶい褐	5%	SK30覆土　土師質
2	坏		3.1	(11.7)	ABC	A	灰白	10%	SK36覆土
3	坏		2.1	(10.0)	ABC	A	緑灰	35%	SK36覆土
4	坏		1.3	6.0)	ABC	B	灰白	20%	SK571No.25　覆土(+21cm)
5	椀	(17.0)	5.4		ABC	A	灰白	10%	SK61覆土
6	坏	15.0	3.4	9.3	ABC	A	灰白	90%	SK62No.14　覆土(+6cm)



第529図　C区古墳時代後期～平安時代の土壙出土遺物（1）



第530図　C区古墳時代後期～平安時代の土壙出土遺物(2)



第531図　C区古墳時代後期～平安時代の土壙出土遺物(3)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
7	坏	(15.1)	3.6		BC	A	灰黄	40%	SK62No.12　覆土(+9cm)
8	椀		2.2	11.6	ABC	A	灰	70%	SK62No.13　覆土(+12cm)
9	支脚				ABCJ	B	にぶい黄橙		SK62No.15　底面　残長6.5cm
10	蓋		1.8		ABC	A	灰	20%	SK63No.39　覆土(+22cm)
11	蓋	(16.0)	1.6		ABC	A	暗青灰	10%	SK63No.37,82　覆土(+21～24cm)
12	蓋		2.8		ABC	A	青灰	40%	SK63No.90　覆土(+25cm)
13	坏	(13.2)	3.5	(8.0)	ABC	A	灰	25%	SK63No.56　覆土(+28cm)
14	坏	(12.6)	3.5	8.2	ABC	A	明オリーブ灰	30%	SK63No.47,101　覆土(+19～20cm)
15	坏	(12.9)	3.5	(7.4)	ABC	C	灰白	20%	SK63No.19　覆土(+18cm)
16	坏	13.6	4.2	7.8	ABC	A	灰白	95%	SK63No.124　覆土(+13cm)
17	坏	13.0	3.6	7.0	ABC	A	灰	70%	SK63No.32,111,他　覆土(0～+28cm)
18	坏	13.8	4.0	8.5	ABC	A	明褐灰	50%	SK63覆土
19	坏		1.3	8.0	ABC	A	灰	75%	SK63No.2,3,他　覆土(0～+21cm)
20	坏		1.1	7.8	ABC	A	灰	45%	SK63覆土　混入
21	坏		1.9	(11.0)	ABC	C	灰白	30%	SK63覆土　混入
22	坏				ABC	A	灰		SK63覆土
23	高台坏	(13.1)	4.3	7.4	ABC	B	灰	40%	SK63No.12　覆土(+19cm)
24	盤	(23.0)	3.0		ABC	A	灰	25%	SK63No.48　覆土(+22cm)
25	片口鉢	(18.0)	3.8		ABC	A	灰	15%	SK63SR17東溝　覆土

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
26	椀		3.3	(9.7)	ABC	A	オリーブ灰	40%	SK63No.26,54 覆土(+1～22cm)
27	椀	(16.5)	6.6	9.8	ABC	A	灰	35%	SK63No.109 底面
28	椀	(18.0)	4.6		ABC	B	灰	15%	SK63覆土
29	椀		2.5	(9.0)	ABC	B	灰白	35%	SK63No.136,138 覆土(+13～22cm)
30	椀		2.2	(9.0)	ABC	A	灰白	40%	SK63No.137 覆土(+18cm)
31	椀		2.2	(9.8)	ABC	A		30%	SK63No.30 覆土(+19cm)
32	椀		1.1	10.4	ABC	A	灰	100%	SK63No.67 覆土(+21cm)
33	甕	(33.8)	12.1		ABC	B	灰白	50%	SK63覆土
34	甕		12.6		ABC	A	灰	35%	SK63No.107 覆土(+17cm)
35	甕		20.7	(17.0)	AB	A	灰白	35%	SK63覆土
36	鉢	(28.0)	16.4	(14.0)	ABC	A	灰	20%	SK63No.10,29,他 覆土(+5～22cm)
37	長頸瓶		8.0	(13.0)	ABC	A	暗灰	15%	SK63No.114 覆土(+6cm)
38	壺		3.2	(14.0)	ABC	A	青灰	80%	SK63No.109 底面
39	坏	(15.3)	3.5	(10.8)	ABC	A	灰	10%	SK66No.1 覆土(+14cm)
40	坏	(11.6)	3.8	7.8	ABC	A	灰	45%	SK77No.24 覆土(+31cm)
41	甕	(20.6)	7.5		ABCE	B	にぶい黄橙	25%	SK77No.8,21,他 覆土(0～+20cm)
42	甕	(21.4)	5.7		ABC	A	にぶい橙	15%	SK86 G-28G SK01 覆土
43	坏	(11.8)	2.3		ABC	C	にぶい黄橙	15%	SK88覆土 赤彩
44	壺		3.8	7.5	ABC	A	にぶい橙	70%	SK89No.2 底面
45	坏	14.2	4.2		ABC	A	浅黄橙	95%	SK98No.1 底面 赤彩
46	坏	(11.0)	2.8		ABEF	A	にぶい橙	10%	SK98No.3 底面 北武蔵型
47	軽石								SK98No.11 床面 長径6.0,短径5.4cm
48	坏	(15.0)	3.5		ABC	A	灰	15%	SK99No.33,34 覆土(+18～22cm)
49	坏		1.8	(11.0)	ABC	B	灰白	25%	SK99No.11 覆土(+8cm)
50	高台坏		3.0	8.6	BC	C	灰白	60%	SK99No.27,29 覆土(+26cm)
51	坏	(15.0)	3.0		BC	A	にぶい橙	5%	SK99No.33 覆土(+22cm)
52	紡錘車								SK99No.22 覆土(+22cm) 完形

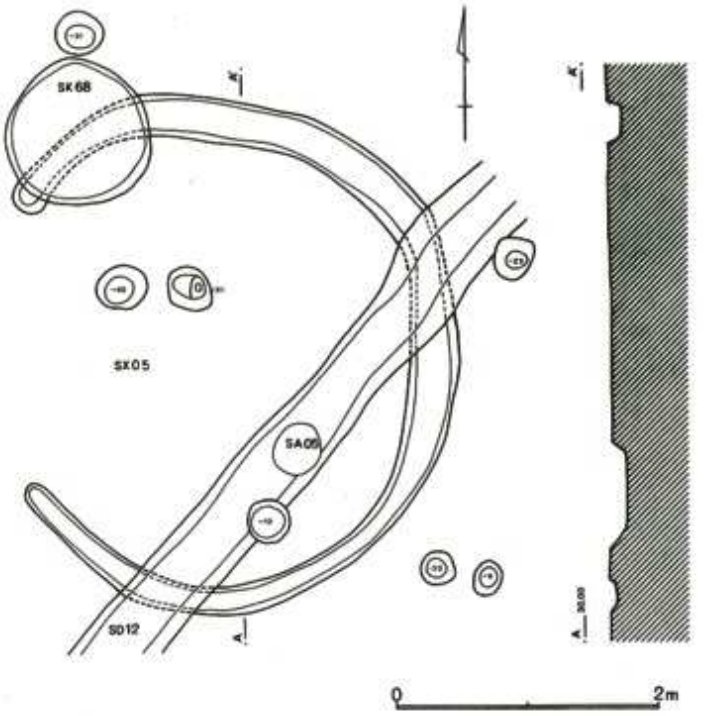
（6） 円形周溝状遺構

C区第1号円形周溝状遺構（第532図）

G・H-23・24区に位置し、第12号溝跡に切られていた。第68号土壙との新旧関係は不明である。形態は円形の溝状を呈し、西側が開口していた。溝幅は20～35cm、深さは10cm程と浅い。

覆土は暗褐色土で、ロームの混入量は比較的少なかった。周溝内部および周囲には小ピットが散在していたが、本遺構に伴うピットは明確にされなかった。平地建物としてよいかどうかは不明である。

出土遺物は7世紀から8世紀代と推定される土師器坏と甕、須恵器坏の小片が検出された。図化可能な遺物はない。



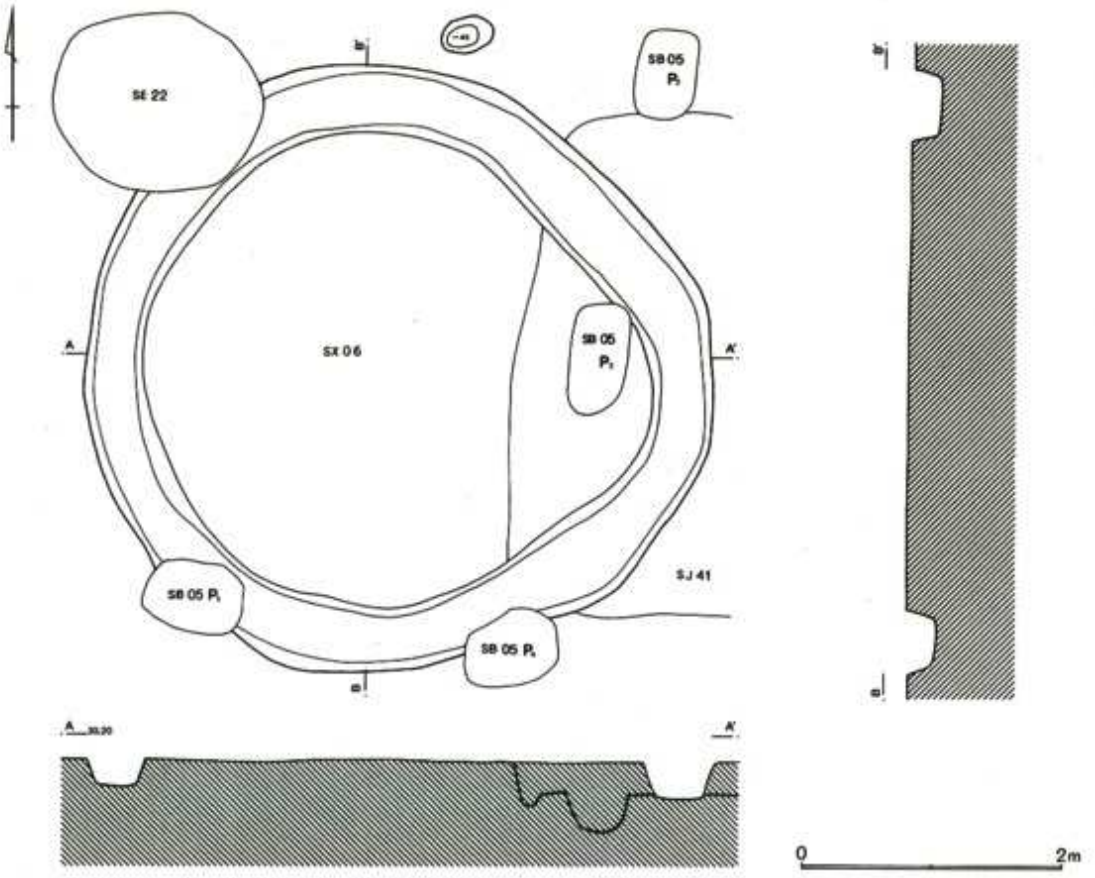
第532図　C区第1号円形周溝状遺構

C区第2号円形周溝状遺構（第533図）

H-22区に位置し、第5号掘立柱建物跡と第22号井戸跡に切られていた。第41号住居跡との新旧関係は、調査所見に拠れば本遺構の方が新しいものと考えられた。溝は円形に全周し、溝幅は50cm前後、深さは20～30cmである。底面は比較的平坦で立上がり角度は鋭い。

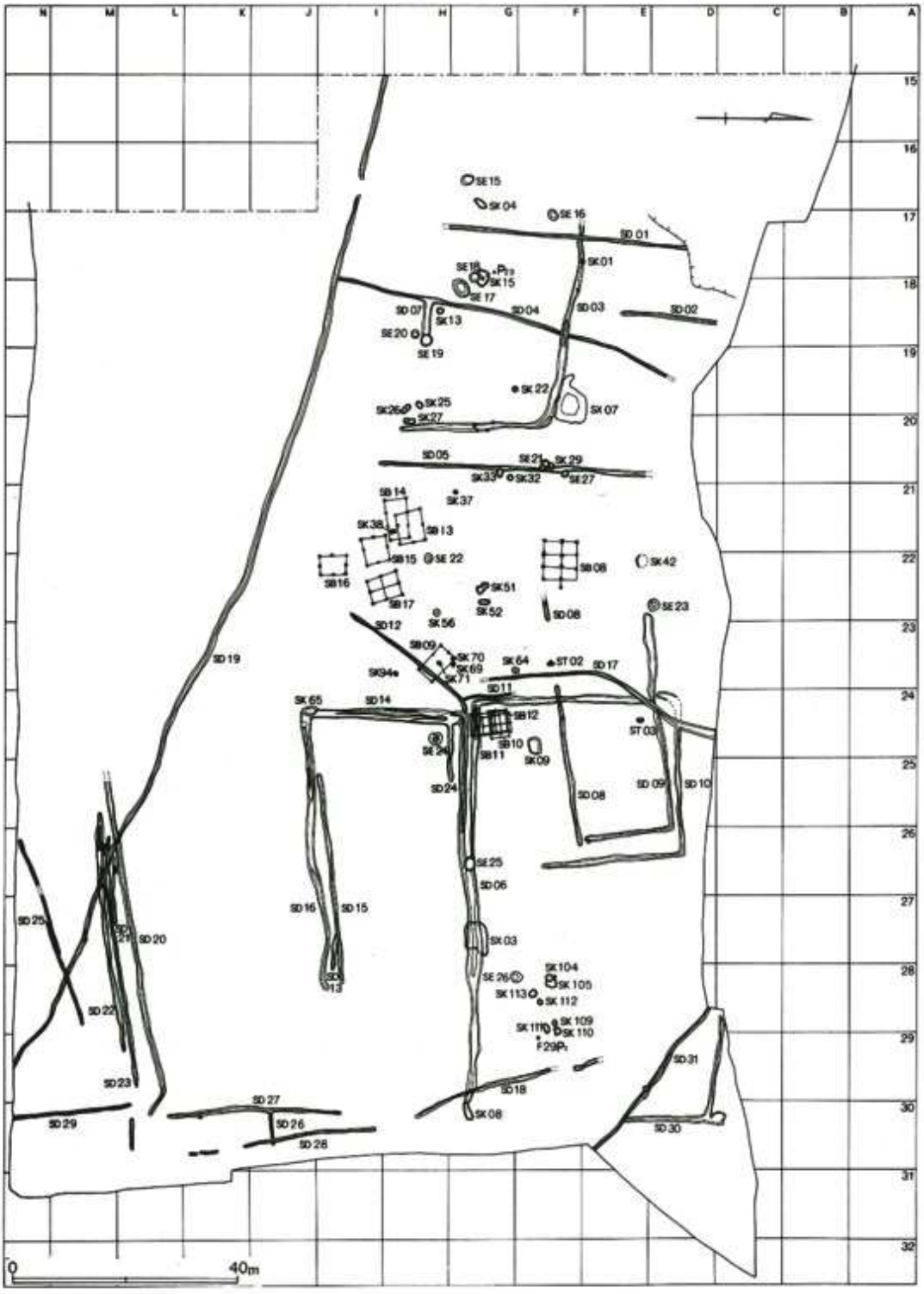
周溝内部および周囲には本遺構に伴うと思われるピットは検出されなかった。また、周溝覆土の状態も不明で、円形の平地建物となる可能性はあるものの断定はできない。現状では遺構の性格は不明とせざるを得ない。

出土遺物は土師器の甕と須恵器甕の細片が数点検出されたが、出土位置からみて一部は掘立柱建物跡柱穴に含まれる。第41号住居跡との切り合い関係から見る限り7世紀中葉以降に位置付けられよう。



第533図　C区第２号円形周溝状遺構

4　中・近世の遺構と遺物



第534図　C区中・近世の遺構配置図

C区で検出された中・近世の遺構は掘立柱建物跡10棟、井戸跡12基、溝跡31条、火葬墓2基、竪穴状遺構2基、敷石遺構2基と、多数のピット群がある。大半の遺構は中世に属するものと推定され、溝跡の一部は近世以降に降るものがある。溝跡は直角あるいは「コ」の字形に屈曲するもの、礫が敷設されたものがあり、おそらく屋敷地を区画する溝跡と推定される。こうした区画溝は調査区西側に1か所、中央から東側に2地点確認された。また、区画溝に東西を囲まれた中央部にも掘立柱建物跡と井戸跡が存在することからみると、この一角もまた居住域であったものと思われる。屋敷地相互の関係については、時期差があるのか併存するのか俄かには決し難い。掘立柱建物跡は10棟が中世段階に属する可能性がある。調査区中央部に集中しているが、本来は区画溝内にも存在したと見た方がよいであろう。なによりも多数の井戸跡と単独ピット群の存在は、この地が長期にわたって営まれた居住区であった証でもある。

出土遺物は全体とすれば少ないが、舶載陶磁器である青磁碗や瀬戸美濃産の陶器、常滑焼の甕と鉢、在地産と推定される鉢や内耳鍋、石臼等、凡そ13世紀から15世紀代を中心とする遺物が検出された。また、井戸跡からは鎌倉時代末期～南北朝期の年号をもつ板碑、木製品などが出土した。特に板碑には南朝年号をもつものと北朝年号を記したものの両者がみられ、当時の政治状況を反映したものとしても注目されるものであろう。

(1) 掘立柱建物跡

C区第8号掘立柱建物跡(第535図)

調査区中央部西寄りのF-21・22区に位置し、第7・8・35・36号の4軒の住居跡を切って構築されていた。建物規模は3×2間で、東西棟の総柱建物と考えられる。P_{12}は柱穴ライン上に乗るか伴うか否かは不明である。もし、伴うとすると庇が付くか、棟持柱になろうか。

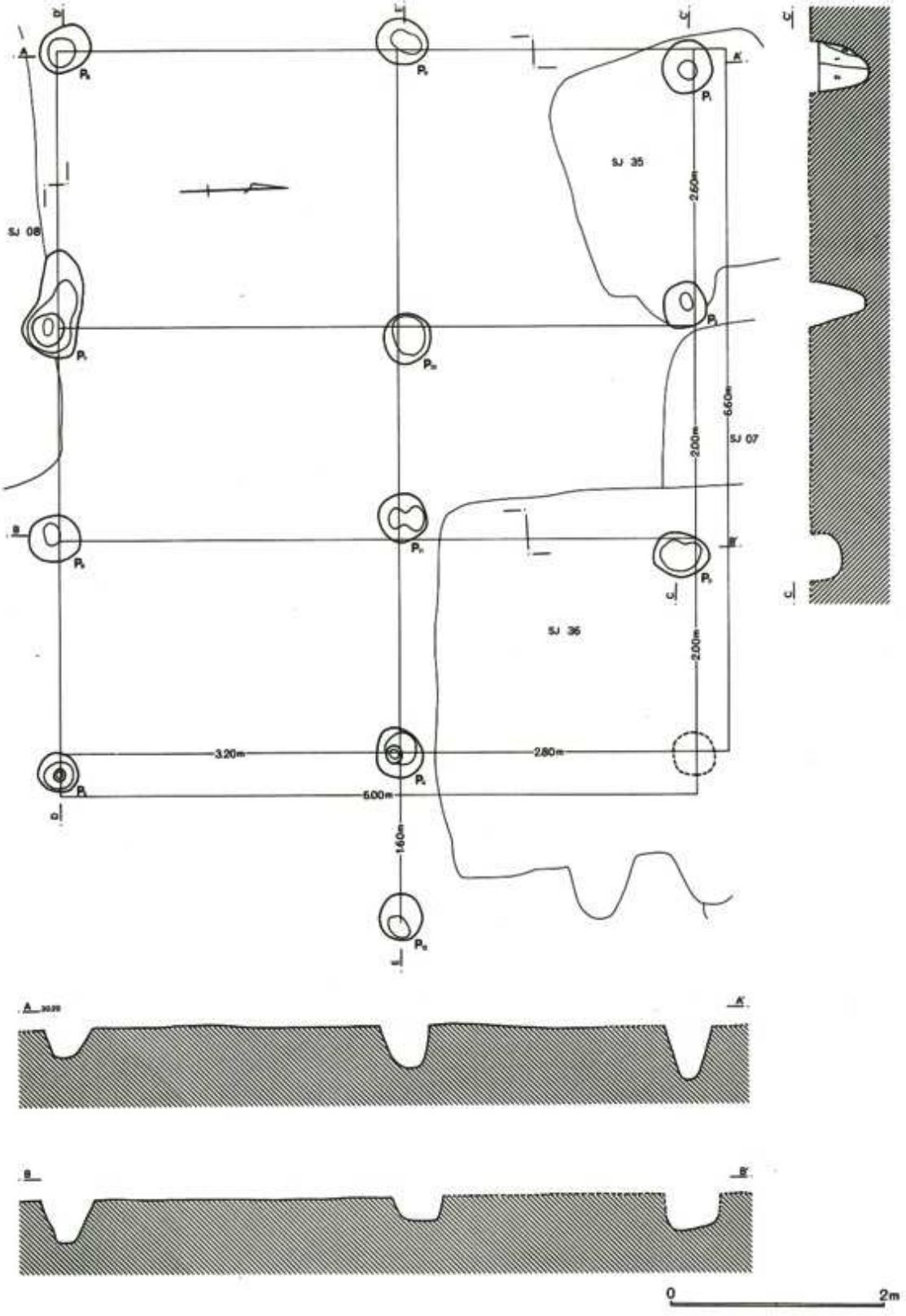
身舎の規模は桁行6.60m、梁行6.00m、柱間寸法は桁行が2.00mと2.60mに分かれ、梁行が2.80mと3.20mとなり、等間にならない。また、梁行の柱間距離が長いために3×2間とはいっても全体に方形に近い形態である。主軸方位はN－88°－Wを示す。

柱穴は円形で径40cm前後と小規模であるが、深さは平面規模の割には深く40cm前後のものが多い。覆土は基本的には2層に分かれ、ほとんどの柱穴で柱痕が観察された。また、東柱(P_{10}・P_{11})は桁行の柱筋はきれいに揃うが、梁行のそれはややずれ気味である。柱穴規模としては他のピットと大差はない。

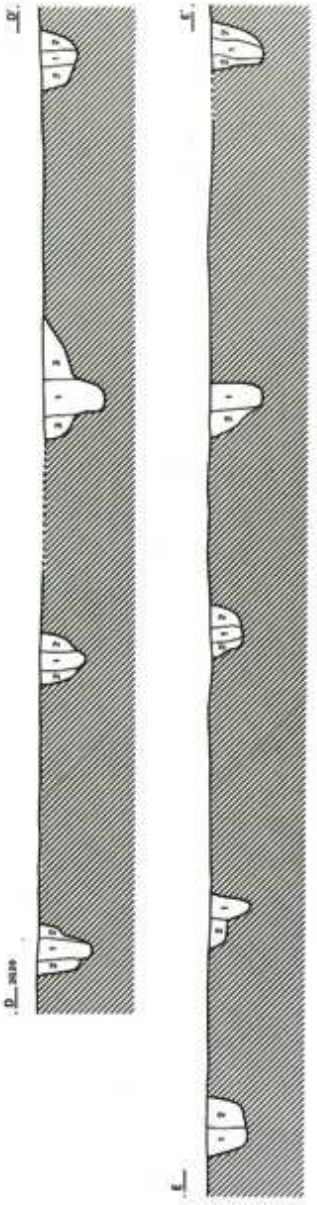
出土遺物は検出されなかった。時期は正確には不明とすべきであろうが、柱穴形態およびその配置から中世段階と見て誤りなかろう。おそらく構造としては高床式で、屋根は切妻の片屋根風の建物となる可能性があろう。

C区第9号掘立柱建物跡(第536図)

G・H-23区に位置する。第47・48号住居跡、第12号溝跡を初め、多数の土壙やピット群が集中する一角にある。一応2×2間の建物となるが、柱穴配置は不規則で欠落するピットもあるなど詳細は不明である。



第535図　C区第8号掘立柱建物跡



1　黒褐色土
　ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量混入。柱痕。
2　暗褐色土
　ローム粒・ロームブロック多量混入。掘方埋土。
3　褐色土
　ローム粒子・焼土粒子混入。

0　2m

規模は桁行5.70m、梁行3.30mを測る。主軸方位はN－46°－Wを示す。

柱穴は円形を基調とし、直径30～40cm、深さは20～40cm程と小規模である。覆土は暗褐色土を主体とするが詳細な状況は明らかにできなかった。

周囲には小ピットが群在する。中には直線的に並び、柱痕の観察されたものも存在することからまだ、複数の建物が存在したものと推定されるが、明確に復元するには至らなかった。

出土遺物はなく時期は不明確であるが、埋土の状況や柱穴規模から見て古代に遡るものではない。周囲のピット群と合わせて中世段階の建物と考えておきたい。

C区第10号掘立柱建物跡（第537図）

調査区中央部のG-24区、第6号溝跡が直角に向きを変えるコーナー内側に位置する。第10～12号の少なくとも3棟の建物がほぼ同一地点に重複して構築されていた。建物規模は2×2間の東西棟の建物と考えられ、桁行4.80m、梁行3.20mを測る。主軸方位はN－83°－Eを示す。

柱穴形態は円形で、直径30cm前後とぜんたいに小さい。柱穴配置は隅柱は規則的であるが、西側梁行の中間柱は中軸線上に乗らず、南側桁行の中間柱が欠けるなど不明な点も残る。

覆土は第1層が柱痕、第2層が掘方埋土である。

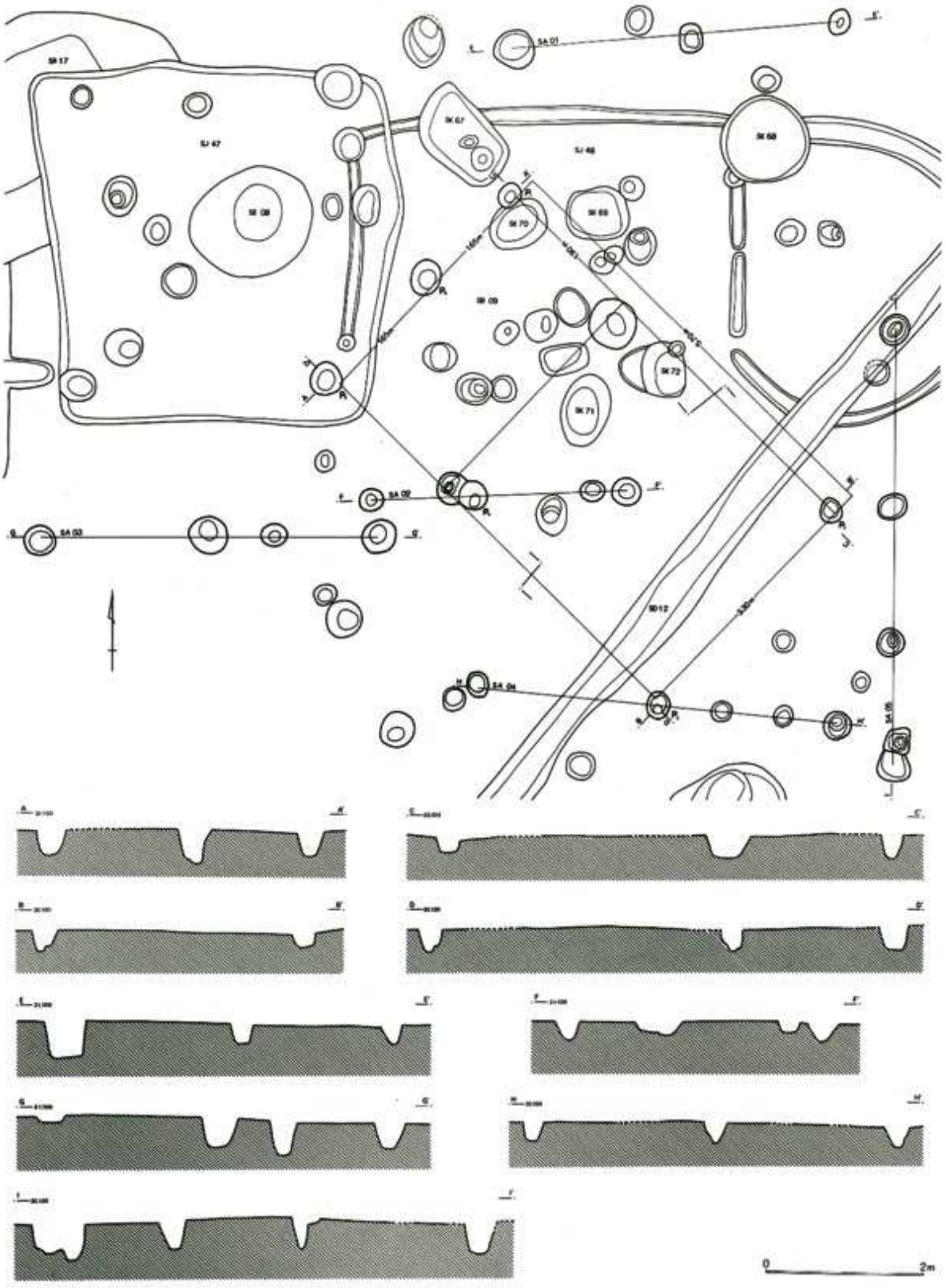
出土遺物はないため正確な時期決定はできないが、中世段階と見て誤りなかろう。

C区第11号掘立柱建物跡（第538図）

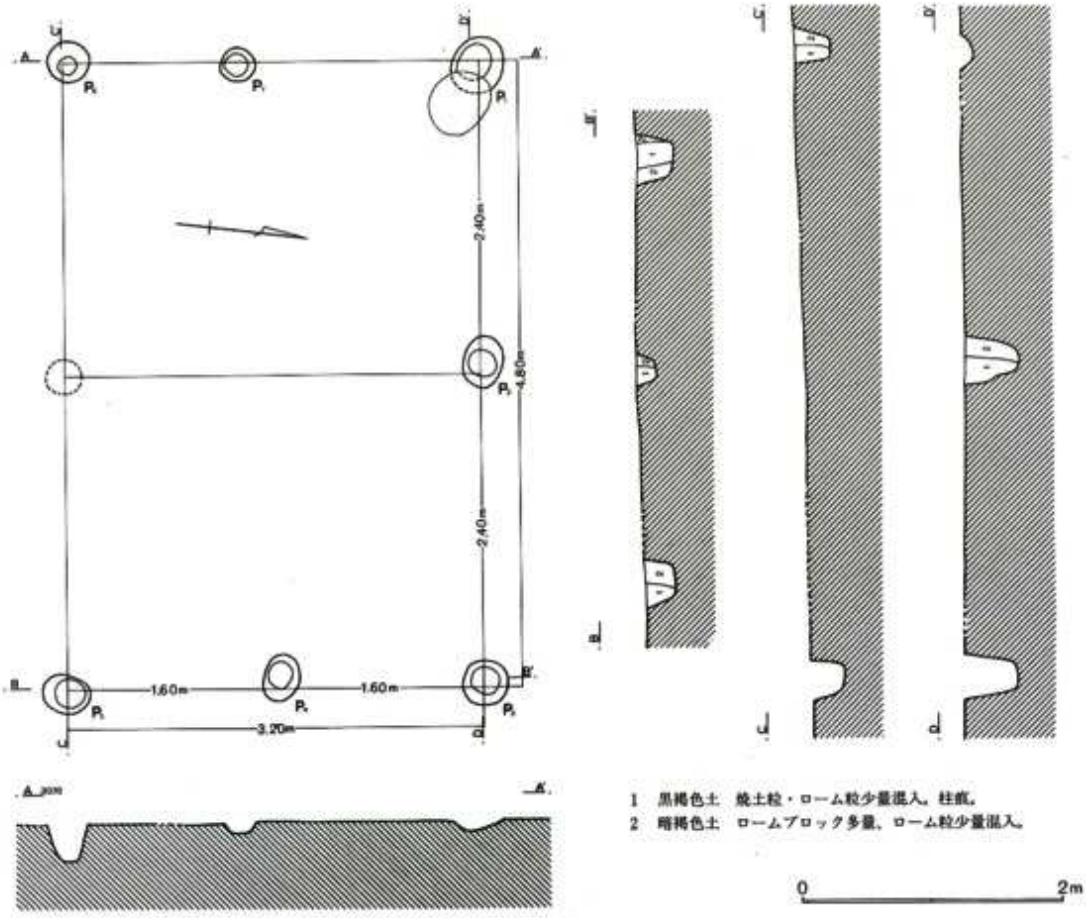
G-24区に位置し、第10･12号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。3×1間の南北棟の建物に復元したが、2×1間の身舎に庇が付くものかもしれない。梁行の中間柱の存否は不明であるが、P_{11}が伴うとすると本来は存在した可能性もある。規模は桁行6.30m、梁行3.60m、主軸方位はN－4°－Wを示す。

側柱のP_2･P_3とP_8･P_9はそれぞれ対応し、2本隣接して堀込まれていた。柱間は等間とならない。

P_2とP_9間のほぼ中軸線上にP_{11}が位置するが、束柱としてよいかは明らかではない。



第536図　C区第９号掘立柱建物跡



第537図　C区第10号掘立柱建物跡

柱穴は円形で、直径は30cm前後と小規模である。深さは一定せず深いもので60cmを測る。

覆土は基本的に3層に分かれる。第1層は上面の被覆土、第2層は柱痕、第3層は掘方埋土である。

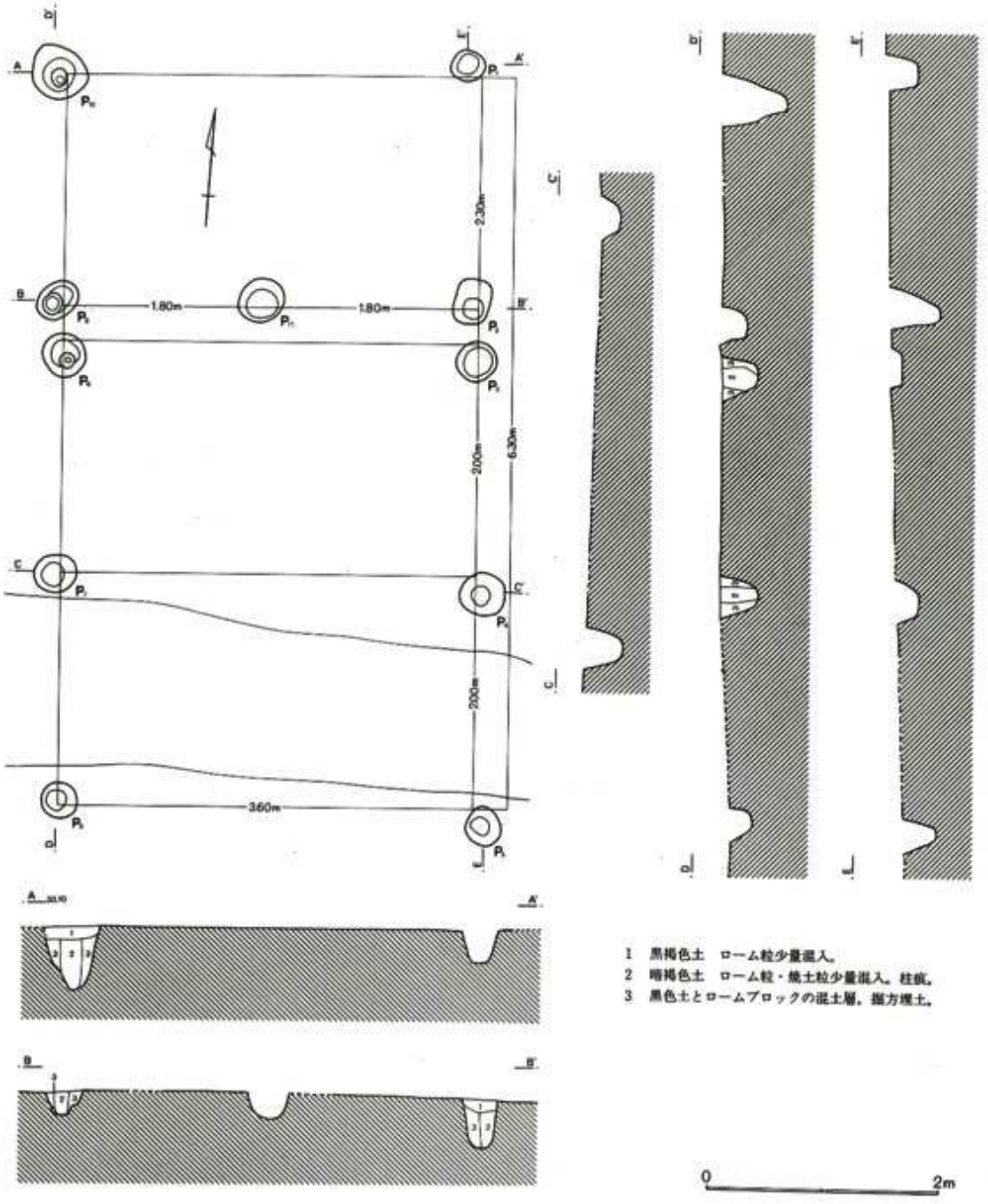
柱穴内からは遺物は検出されなかった。建物の時期は不明確であるが、覆土の状況や柱穴配置から中世と考えておきたい。

C区第12号掘立柱建物跡(第539図)

G-24区に位置する。第10・11号掘立柱建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。3×2間の総柱、あるいは2×2間の総柱建物に庇が付く構造と考えられる。北側の梁行柱列は規模が一回り小さく庇とみることもできるが、身舎の柱間が等間にならない。

一応庇付建物として説明すると、規模は桁行5.00m、梁行3.20m、身舎の桁行は3.20mを測る。身舎部分の柱間寸法は桁行1.80mと1.40m、梁行1.60mで、庇の出は1.80mである。主軸方位はN－8°－Wを示す。

柱穴はP_1が非常に小規模で若干問題視されるが、他のピットは平面形態が概ね円形で、直径30～40cm前後、深さは20～50cm程である。



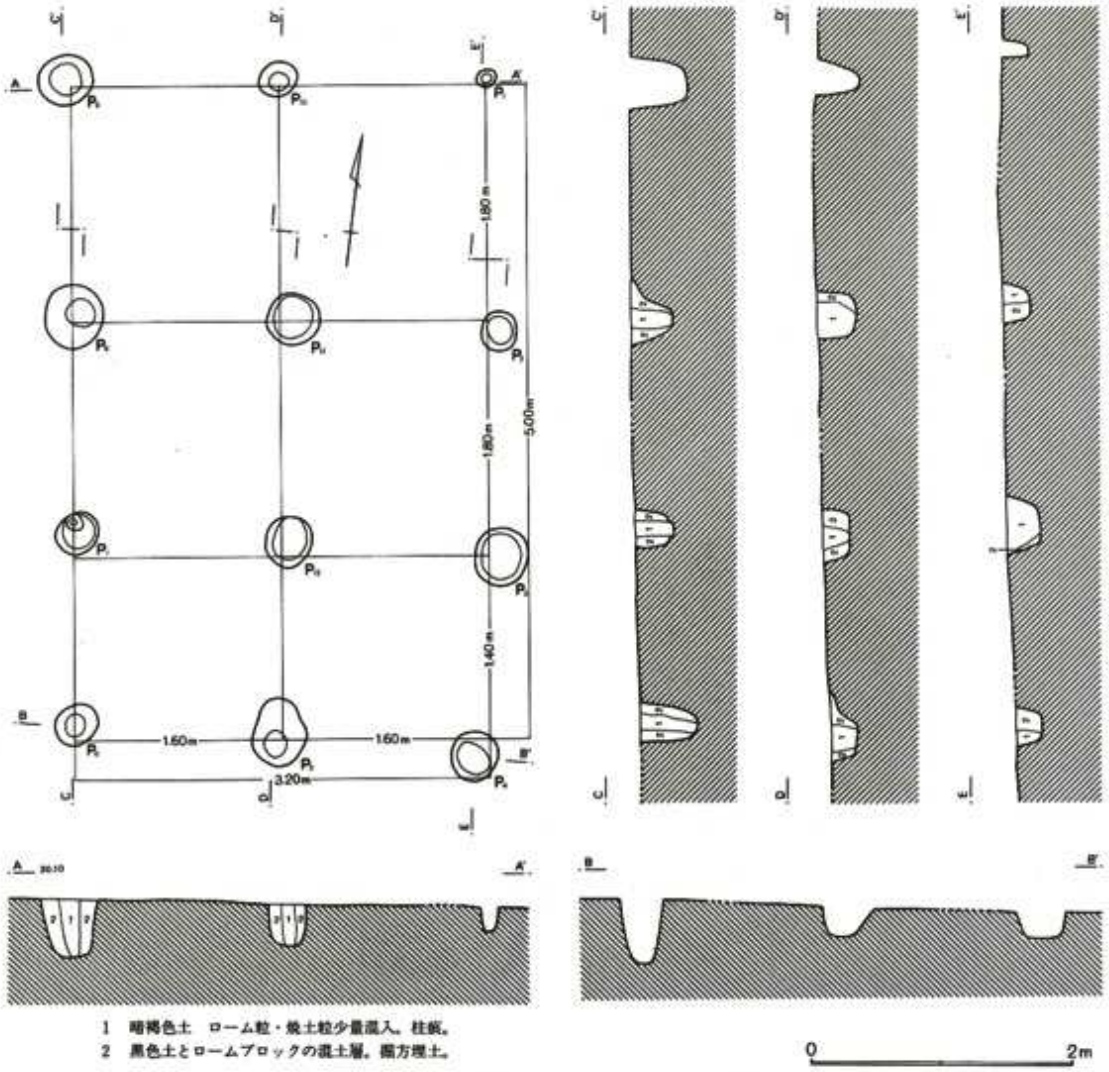
第538図　C区第11号掘立柱建物跡

柱穴覆土は何れも類似した土質で、第1層が柱痕、第2層が掘方埋土である。

出土遺物は検出されず時期を限定することは難しいが、柱穴形態、覆土等から中世の建物と推定しておきたい。

C区第13号掘立柱建物跡(第540図)

H-21区に位置し、第28･29号住居跡を切って構築されていた。第14号掘立柱建物跡とも重複し、



第539図　C区第12号掘立柱建物跡

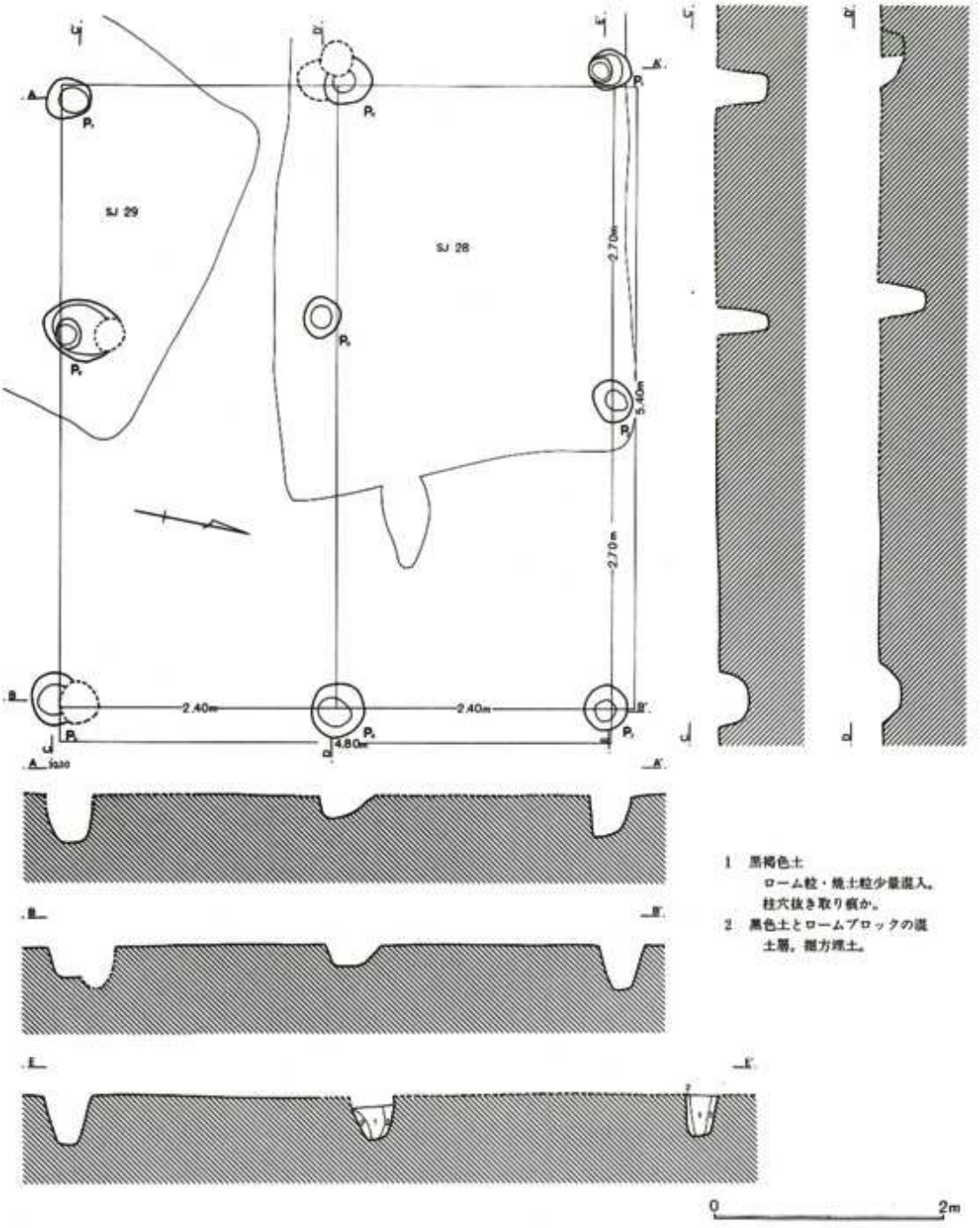
柱穴同士の切り合いから本掘立柱建物跡の方が古いことが判明した。現状では2×2間の東西棟の建物と思われる。規模は桁行5.40m、梁行4.80mで、柱間寸法は桁行2.70m(9尺)、梁行2.40m(8尺)となる。主軸方位はN－79°－Eを示す。

柱穴配置をみると、四隅の隅柱はほぼ矩形に揃っていた。南側桁行の中間柱(P_6)はP_2に対応する位置からずれており、本建物の柱穴と考えて良いか疑問な点もある。またP_9は桁行及び梁行の両方の柱筋から若干ずれており束柱と見るのは難しいかもしれない。

柱穴形態は円形で全体に小規模である。掘り込みは一定しないが深さ20～40cmほどである。

覆土は黒褐色土を基調としていた。第1層は柱痕または柱抜き取り痕、第2層は掘り方埋土と考えられる。

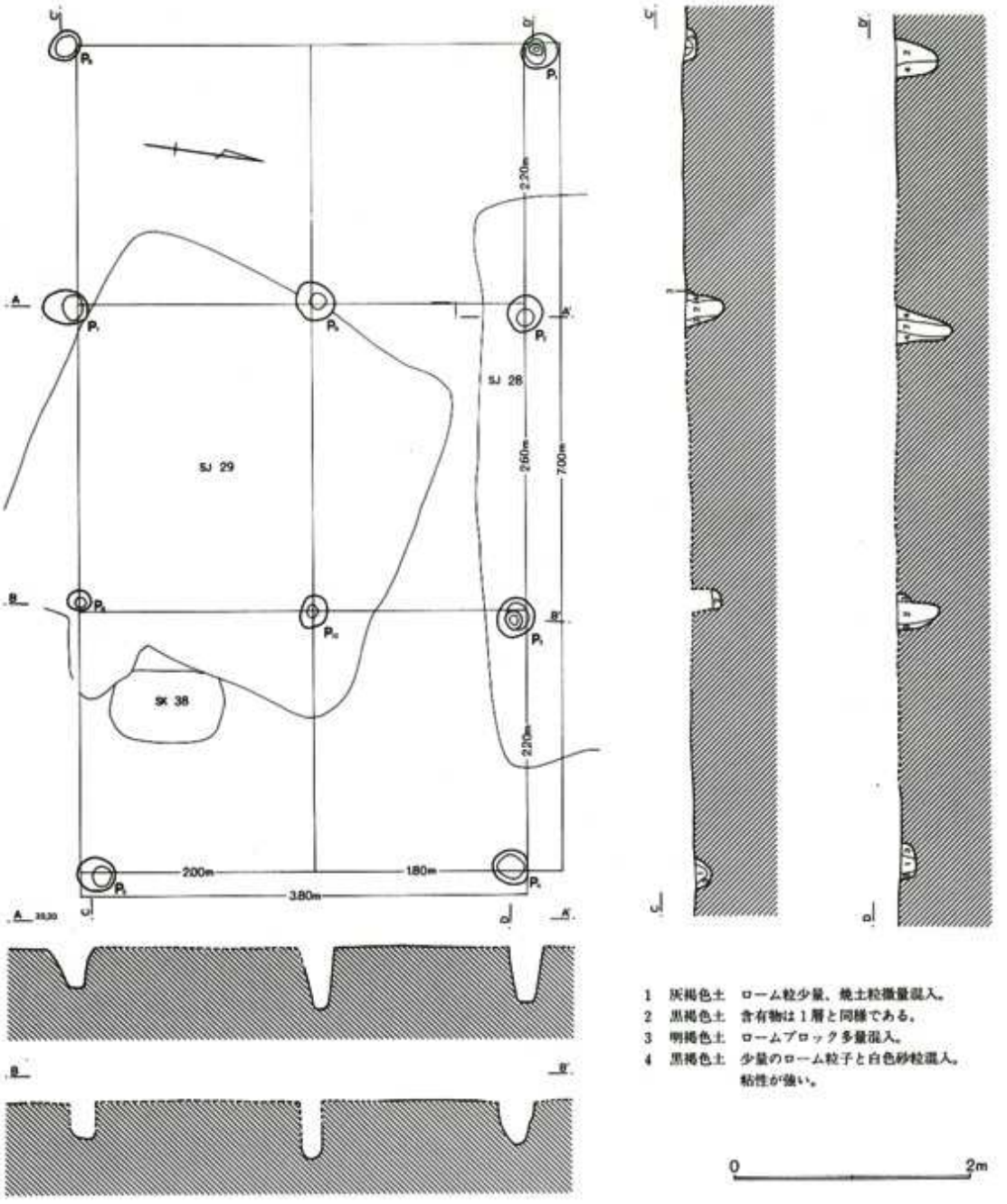
出土遺物はなく時期は不明であるが、古代の住居を切っており、柱穴形態及び建物構造から見て中世段階の建物と推定される。



第540図　C区第13号掘立柱建物跡

C区第14号掘立柱建物跡(第541図)

調査区中央から南西に寄ったH-21区に位置する。第28・29号住居跡、第13号掘立柱建物跡と重複し、その何れよりも新しいことが判明した。規模は桁行7.00m、梁行3.80mである。3×2間(?)の東西棟の建物と思われるが、梁行の中間柱が欠落する。また、東柱と思われるP_9・P_{10}は中軸線から僅かに北に寄るなど建物構造は今一歩明確にできない。ここでは東柱の存在から、一応高床構造

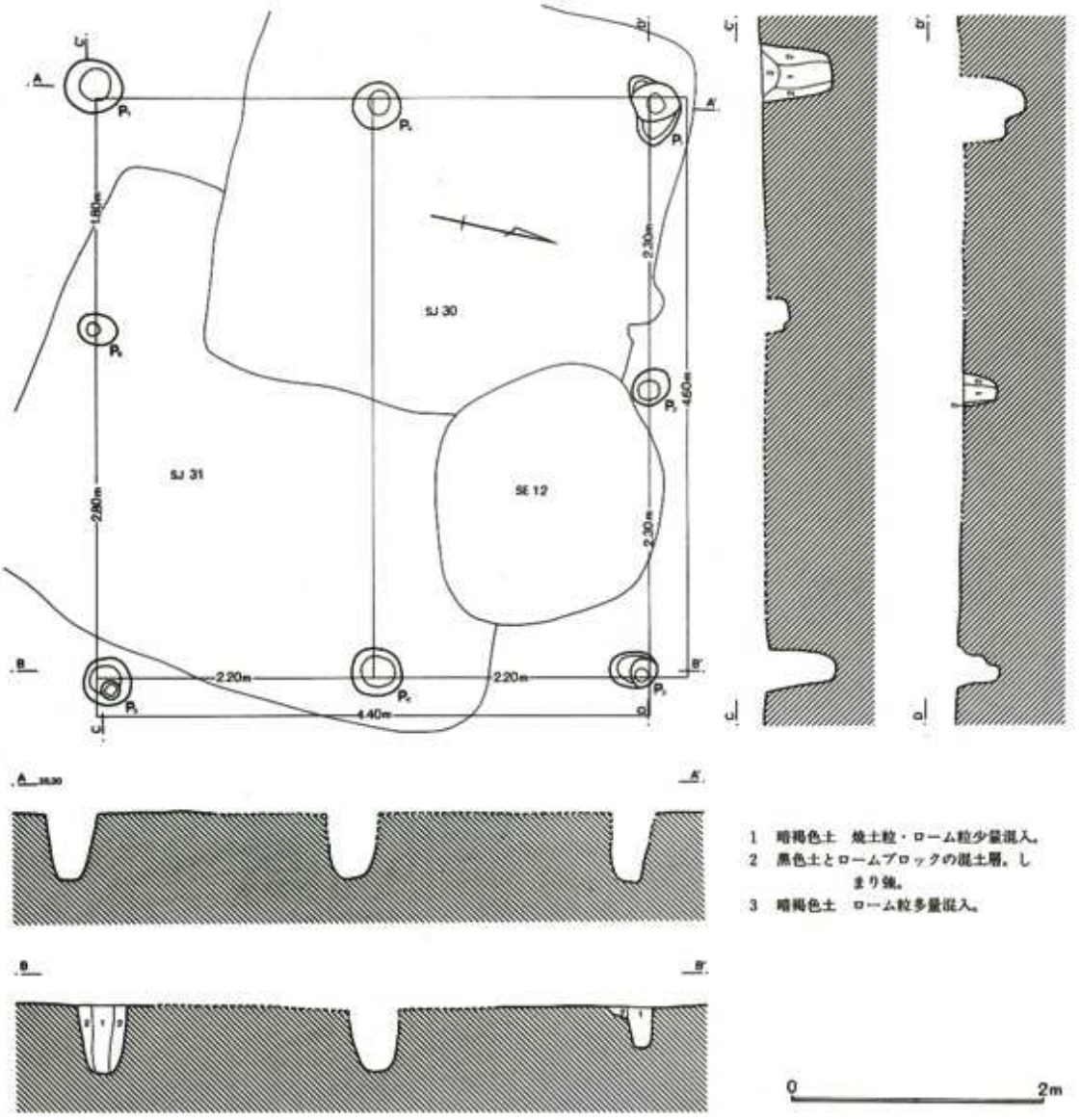


第541図　C区第14号掘立柱建物跡

の建物と考えておきたい。桁行の柱間寸法は2.20mと2.60mの部分があり、等間にならない。主軸方位はN－83°－Eを示す。

柱穴の形態は円形で直径は20～30cmと小規模である。深さは概して隅柱が浅く、中間柱及び束柱が深い傾向にある。覆土は4層に分かれ、第1層及び第2層は柱痕。第3・4層は掘方埋土である。

出土遺物はなく正確な時期は不明である。古代の建物を切っていること、柱穴が小さく柱間距離が長いことなどから見て中世段階の建物とみてよかろう。



第542図　C区第15号掘立柱建物跡

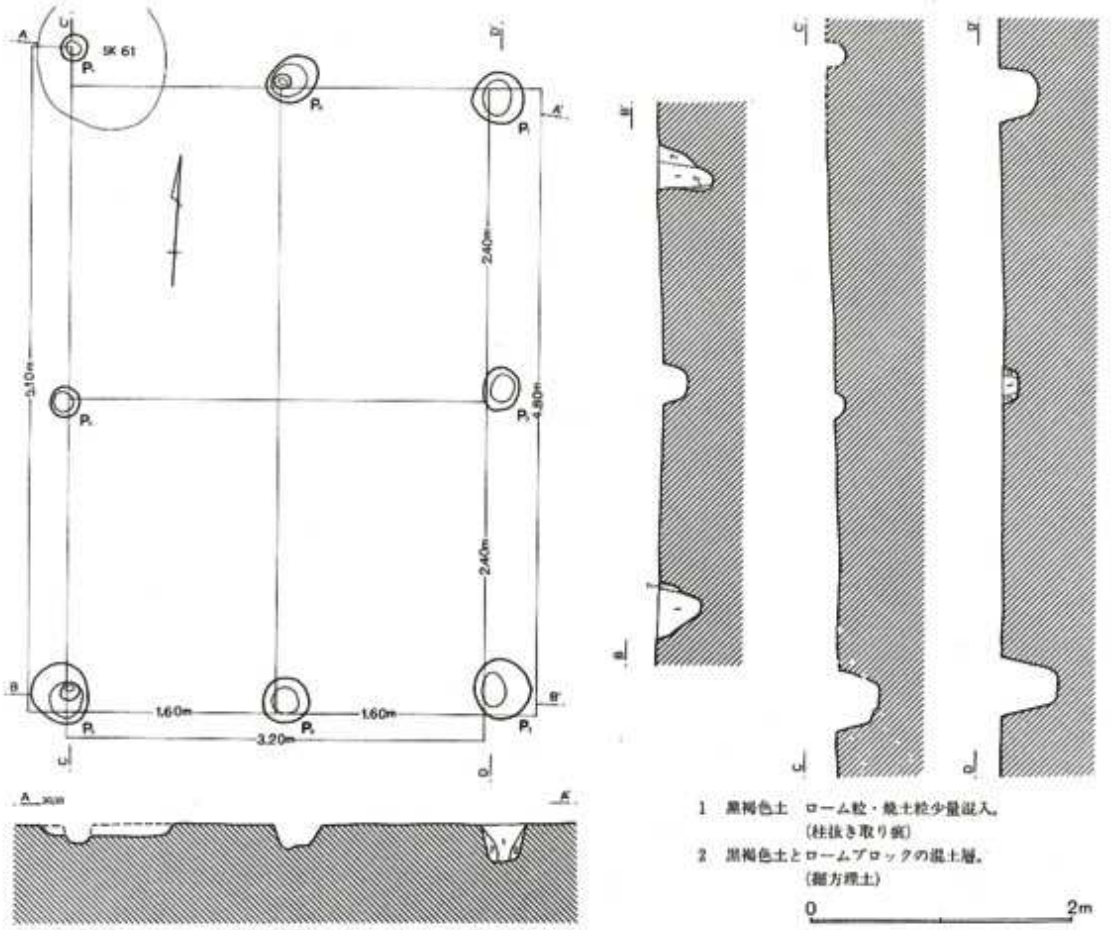
C区第15号掘立柱建物跡(第542図)

H・I-21・22区に位置し、周囲には中世と思われる4棟の掘立柱建物跡が近接して構築されていた。第30・31号住居跡、第12号井戸跡と重複し、新旧関係は本掘立柱建物跡が最も新しい。2×2間の建物で、規模は桁行4.60m、梁行4.40mと形態は方形に近い。柱間寸法は桁行2.30m、北側梁行が2.20mとなる。主軸方位はN－77°－Eを示す。

柱穴は位置は概ね規則的であるが、南側桁行の中間柱(P_6)の位置はP_7寄りにずれており、本建物の柱穴として良いか疑問な点もある。柱穴形態は円形で直径40cm前後と小規模である。深さはP_2・P_6を除くと50～60cmと深い。

覆土は3層に分かれる。第1層は柱痕、第2層は掘方埋土と考えられる。

出土遺物は検出されなかった。時期は不明確であるが古代の住居跡や井戸跡を切っていること、



第543図　C区第16号掘立柱建物跡

柱穴規模や構造などから中世段階の所産と推定しておきたい。

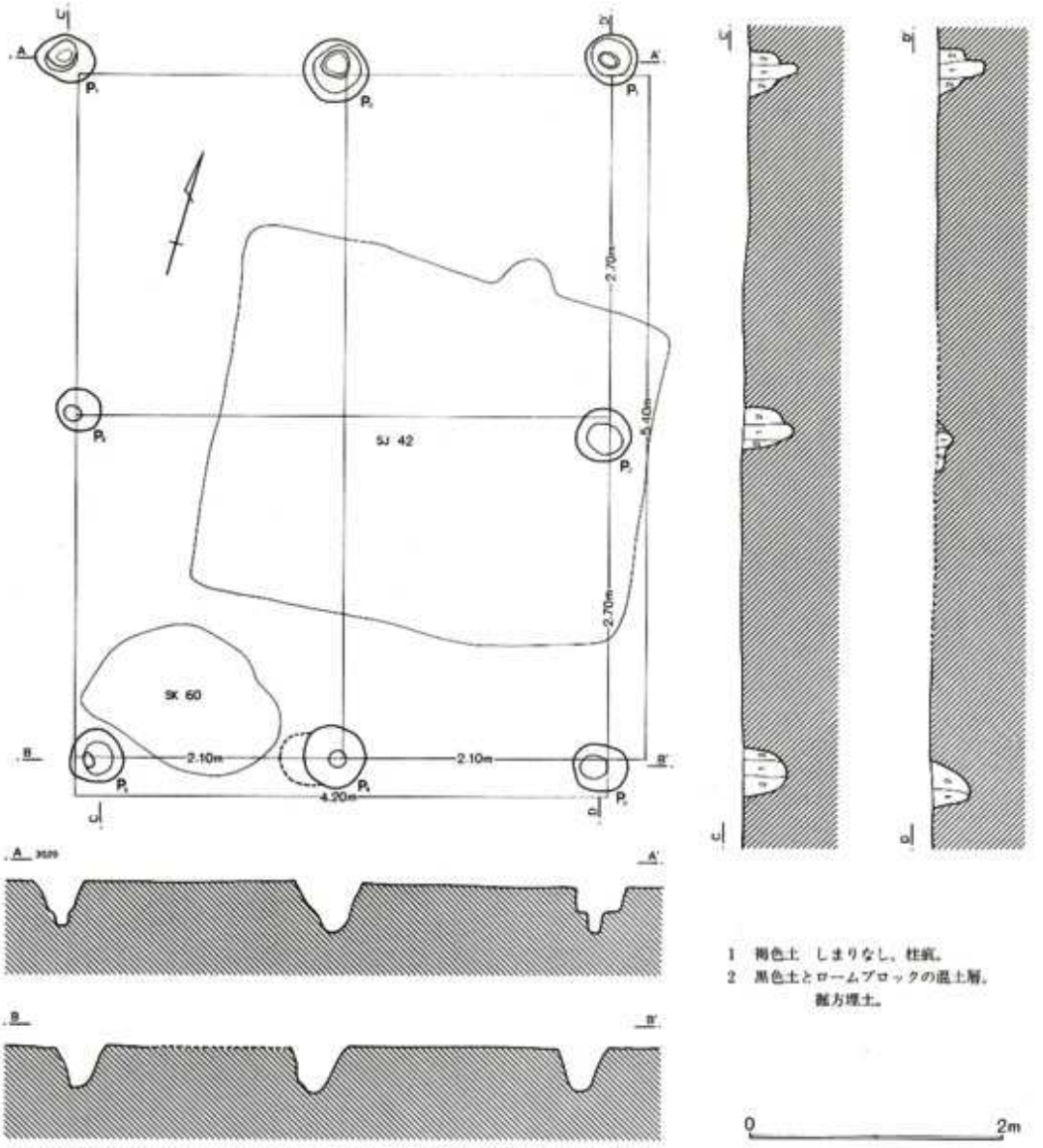
C区第16号掘立柱建物跡(第543図)

調査区中央部南寄りのI-22区に位置し、北側に第15･17号掘立柱建物跡が近接して構築されていた。第61号土壙と重複し、本掘立柱建物跡の方が新しいものと推定された。2×2間の南北棟の建物と考えられる。

北西隅柱(P_7)は、P_1-P_9のライン上から北に外れ、柱穴規模も小さいことから確実に伴うとは言えない。P_7を一応除外した場合、規模は桁行4.80m、梁行3.20m、柱間寸法は桁行2.40m、梁行1.60mを測る。主軸方位はN－3°－Wを示す。

柱穴は円形で直径20～45cm、深さ10～45cmと全体に小規模で浅い。覆土は黒褐色土を基調としており、柱を抜き取ったと思われる痕跡が観察された(第1層)。掘方部分は僅かで黒色土とロームブロックの混土層で形成されていた(第2層)。

出土遺物は検出されず、時期も不明確である。建物構造と柱穴形態、切り合い関係から推して中世の建物と考えておく。



第544図　C区第17号掘立柱建物跡

C区第17号掘立柱建物跡(第544図)

H・I-22区に位置し、第15号掘立柱建物跡が西側2mに概ね主軸を揃えて隣接している。第42号住居跡と重複し、本建物の方が新しいことが判明した。2×2間の南北棟の建物で、規模は桁行5.40m、梁行4.20m、柱間寸法は桁行2.70m(9尺)、梁行2.10m(7尺)となる。主軸方位はN−17°−Wを示す。

柱穴配置は概ね規則的で整っている。柱穴形態は円形で、規模は直径40〜50cm、深さ30〜40cm前後が主体を占めている。

覆土は2層に分かれ、第1層は柱痕、第2層は掘方埋土と考えられる。柱痕は6本の柱穴で確認された。出土遺物は検出されず時期は不明確であるが、中世の建物と考えておきたい。

（2） 竪穴状遺構

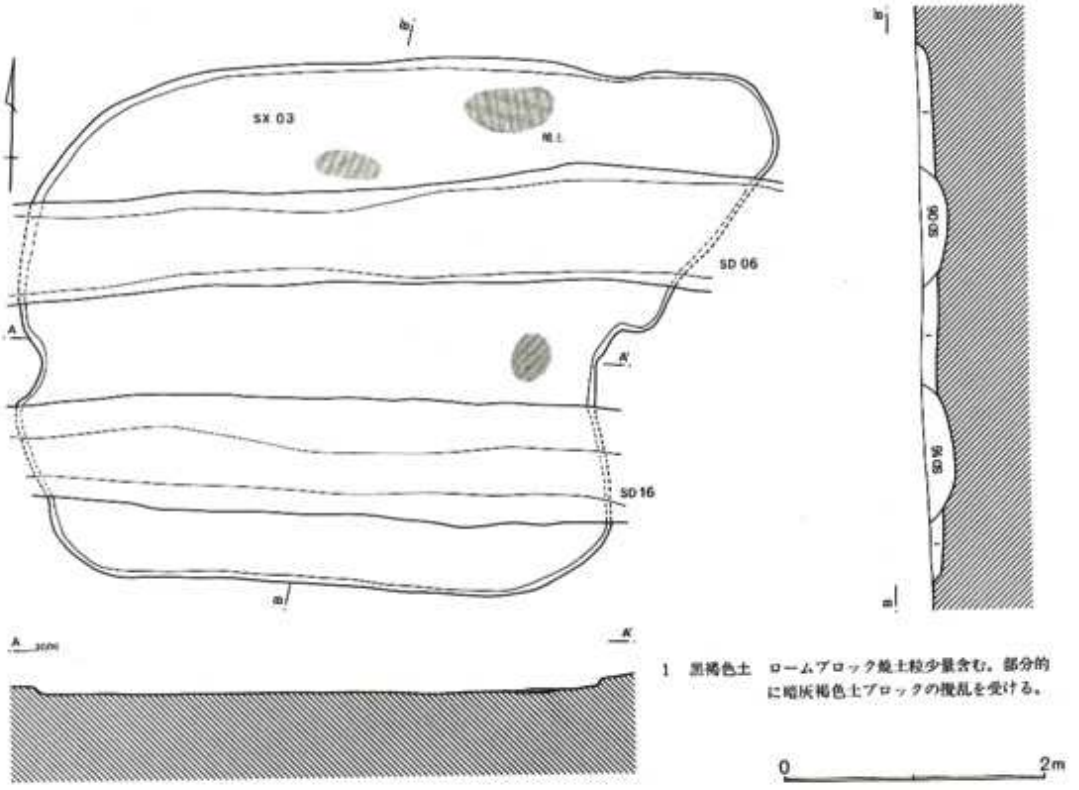
C区第４号竪穴状遺構（第545図）

G-27区に位置し、第６・16号溝跡の攪乱を受けていた。形態は東辺が大きく歪み不整長方形を呈する。規模は長軸5.64ｍ、短軸4.16ｍ、深さ0.14ｍを測る。

床面は概ね平坦である。床面には焼土が３か所散布していたが、特に掘り込みは見られず炉跡とは異なる模様である。

覆土は黒褐色土を基調としており、ロームブロックと焼土粒子が含まれていた。特に大きな土層変化は観察されなかった。

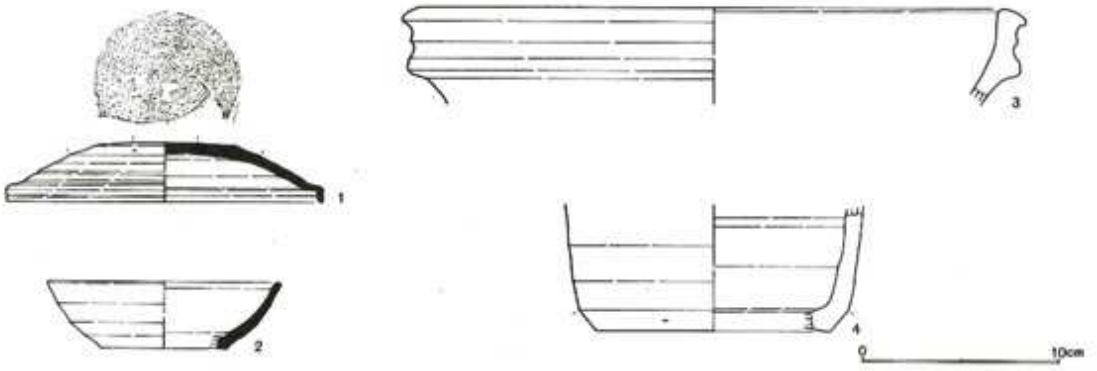
出土遺物は須恵器坏と蓋、瓶、鉢?、在地産鉢の底部がある。第546図３・４は器種が明確ではないが瀬戸美濃産か。遺構の性格は不明で、中世の典型的な竪穴状遺構とも異なる。一応、溝跡との切り合い関係から中世後期～近世初期までには位置付けられるものと考えておきたい。



第545図　C区第４号竪穴状遺構

C区第４号竪穴状遺構出土遺物観察表（第546図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(16.0)	3.0		ABC	B	灰	50%	SX03No.8 覆土(+4cm)
2	坏	(11.6)	3.4	(6.4)	ABC	B	緑灰	25%	SX03No.9 覆土(+4cm) 混入
3	擂鉢	(29.6)	4.9		B	A	にぶい黄橙	10%	SX03No.2 覆土(+10cm)
4	壺		6.4	(12.0)	C	A	にぶい褐	15%	SX03No.3 底面



第546図　C区第4号竪穴状遺構出土遺物

C区第5号竪穴状遺構(第547図)

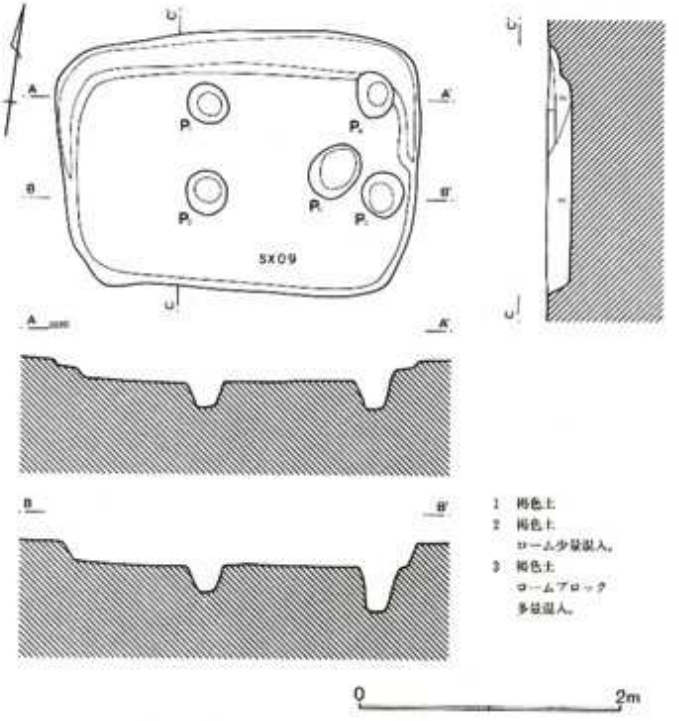
F-24区に位置する。第56・63号住居跡を切って構築されていた。

形態は隅丸気味の長方形で、規模は長軸2.78m、短軸2.00m、深さ0.20mを測る。主軸方位はN－81°－Wを示す。

床面は平坦で、遺構北半の壁際に幅20～30cm程のテラス状の高まりが存在する。覆土は3層に分かれる。第3層は南側に厚く堆積し、ロームブロックが多量に含まれていた。

ピットは5本検出された。P_1～P_4は規則的に配置され伴う可能性がある。P_5の帰属は不明である。

出土遺物はない。一応中世段階のものと考えておきたい。



第547図　C区第5号竪穴状遺構

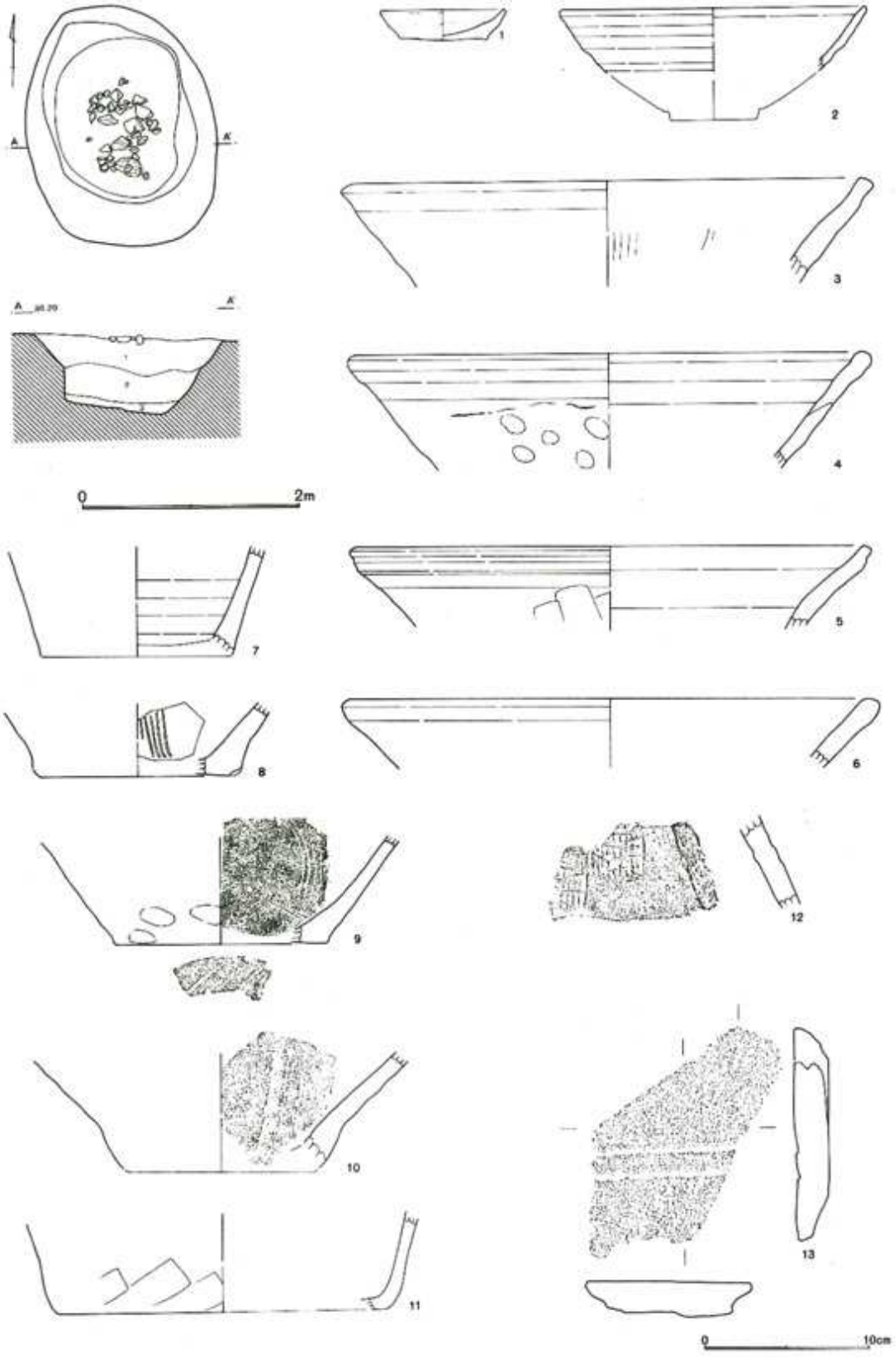
(3)　井戸跡

C区第15号井戸跡(第548図)

調査区西端部のG-16区に位置し、第5号方形周溝墓の南周溝を切って掘り込まれていた。形態は楕円形を呈し、規模は長径2.20m、深さは0.70mと浅い。

覆土は3層に分かれる。第1層は黒褐色土で上面に拳大の礫が多量に散布していた。第2層はローム粒子混じりの暗褐色土、第3層は青灰色粘質土となる。

出土遺物は覆土中から中世陶器が若干検出された。第548図1は土師質の小皿(かわらけ)である。



第548図　C区第15号井戸跡・出土遺物

底部は回転糸切り調整される。2は瀬戸美濃系の平碗と思われる。3～6・8～10は在地系の鉢で、3・8～10には内面に櫛歯状の擂り目が刻まれている。また、9の底部は糸切り痕が残る。7は瀬戸美濃系の瓶か。11は内耳鍋の底部で、傾きに不安を残すが平底気味である。12は常滑系の甕で外面に押印がある。13は板碑の頭部片で、二条線がみえる。

C区第15号井戸跡出土遺物観察表(第548図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小皿	7.5	1.9	5.5	AC	A	橙	95%	覆土　口唇部に油煙付着　底部糸切り
2	平碗	(18.5)	3.9		B	A	白	10%	覆土　全面黄灰色を呈す　灰釉を施す
3	擂鉢	(31.0)	6.4		AI	B	にぶい橙	10%	覆土　在地系
4	鉢	(31.0)	7.0		A	A	灰	20%	覆土　在地系　内面風化
5	鉢	(31.0)	5.1		AI	A	褐灰	5%	覆土　在地系
6	鉢	(31.4)	4.2		AI	B	灰褐	10%	覆土　全体に風化
7	瓶		6.7	(11.6)	B	A	灰白	10%	覆土　梅瓶か？　外面灰釉掛かる
8	擂鉢		4.4	(12.0)	AI	B	灰黄褐	10%	覆土　在地系　内面擂目　底部糸切り
9	擂鉢		6.5	(12.8)	AI	B	浅黄橙	15%	覆土　内面擂目　底部糸切り
10	擂鉢		7.0		AB	B	褐灰	10%	覆土　内面風化著しいが擂目残る
11	内耳鍋		5.9		AI	B	灰	15%	覆土　在地系
12	甕				AB	A	にぶい橙		覆土
13	板碑								長さ13.2,幅12.3,厚さ2.1cm

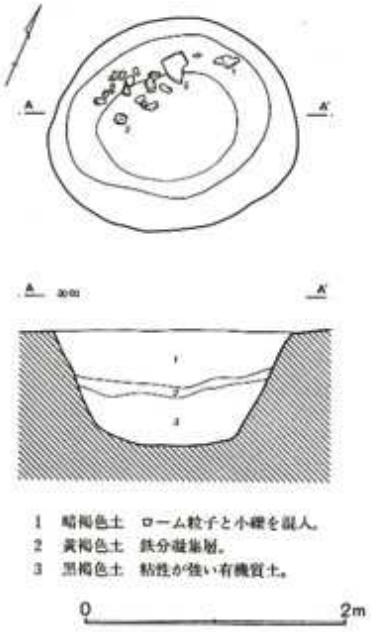
C区第16号井戸跡(第549図)

調査区西端のF-16・17区に位置し、第5号方形周溝墓の北周溝を切って掘り込まれていた。西側には浅い土壙(SK15)が重複しており、本井戸跡の方が新しいものと捉えられたが、一体の施設となる可能性も否定できない。

平面形態は楕円形で、規模は長径1.88m、深さ0.86mを測る。底部はやや窄まり断面逆台形に掘り込まれていた。

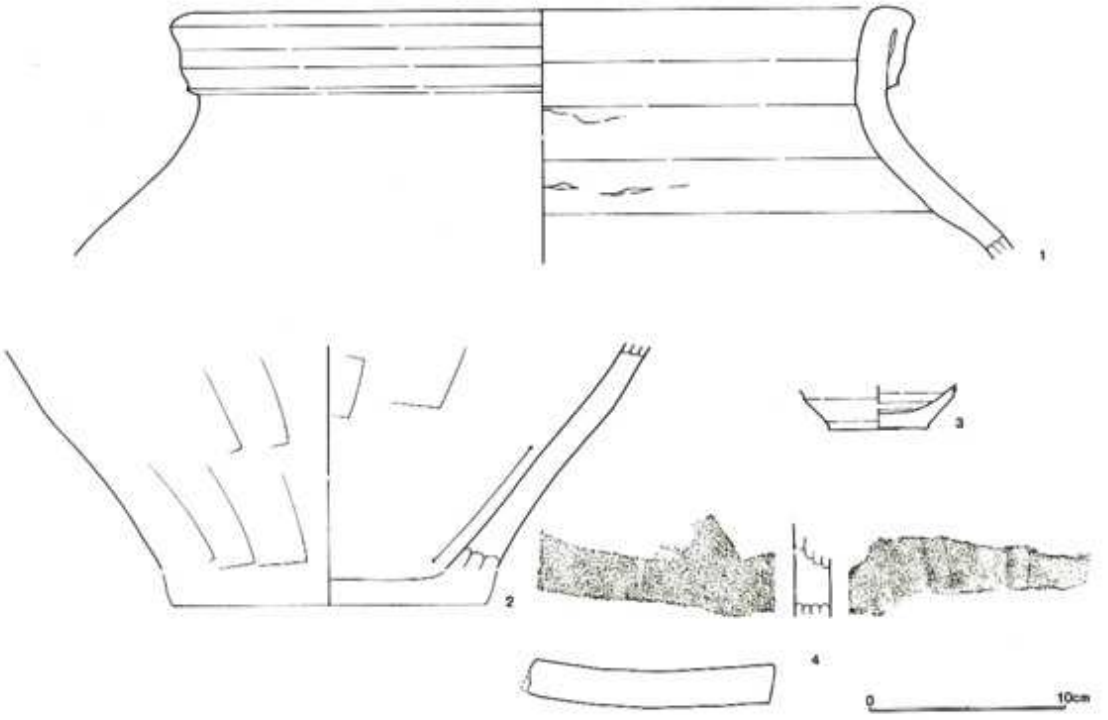
覆土は3層に分かれる。第1層は礫混じりの暗褐色土で出土土器は本層から検出された。

出土遺物は常滑焼の甕(第550図1)と鉢(2)、土師質坏(3)、平瓦(4)が検出された。



第549図　C区第16号井戸跡

1は口縁部は上方への拡張がなくなり、幅広の縁帯が頸部に接着している。常滑系の甕でもかなり新しい様相が認められる。15世紀以降のものであろう。2も常滑系と思われる。体部下半の内面はかなり磨滅している。4の平瓦は通常よりもかなり幅狭である。調整は凸面、凹面ともに箆状工具によるナデ調整が施されている。



第550図　C区第16号井戸跡出土遺物

C区第16号井戸跡出土遺物観察表(第550図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(35.0)	12.9		AD	A	灰黄褐	10%	№24　覆土上層
2	甕		11.2		AD	A	橙	20%	№23　覆土上層
3	皿		2.2	5.0	J	A	浅黄橙	60%	SR05内-№25　覆土上層　底部糸切り
4	平瓦				ABE	C	灰白		SR05内-覆土

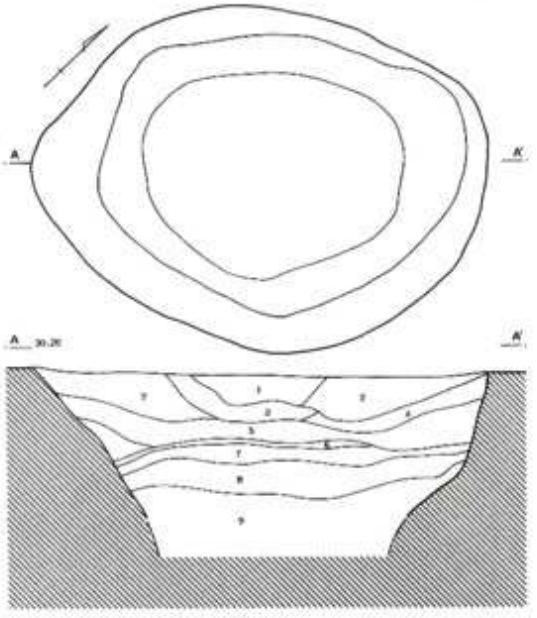
C区第17号井戸跡(第551図)

G-17･18区に位置する。倒木痕の攪乱を介して北西側には第18号井戸跡が近接している。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径3.50m、深さは1.10m以上となる。底面までは湧水が激しく完掘できなかった。

覆土は9層まで確認した。第6層は鉄分の凝集した層で、以下は青灰色のシルト質土に移行していた。木製品や木の枝等の有機質は第8・9層から、土器類は6層以下から出土した。板碑の出土位置は不明である。

出土遺物は土釜(第552図1)、壺(2・7)、鉢(3～5)、瀬戸美濃系の摺鉢(8)、常滑焼の甕(6)と平瓦(10)、板状木製品(9)、板碑(第553図11･12)がある。

6の肩部には「大」の押印が残る。8の内面には5条以上を一単位とする摺目が2単位確認できる。10の平瓦は凹面糸切り後ヘラナデ、凸面はヘラナデ調整される。第18号井戸跡の破片と接合した。11の板碑には加工痕は残されていない。12は板碑の基部と思われ、裏面には鑿による加工痕が明瞭に残されていた。



1　暗灰褐色土　灰色粘土ブロック・小礫・ローム粒子と焼土粒子を混入。
2　暗褐色土　礫・ロームブロック・焼土粒子混入。
3　暗灰褐色土　多量の灰色粘土ブロックと少量の焼土ブロックと炭化粒子を混入。
4　暗褐色土　ロームブロックと灰色粘土ブロック少量混入。
5　暗褐色土　焼土粒子・ロームブロックと砂粒を少量混入。
6　橙褐色土　鉄分凝集層が変色したものか。砂粒少量混入。
7　青灰色土　砂粒を少量混入。
8　暗青灰色土　砂粒と礫を混入する。
9　暗青灰色土　大小の礫と多量の砂粒が混入する。

0　2m

第551図　C区第17号井戸跡

C区第17号井戸跡出土遺物観察表(第552・553図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	土釜	(15.6)	4.4		ABI	A	灰黄	10%	覆土　把手部で欠損し鍔が巡るか否か？
2	壺	(23.0)	8.0		AB	B	灰黄	10%	覆土　風化著しく整形不明
3	鉢	(32.0)	5.5		AB	A	灰黄	20%	覆土　やや硬質感あり
4	鉢	(30.4)	11.0	(11.0)	AB	A	褐灰	15%	覆土　外面部木ロナデ　口縁内面風化
5	鉢	(31.5)	8.5		AB	B	灰	15%	覆土
6	甕				ABJ	A	灰褐		覆土　肩部片　「大」の押印あり
7	壺		6.8	(13.0)	AB	B	灰褐	40%	覆土　内面磨滅　在地系
8	擂鉢				A	A	橙		覆土　外面剥落
10	平瓦				ABE	B	灰		覆土
11	板碑								覆土　長さ43.3,幅18.6,厚さ3.8cm
12	板碑								覆土　長さ31.4,幅19.5,厚さ4.5cm

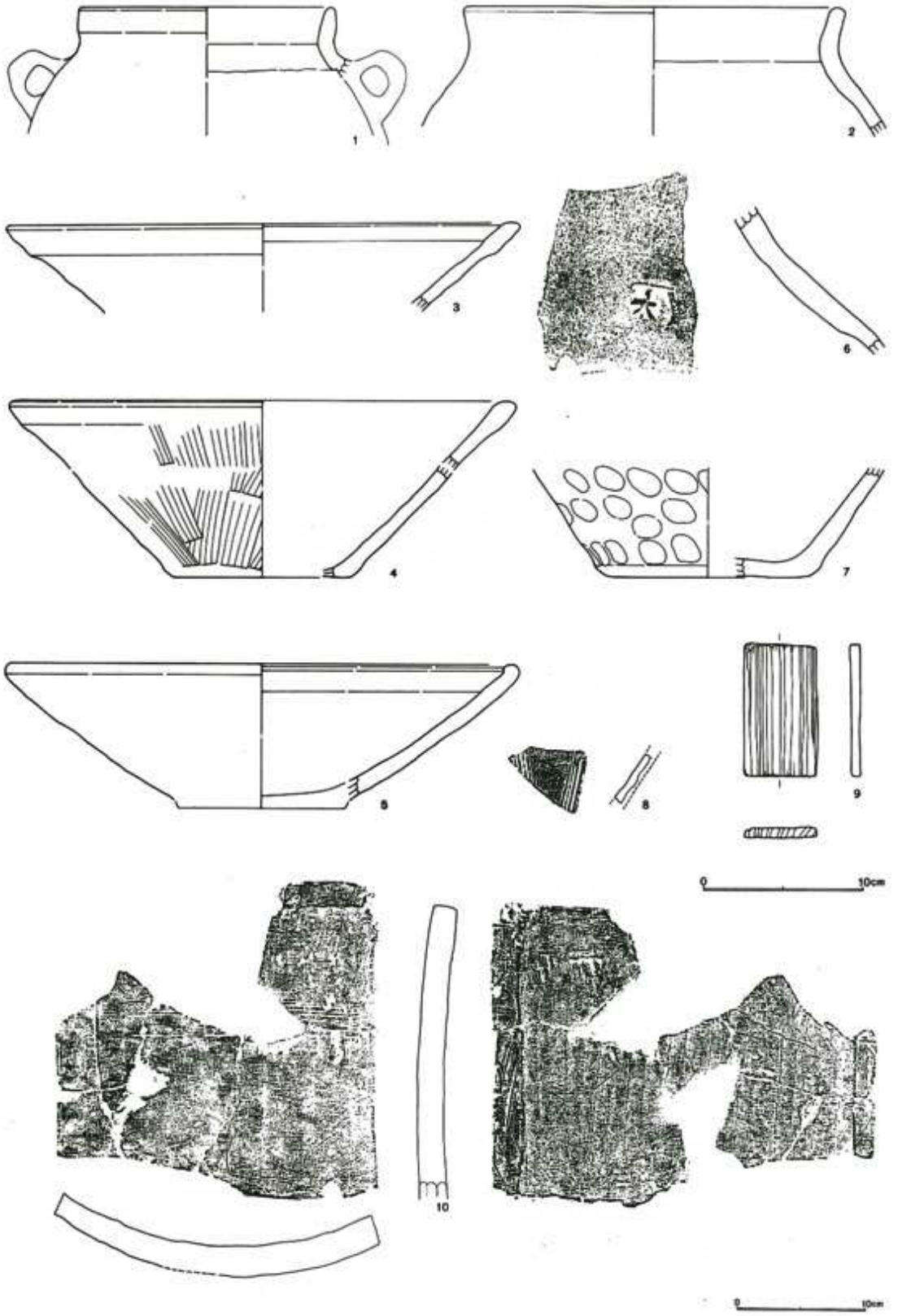
C区第18号井戸跡(第554図)

G-17・18区に位置し、第15号土壙を切っていた。形態は円形で、規模は直径1.82m、深さ0.95mを測る。底部はやや窄まり断面逆台形に掘り込まれていた。

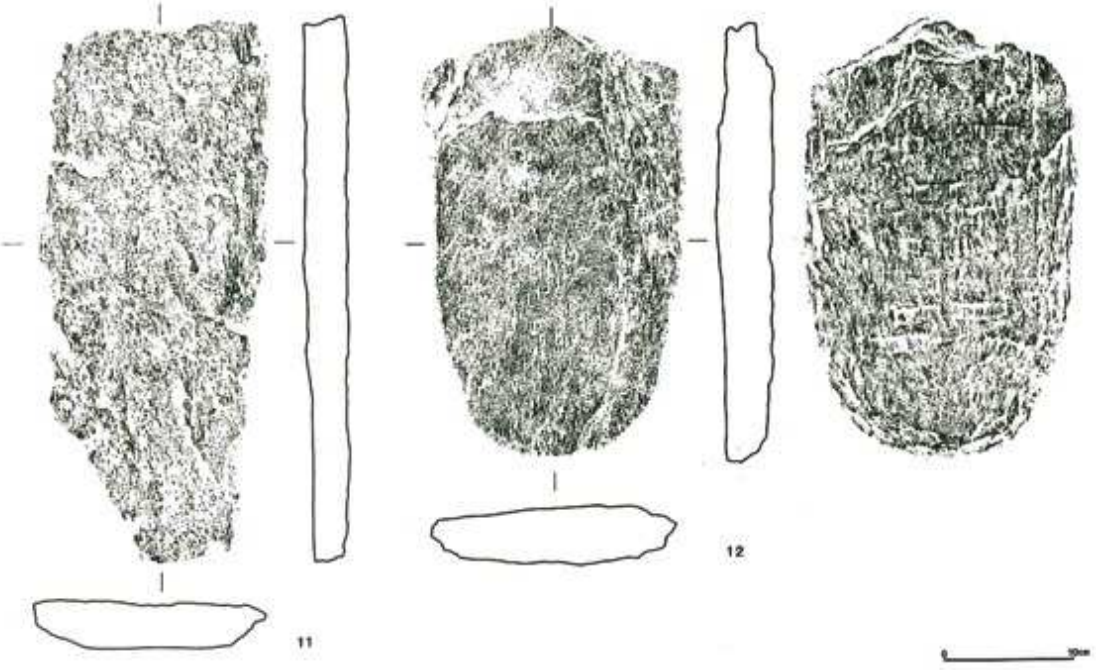
覆土は6層に分かれる。第5層に砂礫が多量に含まれ、以下は暗青灰色に還元したシルト質土に移行していた(第6層)。

第7～10層は土壙埋土である。断面観察から井戸跡よりも古いものと判断されたが、或いは井戸跡に付随する施設の可能性もある。

出土遺物は瀬戸美濃系緑釉小皿(第555図2)、在地産の鉢(3)、甕(4)、軒平瓦(5・6)、板碑(1)



第552図　C区第17号井戸跡出土遺物（1）

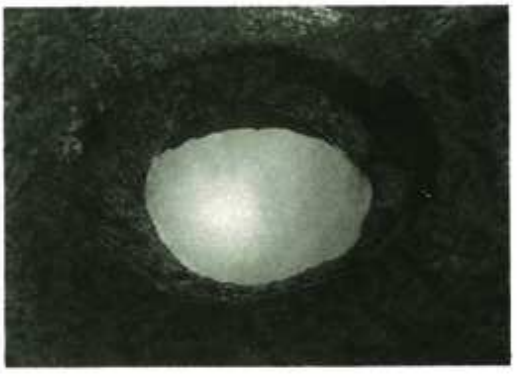


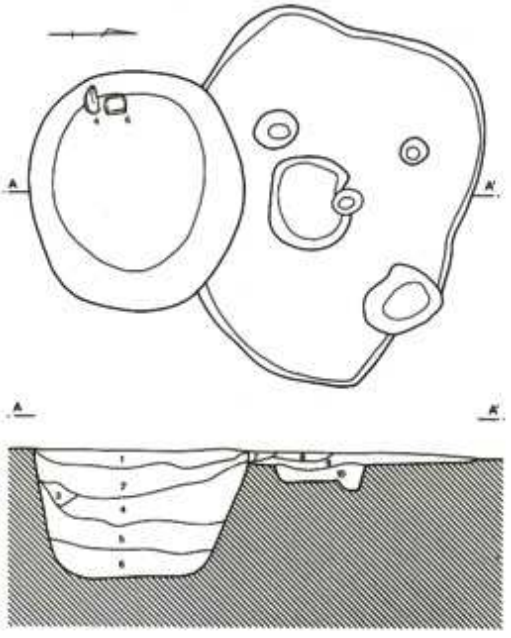
第553図　C区第17号井戸跡出土遺物(2)

がある。

板碑は基部を一部欠いているが比較的遺存状態の良いものである。山型と二条線を備え、正平六年三月(1351年)の南朝年号が刻まれていた。

軒平瓦の瓦当文は剣頭文と思われる。凹面には糸切り痕と板枠状の痕跡が残る。また、表面には部分的に砂が付着していた。凸面はヘラナデ及びナデ調整される。

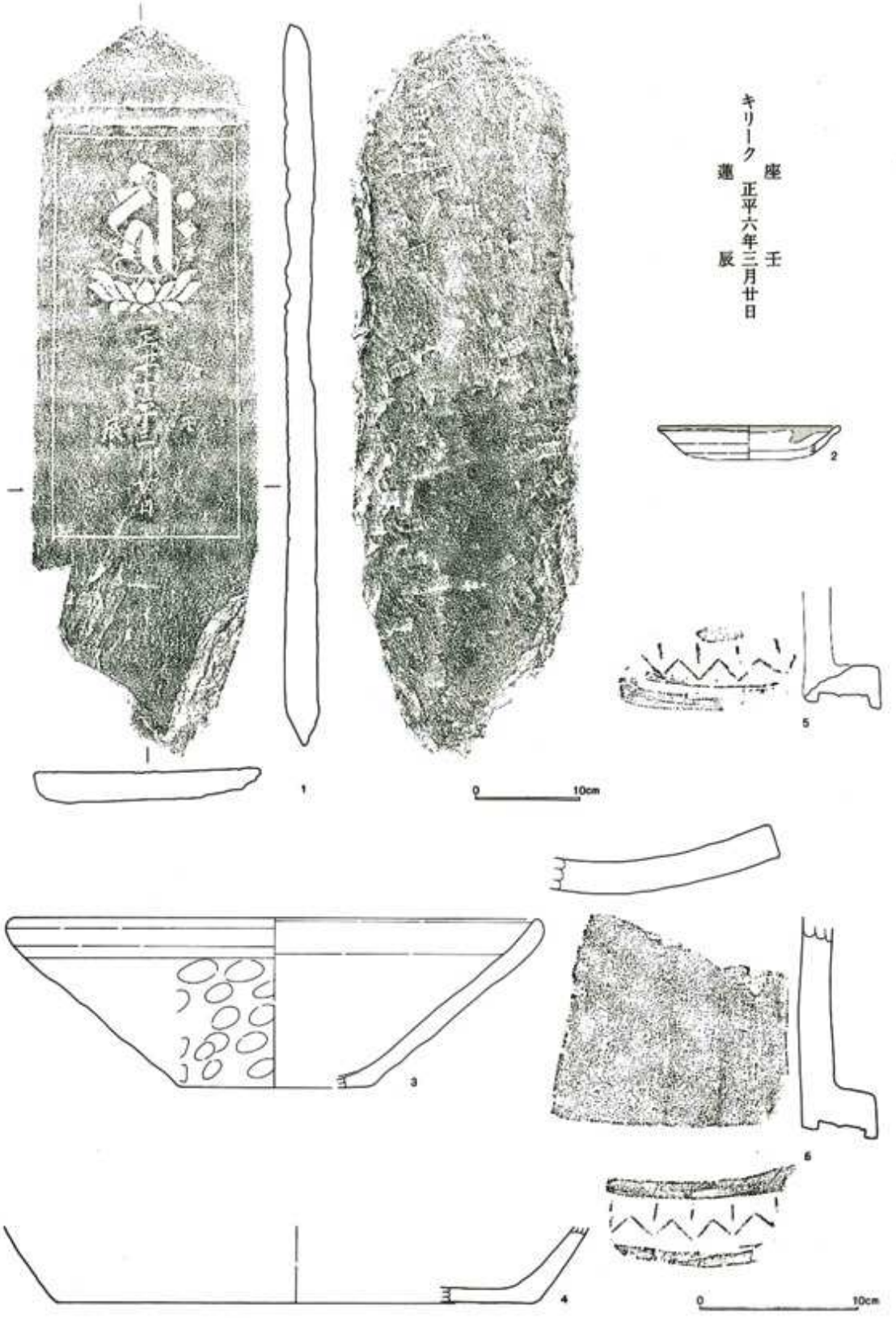




1　暗黄褐色土　ローム粒子・焼土粒子を少量含む。
2　暗黄褐色土　ロームブロックと少量のローム粒子含む。
3　灰黄褐色土　砂質で礫を混入する。
4　黒褐色土　ロームブロックと微量のローム粒子混入。
5　褐色土　砂礫を多量に含むシルト質土。
6　暗青灰色土　粘性に富むシルト質土。有機物混入。
7　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多量に混入。
8　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量含む。
9　暗褐色土　ロームブロック多量含む。小礫混入。
10　暗灰褐色土　ロームブロックと焼土粒子含む。

0　2m

第554図　C区第18号井戸跡



第555図　C区第18号井戸跡出土遺物

C区第18号井戸跡出土遺物観察表(第555図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	板碑								覆土　長さ70.0,幅21.8,厚さ3.1cm
2	緑釉皿	(11.2)	1.8		B	A	灰白	25%	覆土　緑釉小皿　口縁部に灰釉掛かる
3	鉢	(33.2)	10.6	(12.0)	ABI	B	褐灰	15%	覆土　在地系擂鉢　内面下半磨滅
4	壺		4.8	(30.0)	AI	B	にぶい橙	20%	覆土　外面器壁剝落　器種不明確
5	軒平瓦				ABE	B	灰		覆土
6	軒平瓦				ABE	B	灰		No.1　覆土

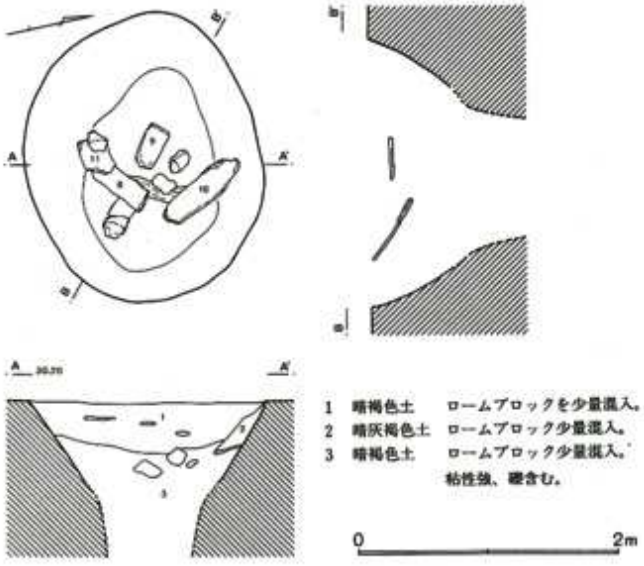
C区第19号井戸跡(第556図)

H-18区に位置する。第7号溝跡が本井戸から西に延びていた。切り合い関係は確認されず、両者は関連するものかもしれない。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.20mである。湧水が激しく底面まで完掘できなかった。

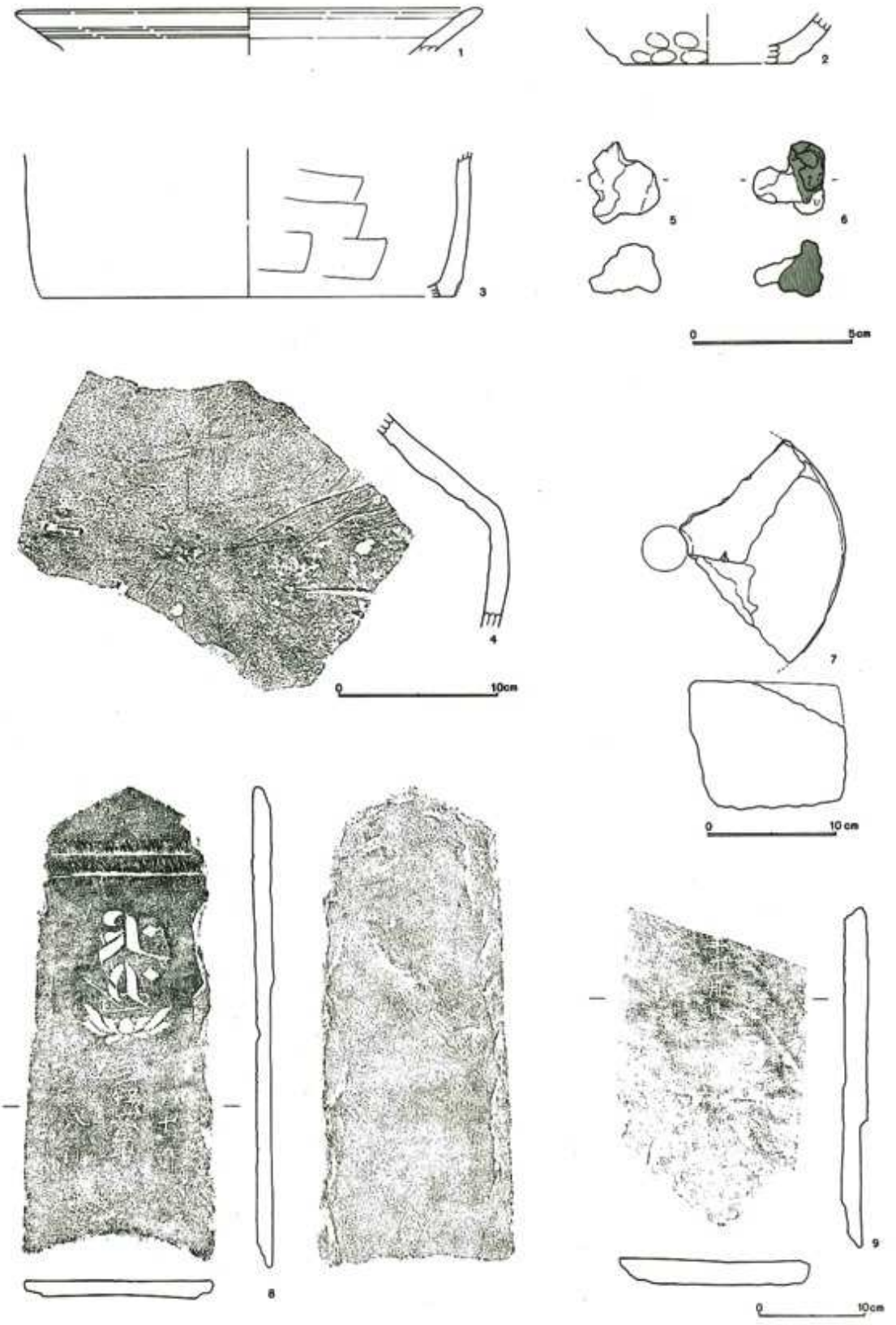
覆土は3層まで確認され、第3層中には礫の混入が目立った。

出土遺物は在地産の鉢(第557図1・2)、内耳鍋(3)、常滑焼の甕(4)、鉄塊(5・6)、石臼(7)、板碑(第557図8・9、第558図10・11)がある。

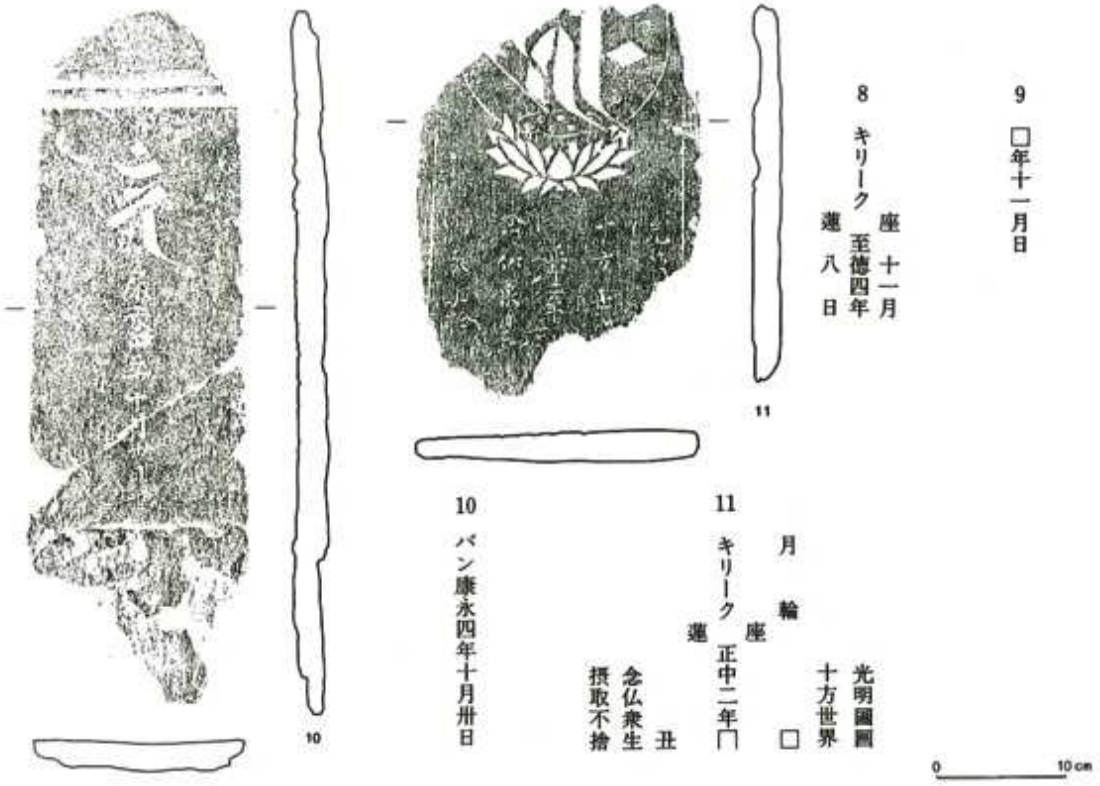
板碑は第1層及び第3層上面付近から出土しており、井戸が廃絶した段階で一括投棄されたものと推定される。4点とも紀年銘が刻まれており、8は北朝年号の至徳四年(西暦1387年)十一月八日、但し同年は嘉慶に改元されている。9は年号部分が欠落。10は北朝年号の康永四年(1345年)十月廿日。同年は貞和元年に改元されている。11は鎌倉時代末期の正中二年(1325年)銘。5・6は鉄塊で、6には鉄滓が付着していた。鉄塊自体は茶褐色の錆に覆われている。鉄滓はくすんだ緑色を呈し、表面は「あばた」状に発泡していた。全体の印象としては金井遺跡B区の鉄塊に近似する。



第556図　C区第19号井戸跡



第557図　C区第19号井戸跡出土遺物（1）



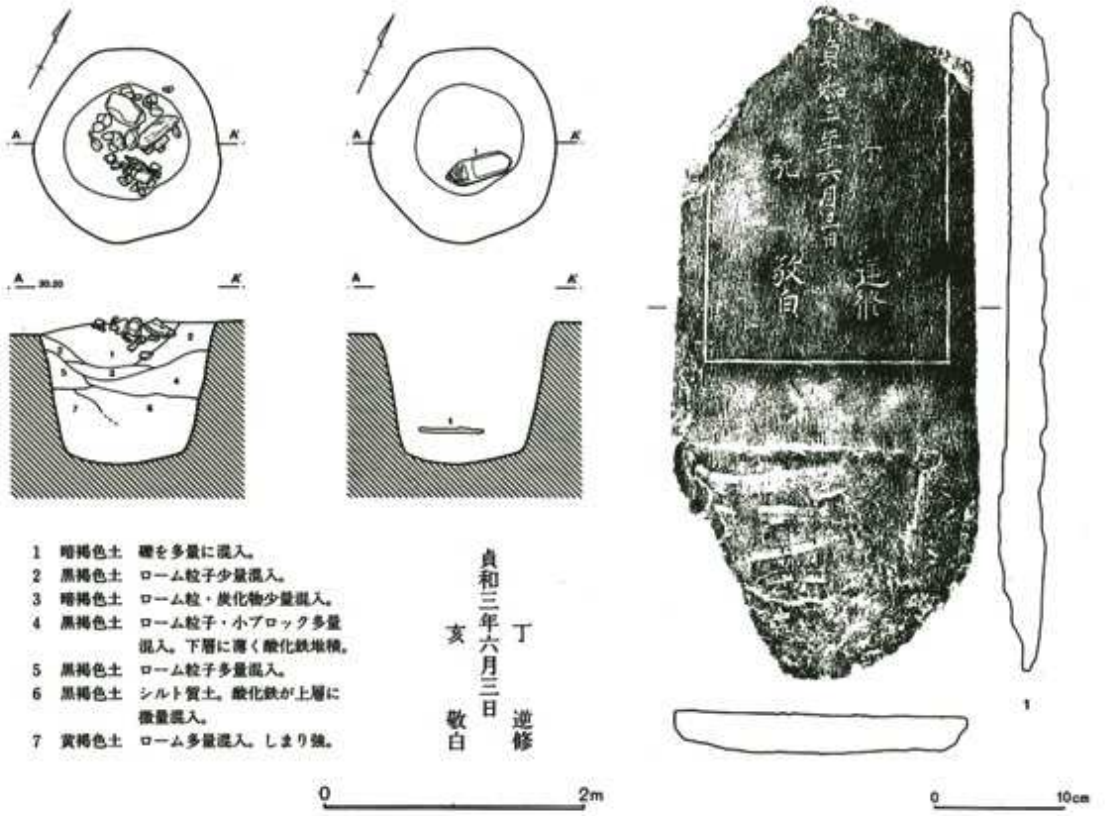
第558図　C区第19号井戸跡出土遺物(2)

C区第19号井戸跡出土遺物観察表(第557・558図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(28.4)	2.9		AEI	B	灰黄褐	10%	覆土　在地系か　全体に風化
2	鉢		3.1	(10.6)	AB	B	褐灰	15%	覆土　在地系
3	内耳鍋		9.0	(26.0)	AB	B	にぶい橙	10%	覆土　底部～胴部下半二次被熱
4	甕				AB	A	灰褐	20%	覆土　最大径58cm
5	鉄塊								覆土　重量0.5g　全面茶色の錆が覆う
6	鉄塊								覆土　重量0.5g
7	石臼								No.4　覆土　重量2.5kg　高さ10.1cm
8	板碑								覆土　長さ45.7,幅18.7,厚さ1.8cm
9	板碑								覆土　長さ34.0,幅19.2,厚さ2.3cm
10	板碑								覆土　長さ54.1,幅16.9,厚さ2.7cm
11	板碑								覆土　長さ31.3,幅22.2,厚さ2.4cm

C区第20号井戸跡(第559図)

H-18区に位置し、第20号住居跡を切って掘り込まれていた。形態は円形で、規模は直径1.52m、深さ0.96mを測る。覆土は7層に分かれるが下層付近は湧水が激しく土層観察は断念した。第1層からは大形の礫が投げ込まれた状態で出土した。板碑は底面から約20cmほど浮いたレベルで出土し



第559図　C区第20号井戸跡・出土遺物

ている。

出土遺物は板碑が1点出土したのみである(第559図1)。板碑は緑泥片岩製で上半を欠く。残存長は50.7cm、幅23.1cm、厚さ3.5cm。貞和三年(1347年)六月三日の紀年銘が記されていた。いわゆる逆修板碑で年号は北朝年号である。

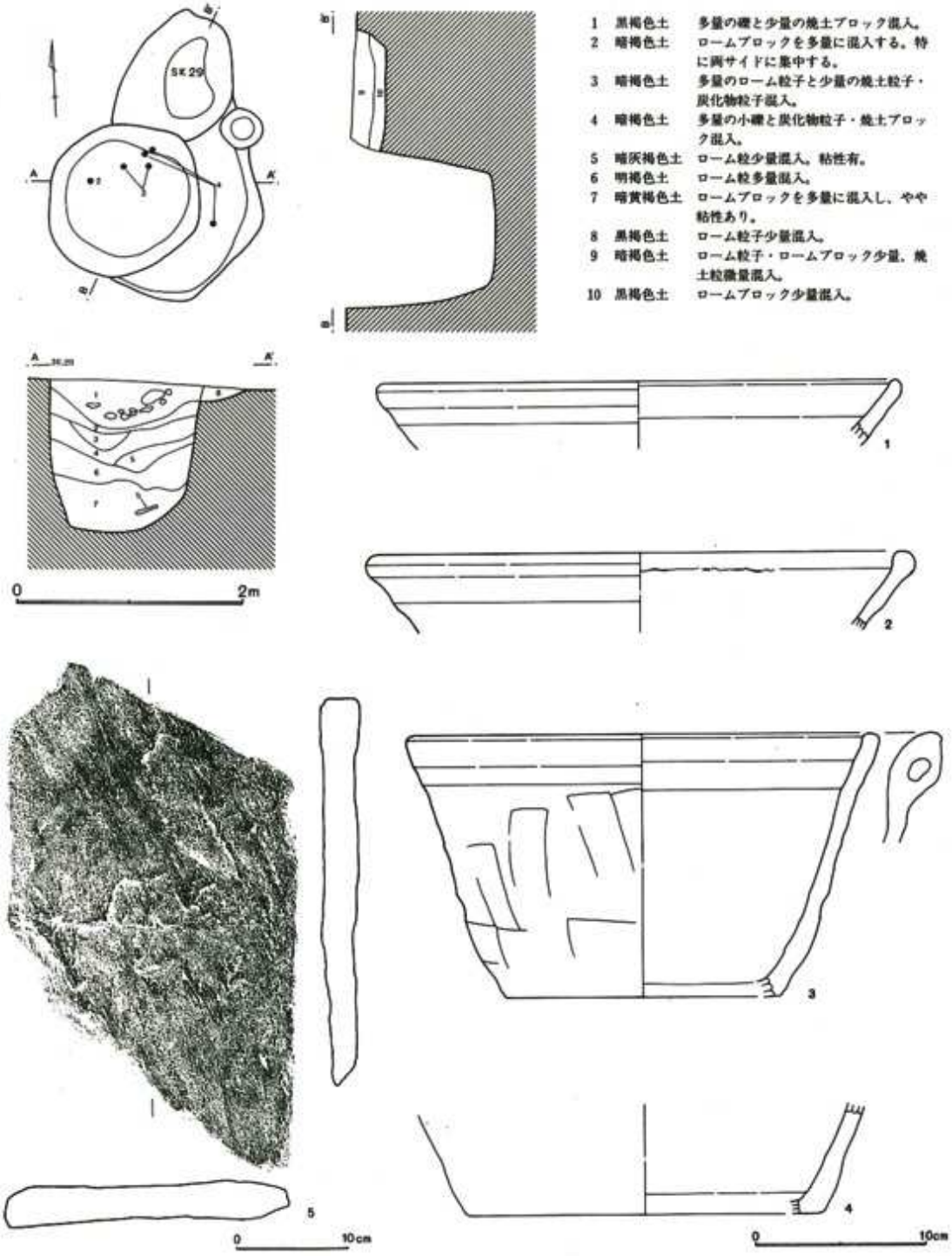
C区第21号井戸跡(第560図)

F-20区に位置する。第29号土壙、第5号溝跡と重複し、遺物の接合関係からみると第29号土壙は井戸に付随する施設と考えることもできる。溝跡との新旧関係は不明である。井戸本体の形態は円形で、規模は直径1.32m、深さ1.34mを測る。

覆土は10層に分かれる。井戸覆土は7層で、第1層中には礫が多量に投げ込まれた状態で出土し

C区第21号井戸跡出土遺物観察表(第560図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(30.0)	3.8		ABI	A	褐灰	5%	覆土　在地系
2	鉢	(30.6)	4.6		ABI	B	灰	10%	No.10　覆土　内面風化　在地系
3	内耳鍋	26.6	15.3	(16.0)	ABE	A	にぶい黄橙	60%	No.15他　覆土　外面煤付着
4	内耳鍋		6.4	(10.7)	ABI	A	にぶい黄橙	10%	No.16,18,19%　外面二次被熱
5	板碑								覆土　長さ45.5,幅25.6,厚さ3.6cm



第560図　C区第21号井戸跡・出土遺物

た。全体にロームが多く含まれていた。8～10層は第29号土壙埋土である。

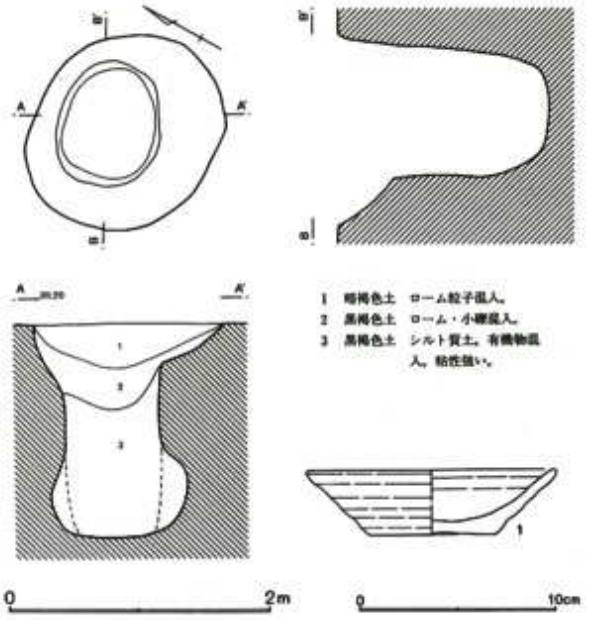
出土遺物は第5層～7層に含まれていた。在地産の鉢(第560図1・2)、内耳鍋(3・4)と板碑(5)が検出され、4の内耳鍋は第29号土壙と井戸下層の破片が接合した。板碑は第7層中から出土した。種子、紀年銘などは刻まれていない。

C区第22号井戸跡(第561図)

H-22区に位置し、第2号円形周溝状遺構を切って掘り込まれていた。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.60m、深さ1.80mを測る。確認面から40cm程下がった位置で段が付き、以下は円筒状に掘り込まれる。底面付近は壁が崩落し、オーバーハングしていた。覆土は3層に分かれる。第3層は黒褐色シルト質土で、粘性が強い。

出土遺物は土師質坏が第2層より検出された(第561図1)。

第561図1は土師質の坏で、法量は推定口径12.4cm、器高3.3cm、底径6.2cm。胎土に石英を含み、焼成は良好である。淡黄色を呈し約40%が残存する。ロクロ整形され、底部は回転糸切り後無調整。



第561図　C区第22号井戸跡・出土遺物

C区第23号井戸跡(第562図)

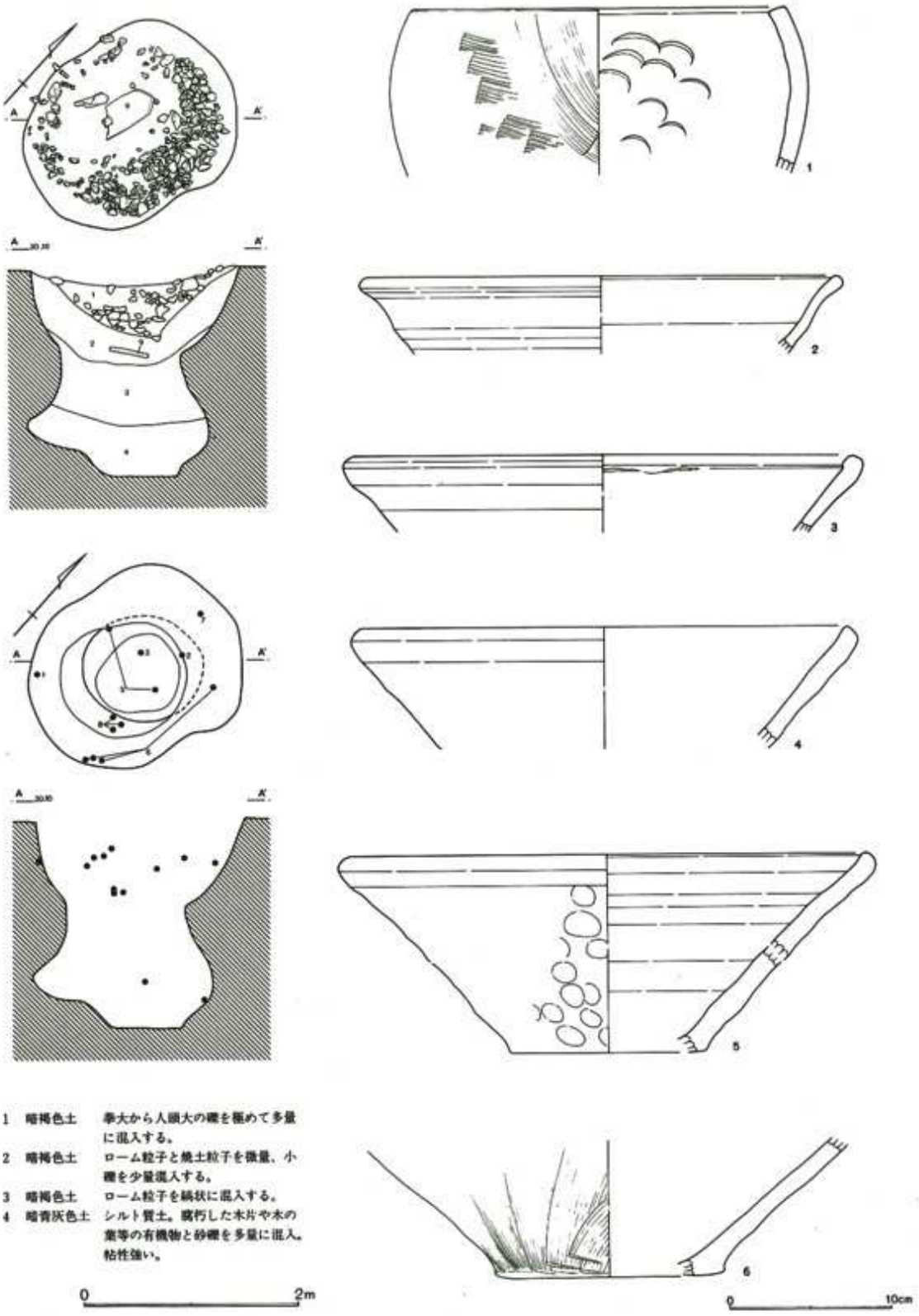
D-22区に位置し、第7号方形周溝墓を切って掘り込まれていた。形態は楕円形で、規模は長径2.05m、深さ1.94mを測る。上面から約80cm程で一度段が付き、以下は円筒状に掘り込まれる。底部付近の側壁は崩壊しオーバーハングしていた。

覆土は4層に分かれる。第1層中には極めて多量の礫が投げ込まれた状態で出土した。第4層は暗青灰色の有機質土で粘性が強い。

出土遺物は第1層及び第2層に比較的多く、板碑は第2層中から検出された。第562図1は鉢か。外面叩き後、木口状工具によるナデが加わる。器種・時期ともに不明確である。2・6は常滑系の鉢、3～5・7・8は在地産の鉢である。板碑は頭部の破片である。全体に作りは丁寧で二条線、キリーク、月輪はシャープに刻まれている。

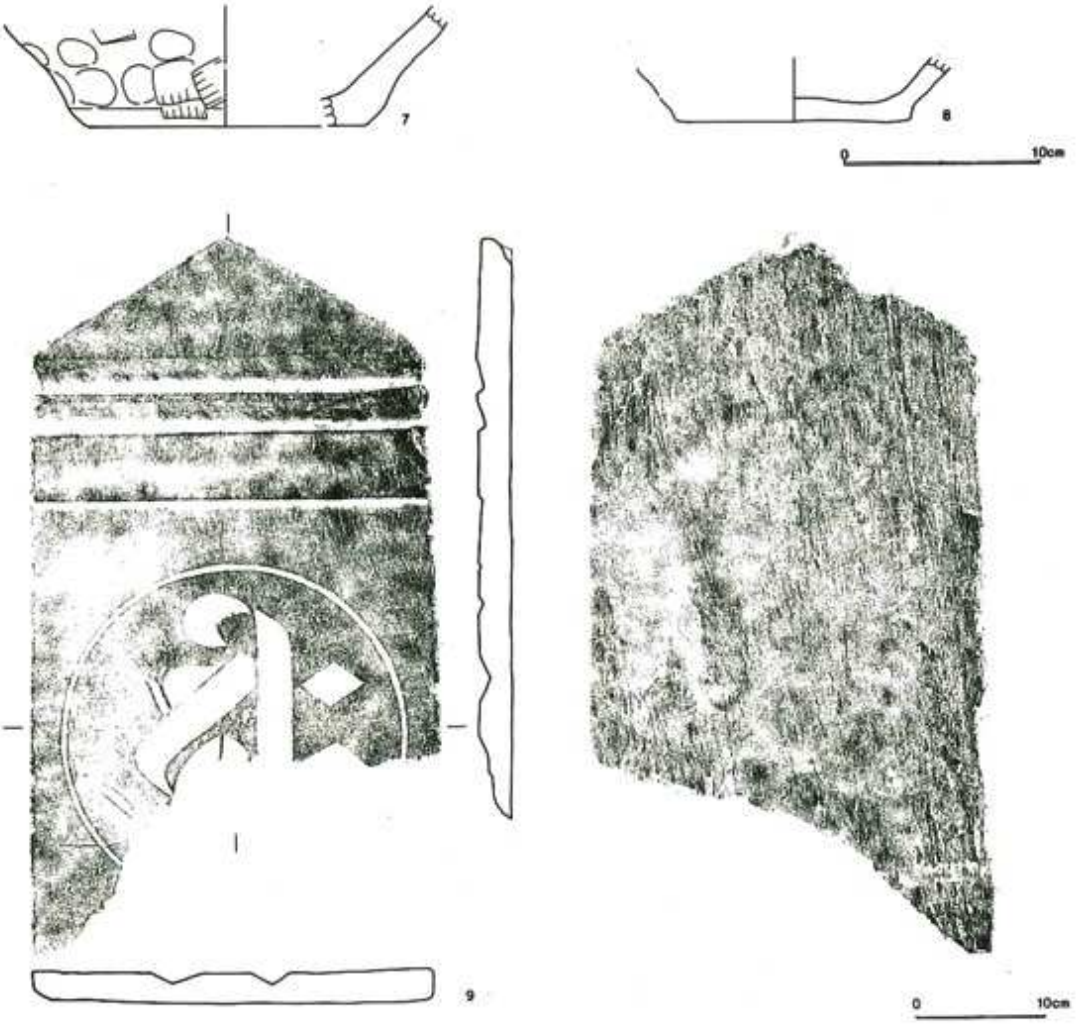
C区第23号井戸跡出土遺物観察表(第562・563図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(23.0)	10.2		AB	B	浅黄	10%	No.72　覆土　時期、器種共に不明確
2	鉢	(29.0)	4.8		AB	A	オリーブ灰	5%	No.47　覆土　常滑系捏鉢
3	鉢	(31.0)	4.8		ABI	B	暗灰	5%	No.130　覆土　在地系
4	鉢	(30.0)	7.5		AI	B	灰白	10%	覆土　風化著しい
5	鉢	(32.0)	12.2	(12.0)	AB	A	灰白	10%	No.6,28　覆土　外面指押さえ
6	捏鉢		8.4	(14.0)	AB	A	にぶい赤褐	20%	No.70他　内面磨滅　外面木ロナデ
7	鉢		6.1	(14.0)	AB	A	灰白	25%	No.144　覆土　外面指ナデ木ロナデ併用
8	鉢		3.2	12.0	AB	A	にぶい黄橙	70%	No.121他　覆土　底部静止糸切り痕残る
9	板碑								覆土　長さ56.7,幅31.2,厚さ2.7cm



1　暗褐色土　拳大から人頭大の礫を極めて多量に混入する。
2　暗褐色土　ローム粒子と焼土粒子を微量、小礫を少量混入する。
3　暗褐色土　ローム粒子を縞状に混入する。
4　暗青灰色土　シルト質土。腐朽した木片や木の葉等の有機物と砂礫を多量に混入。粘性強い。

第562図　C区第23号井戸跡・出土遺物(1)



第563図　C区第23号井戸跡出土遺物(2)

C区第24号井戸跡(第564図)

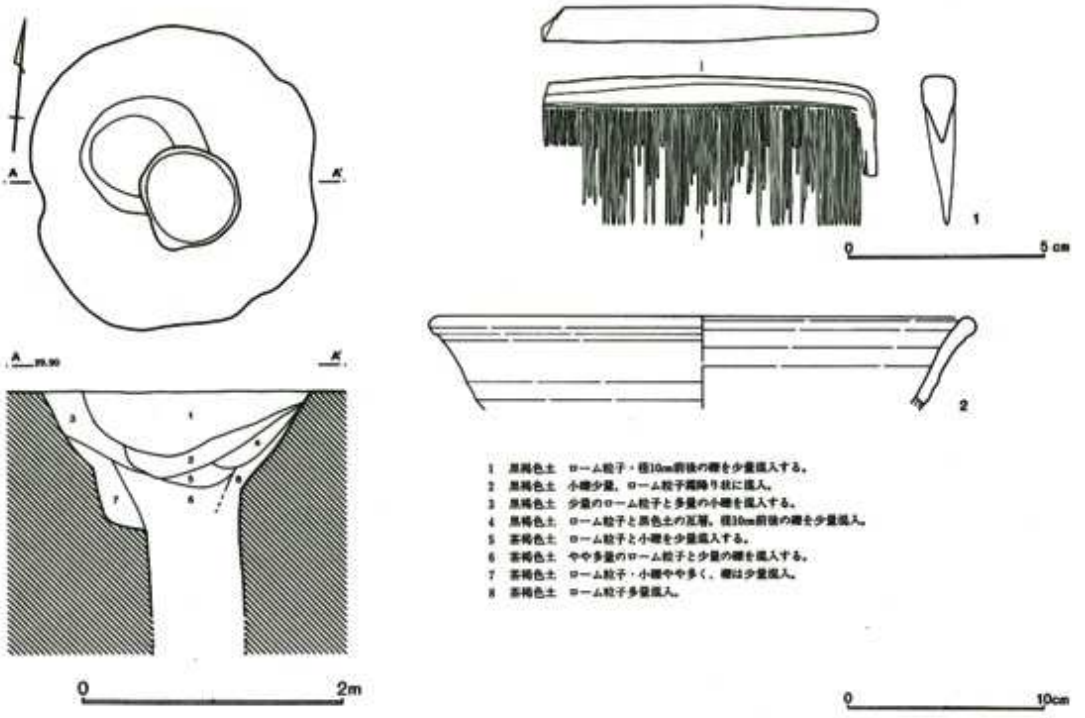
H-24区に位置し、第84号土壙を切って掘り込まれていた。

平面形態は円形で、規模は直径2.30m、深さは1.70m以上となるが、湧水が激しく底面までは完掘できなかった。下半は径75cmほどの円筒状となり、上半はロート状に開いていた。覆土は8層まで確認した。全体に礫とロームの含有が目立った。

出土遺物は横櫛(第564図1)と常滑系の鉢(2)が検出された。

1は横櫛である。長さは3.8cm、幅8.5cm、厚さ0.6cmで、図上で左端を欠いていた。遺存状態は比較的良好である。

2は常滑系の鉢である。推定口径は27.0cm、胎土に石英と長石を含む。色調は灰白色で焼成は良好である。10%程が残存する。



第564図　C区第24号井戸跡・出土遺物

C区第25号井戸跡(第565図)

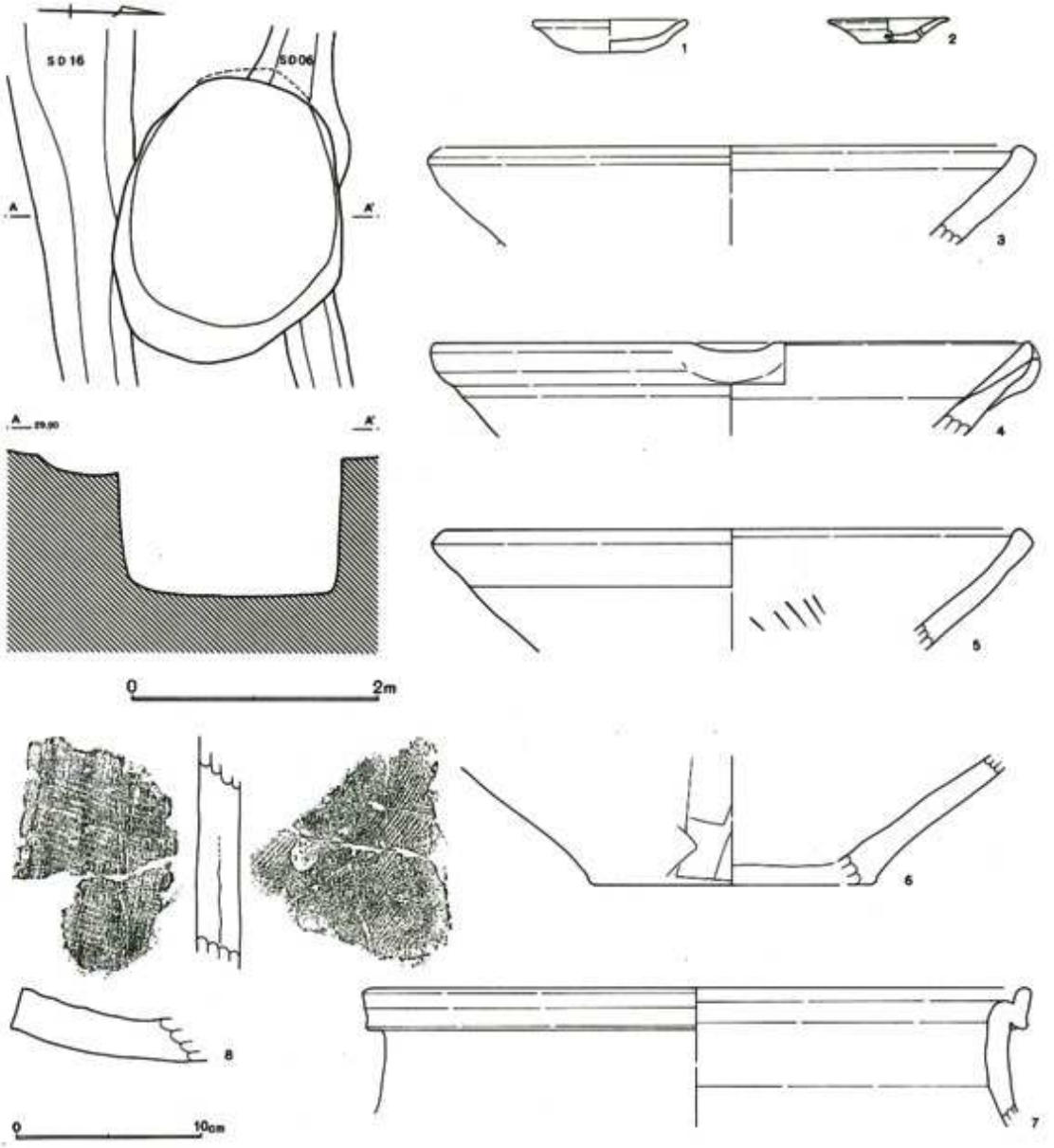
G-26区に位置する。第6号·16号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。形態は楕円形を呈し、規模は長径2.30m、深さ1.10mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土の詳細は不明。

出土遺物は土師質小皿(第565図1)、小杯(2)、在地産鉢(3～5)、常滑産鉢(6)、常滑焼の甕(7)、平瓦(8)がある。

1の小皿は底部が風化しているが手ずくねの可能性がある。2の小杯は近世陶器か。体部に小孔が穿たれている。内面は灰白色と淡灰色の釉を掛け分けている。産地は不明である。5の鉢は内面に5条の浅い沈線が斜位に刻まれ、摺目と思われる。6は内面底部付近の磨滅が著しい。8の平瓦は混入と考えられる。

C区第25号井戸跡出土遺物観察表(第565図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小皿	(8.1)	1.7	3.8	ABC	B	浅黄橙	35%	覆土　手ずくね？　全体に風化
2	小杯	(6.2)	1.3	3.1		A	淡黄	45%	覆土　体部に小孔1ヶ
3	鉢	(31.0)	5.3		A	B	灰白	10%	覆土　全体に風化　在地系
4	鉢	(31.8)	5.0		AB	B	にぶい黄	10%	覆土在地系
5	鉢	(31.0)	6.5		AB	B	灰	10%	覆土　内面に極浅い沈線5条刻まれる
6	鉢		6.9	(15.0)	AD	A	灰	5%	No.4　覆土　内面磨滅著しい　常滑系
7	甕	(25.2)	8.4		AD	A	灰褐	5%	覆土
8	平瓦				ABC	A	灰		覆土　混入　模骨痕残る



第565図　C区第25号井戸跡・出土遺物

C区第26号井戸跡(第566図)

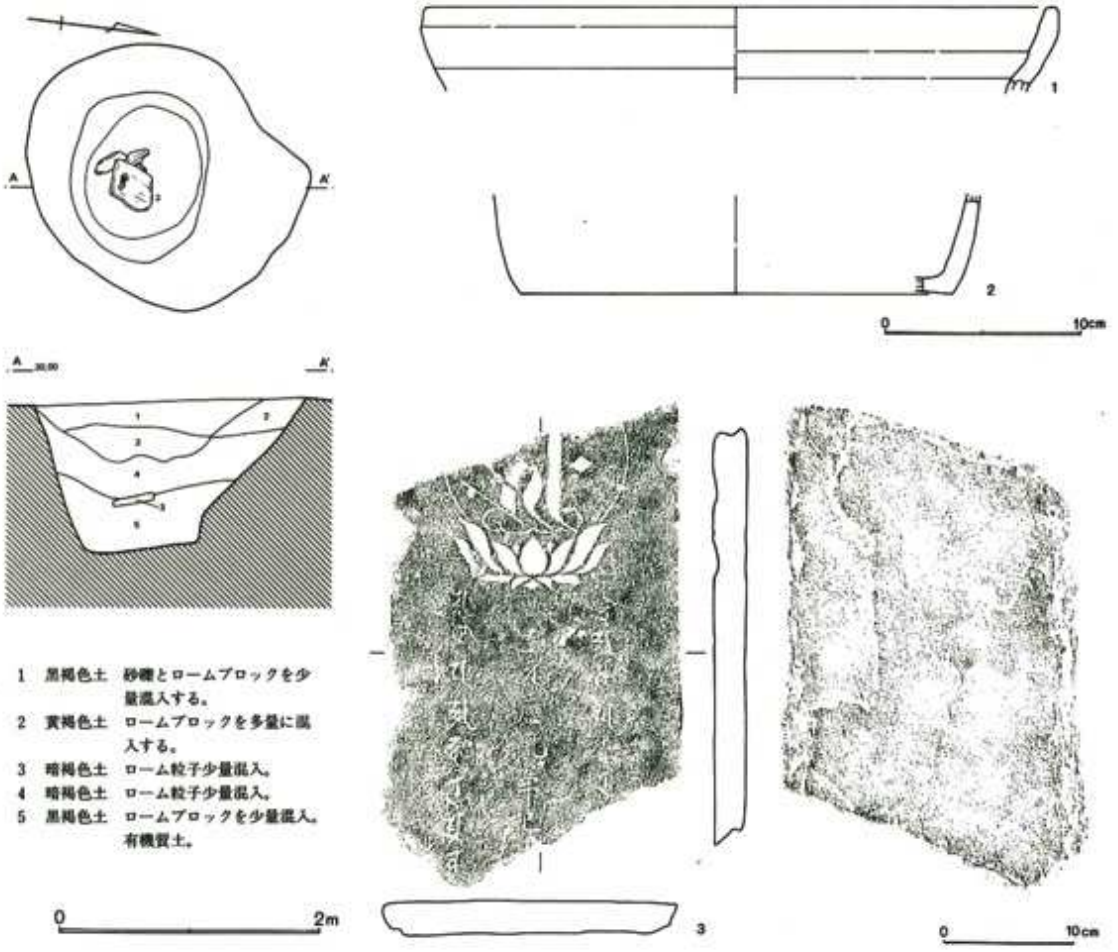
F・G-28区に位置し、第11号方形周溝墓を切って掘り込まれていた。

形態はやや歪んだ楕円形で、規模は長径1.18m、深さ1.15mを測る。底面はほぼ平坦で側壁は北側が緩やかに立ち上がる。

覆土は5層に分かれ、最下層に黒褐色の有機質土が堆積していた。上層はロームと砂礫の混入が目立つ。

出土遺物は内耳鍋(第566図1・2)と板碑(3)が検出された。

第566図1は内耳鍋と思われる。口縁内面の屈曲は緩い。推定口径31.6cm、残存器高4.4cm。胎土に石英・白色粒子・片岩を含み、焼成は普通である。色調は灰色、残存率は10%程である。



第566図　C区第26号井戸跡・出土遺物

2は内耳鍋の底部片である。残存器高は5.1cm、底径22.0cm。胎土は石英・白色粒子を含み、焼成は普通。残存率は10%程である。外面は煤が付着する。

3は板碑で第5層上面から出土した。頂部と基部を欠く。残存長は36.5cm、幅23.6cm。厚さ2.6cm。表面には、主尊の阿弥陀如来(キリーク)が比較的太く刻まれ、月輪と蓮座を備えている。紀年銘は「元應元年巳□」と読める(西暦1319年)。紀年銘の左右には光明真言の喝が刻まれていた。裏面は平滑で鑿跡は残らない。

C区第27号井戸跡(第567図)

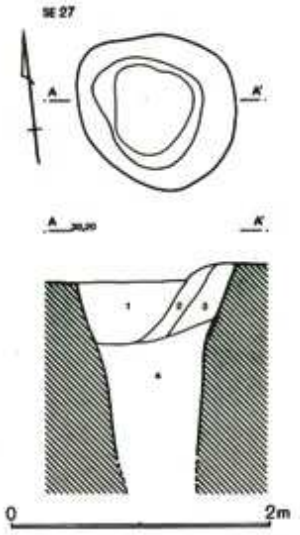
F-20区に位置し、第1号方形周溝墓を切って掘り込まれていた。第5号溝跡が上面を南北に貫流するが新旧関係は不明である。

形態は不整円形で、規模は直径1.30m、深さは1m以上となる。下層は湧水が激しく完掘できなかった。

覆土は4層に分かれる。色調は暗褐色土で、第1層にはロームブロックが多量に含まれていた。第2層・第3層には焼土粒子が混入し、ロームの混入量は少ない。第4層は暗褐色のシルト質土とな

り、有機物を混入する。

出土遺物は青磁碗の体部小片が出土しているが図化は省略した。

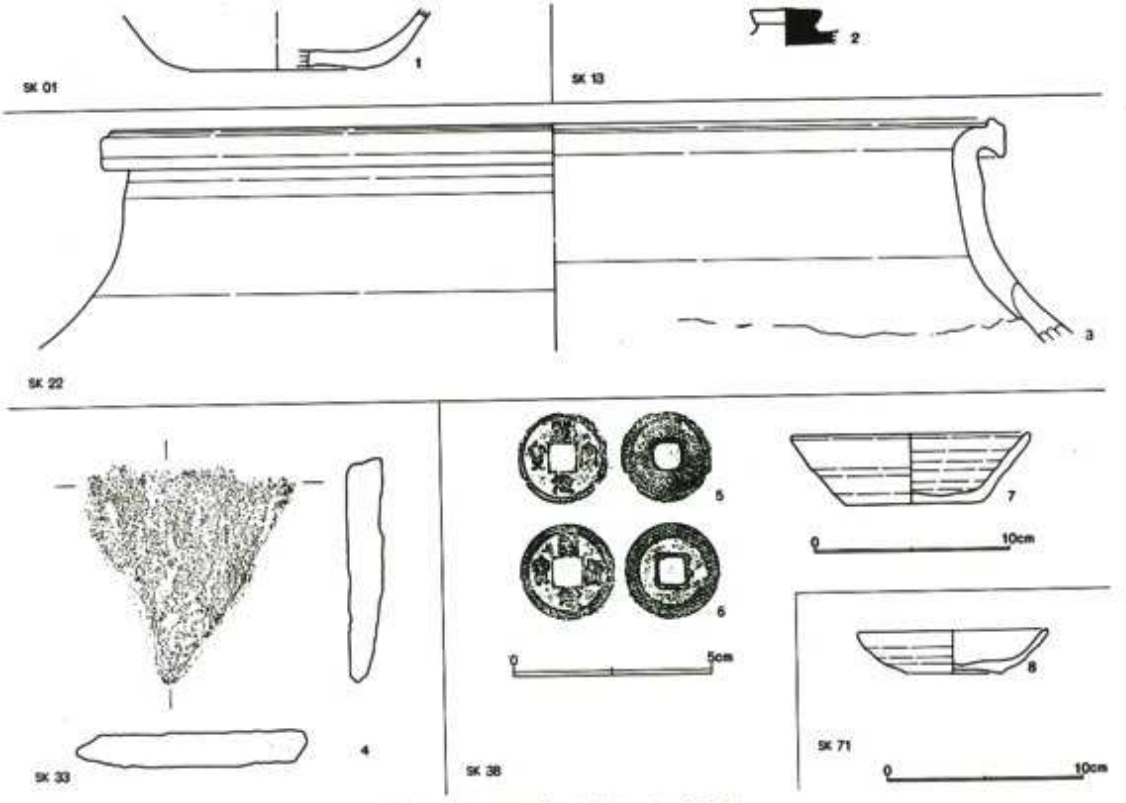


第567図　C区第27号井戸跡

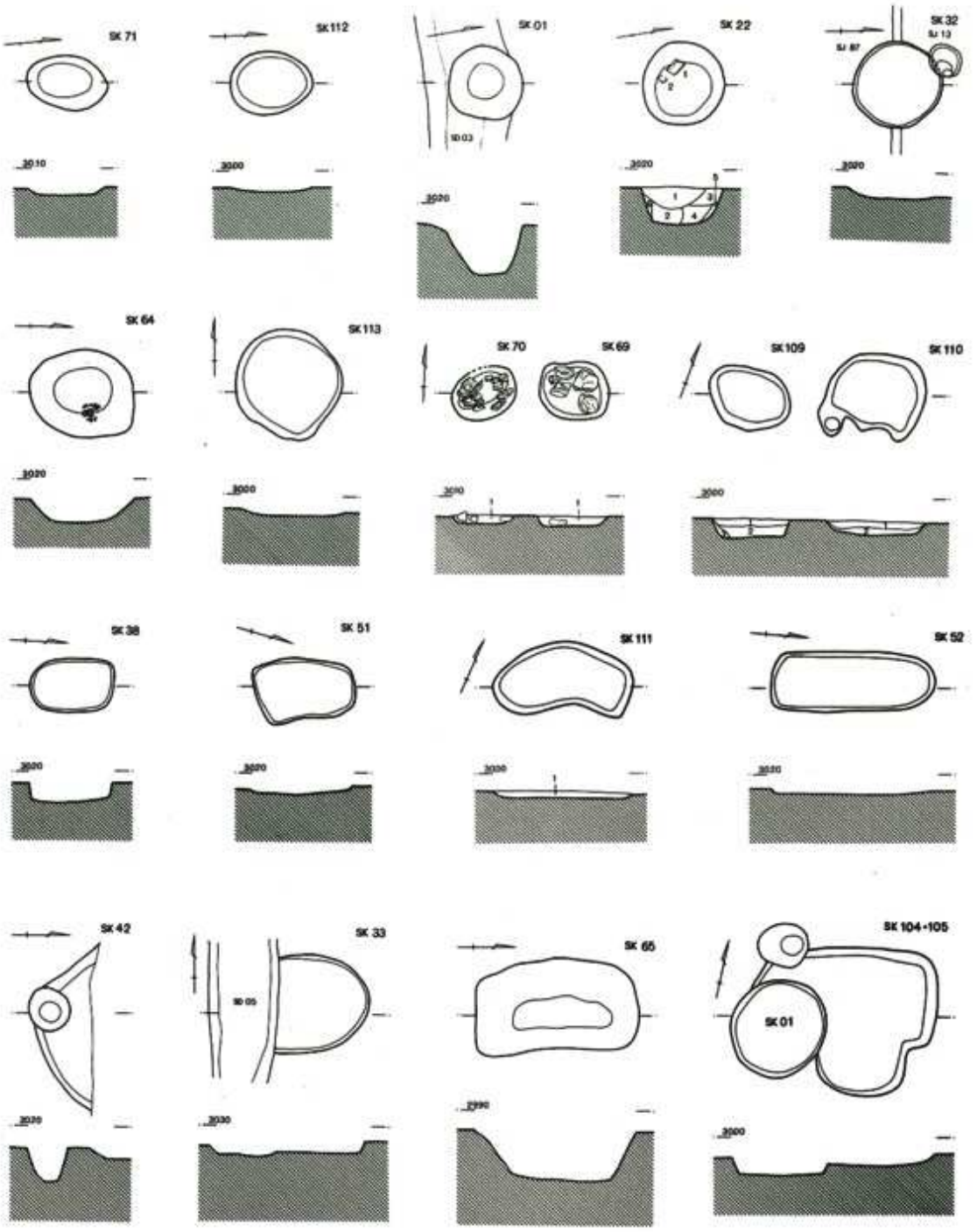
発掘風景

(4)　土壙

中世と推定される土壙は30基検出された(第569・570図)。規模等の詳細は巻末の土壙一覧表に記載し、出土遺物は第568図に示した。



第568図　C区中・近世の土壙遺物

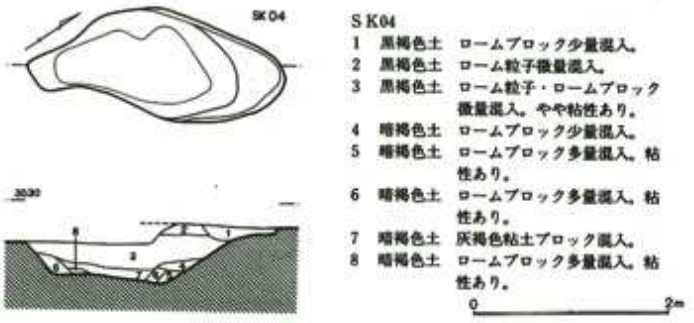


SK22
1 暗褐色土　ロームブロック・ローム粒・炭化粒少量、礫混入。
2 暗褐色土　ロームブロック少量、礫混入。
3 暗褐色土　ローム粒多量混入。
4 暗褐色土　ローム粒・ロームブロック多量混入。
5 暗褐色土　ローム粒少量混入。
6 明褐色土　ロームブック少量混入。

SK69・70
1 暗褐色土　多量のロームブロックと少量の焼土粒子混入。
SK109・110
1 黒褐色土　ローム粒子少量混入。
2 暗褐色土　ロームブロック少量混入。
3 茶褐色土　ロームブロック少量混入。
SK111
1 暗褐色土　ロームブロック少量混入。

0　2m

第569図　C区中・近世の土壙(1)



第570図　C区中・近世の土壙(2)

第568図1は坏としたがよくわからない。土師質で胎土はもろい。底部は糸切りか。3は常滑焼きの甕である。口縁下端の引き出しは弱い。4は板碑基部片である。8は土師質の皿で底部は回転糸切りされる。

C区中・近世の土壙出土遺物観察表(第568図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏		3.0	(9.0)	AB	A	橙	25%	SK01No.1 覆土(+19cm)
2	蓋		1.7		ABC	A	灰	80%	SK13覆土(+23cm) 鈕完存 径3.6cm
3	甕	(45.0)	11.5		AB	B	灰	20%	SK22No.2 覆土(+9cm)
4	板碑								SK33 幅11.8,長径11.3,厚1.8cm
5	古銭								SK38 判読不能
6	古銭								SK38 熙寧元宝(1068年初鋳)
7	坏	12.1	3.5	7.1	ABI	A	浅黄橙	100%	SK38No.1 覆土(+2cm)
8	皿	9.7	2.2	5.0	ABCJ	A	橙	100%	SK71No.1 覆土(+6cm)

(5) 溝跡

C区第1～5・7号溝跡(571図)

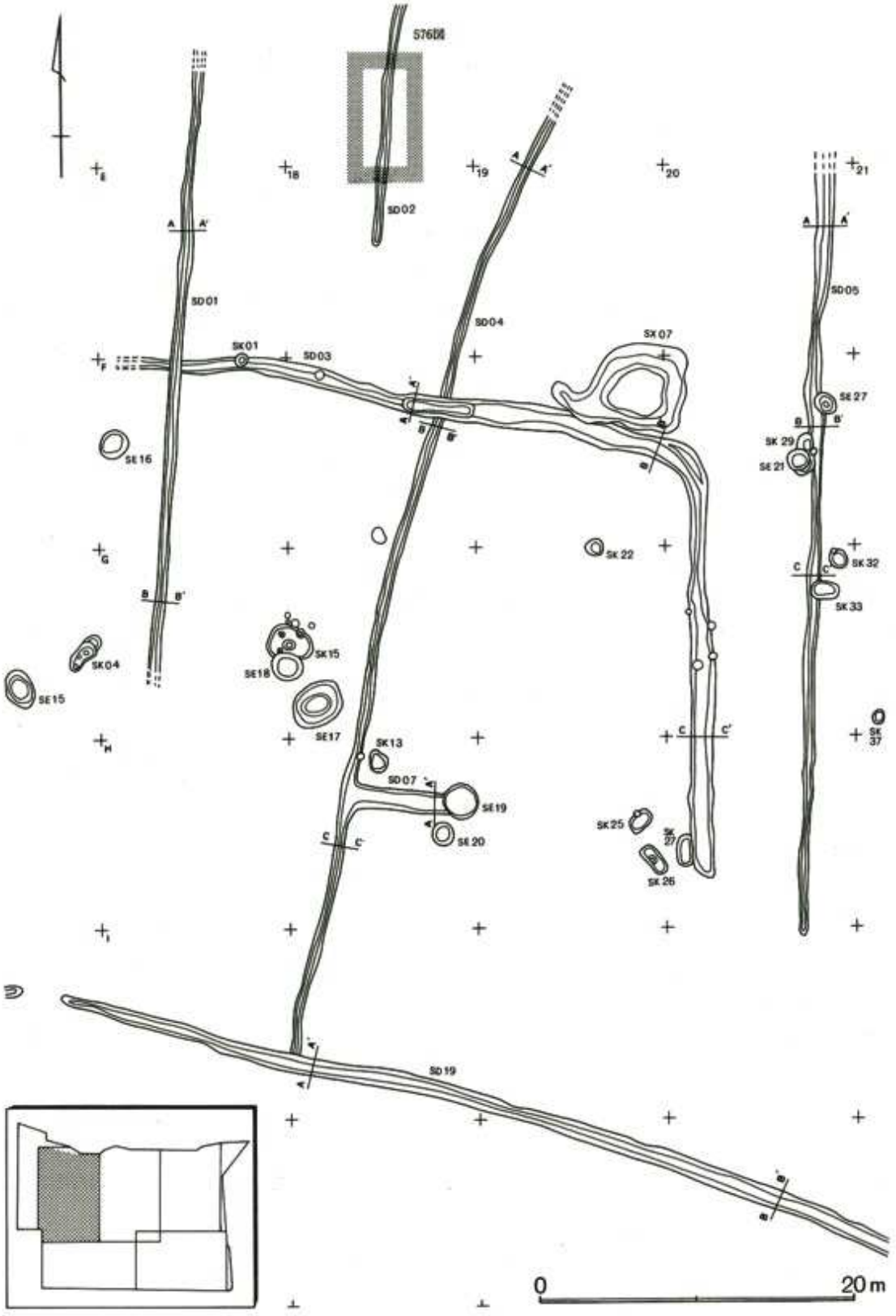
第1～5号溝跡は調査区西域に展開する一群である。第3号溝跡が鍵状に屈曲する他は直線的に南北に延びる。第1・2・5号溝跡と第3号溝跡の東辺がほぼ平行し、方位は北から僅かに東に振れている。第4号溝跡はそれよりも更に東に傾いていた。溝相互の切り合い関係は不明である。

第1号溝跡は調査区東端に位置し、規模は幅40～60cm、深さは10cm前後と浅い。覆土は概ね2層に分かれ、第1層は黒褐色土、第2層は暗褐色土が堆積し火山灰かとも思われる白色粒子が含まれていた。

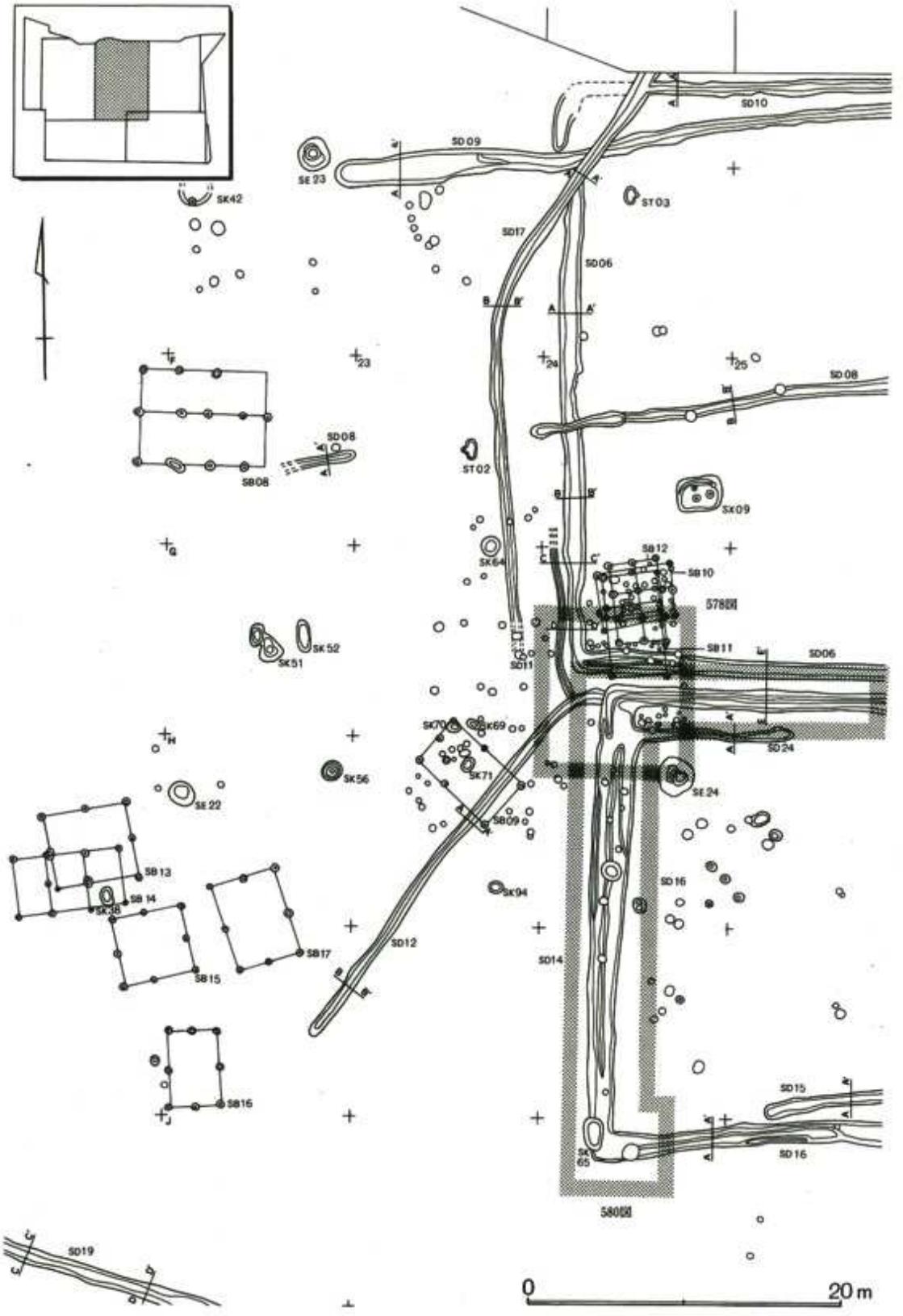
第2号溝跡は1号溝の東、約12m隔てて、平行して延びる。南端はE-18区で止まる。底面には拳大の礫が敷き詰められていた(第571図)。出土遺物はない。

第3号溝跡は東西方向に36m延びF-20区で南に向きを変える。南端部はH-20区付近で不明瞭になってしまう。溝幅は60cm～180cmで、深さは10～30cmと全体に浅い。断面形は基本的に逆台形に掘り込まれていた。覆土は暗褐色土で構成され、第1層には小礫が少量含まれ、第2層にはロームブロックが多量に混入していた。出土遺物は須恵器坏、内耳鍋、擂鉢、平瓦、鉄滓と古銭がある(第585図1～6)。2の擂鉢は在地産と思われ、内面にスリ目が残る。3は凹面に糸切り痕と枠板(?)状の痕跡が残り、表面には砂粒が付着していた。6は開元通寶である。唐銭で621年初鋳。

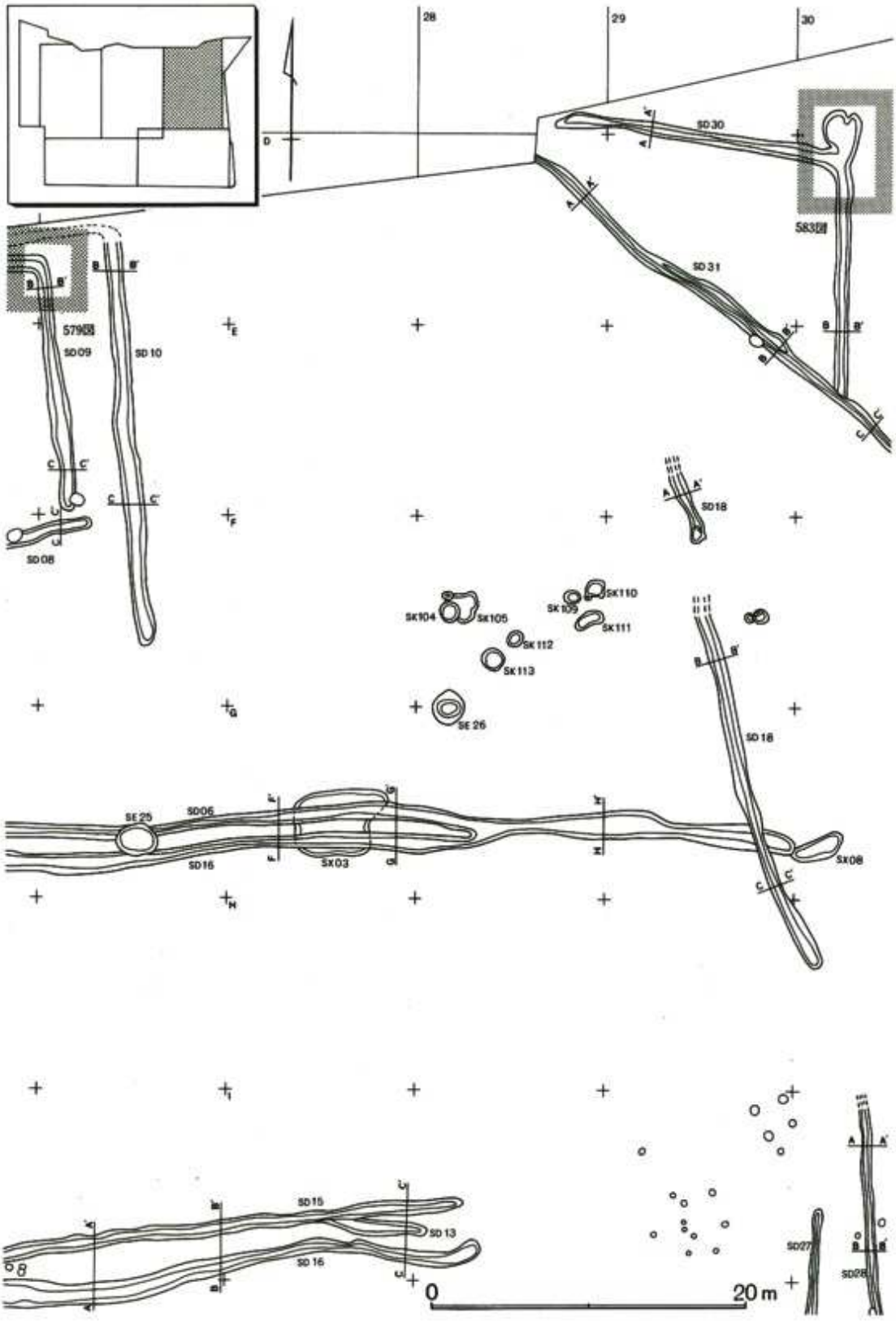
第4号溝跡は幅40～60cm、深さ5～20cmと小規模で、南端は第19号溝跡にほぼ直角に繋がる。但し一体のものかどうかは判らない。出土遺物は土師器と須恵器片が検出されているが混入と考えら



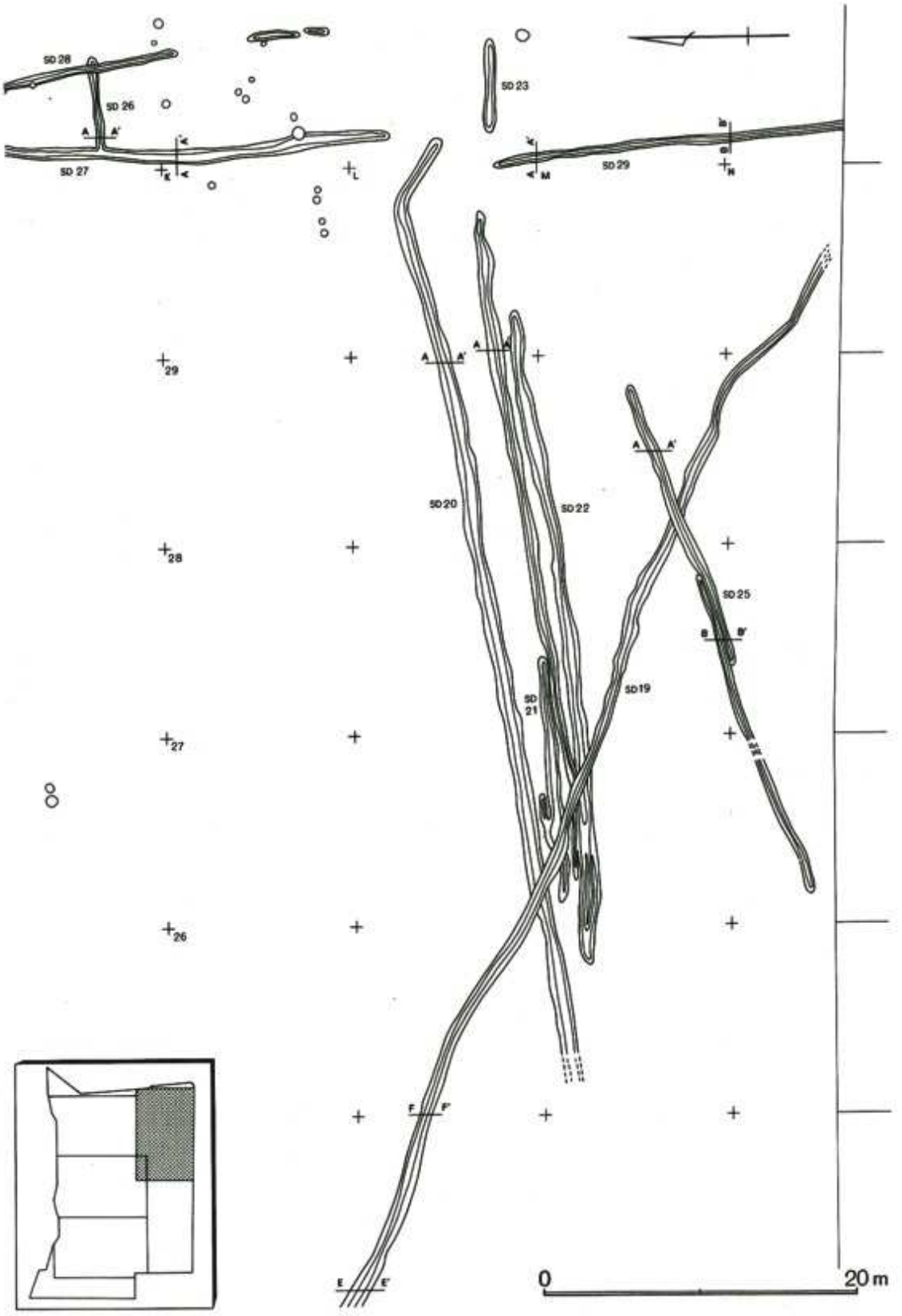
第571図　C区中・近世の溝跡(1)



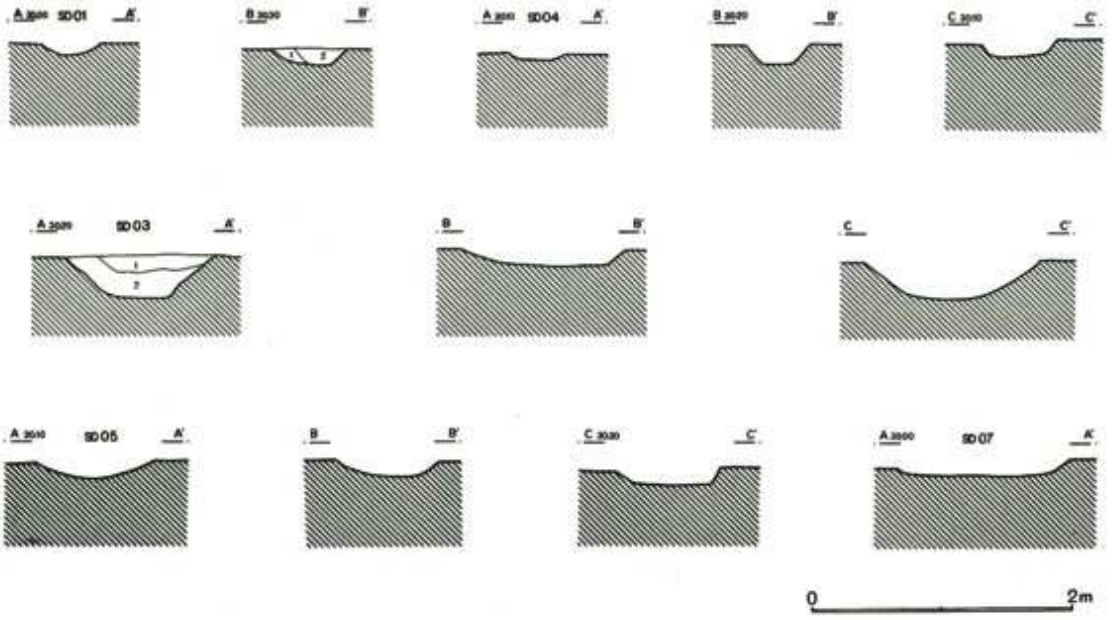
第572図　C区中・近世の溝跡（2）



第573図　C区中・近世の溝跡(3)



第574図　C区中・近世の溝跡(4)



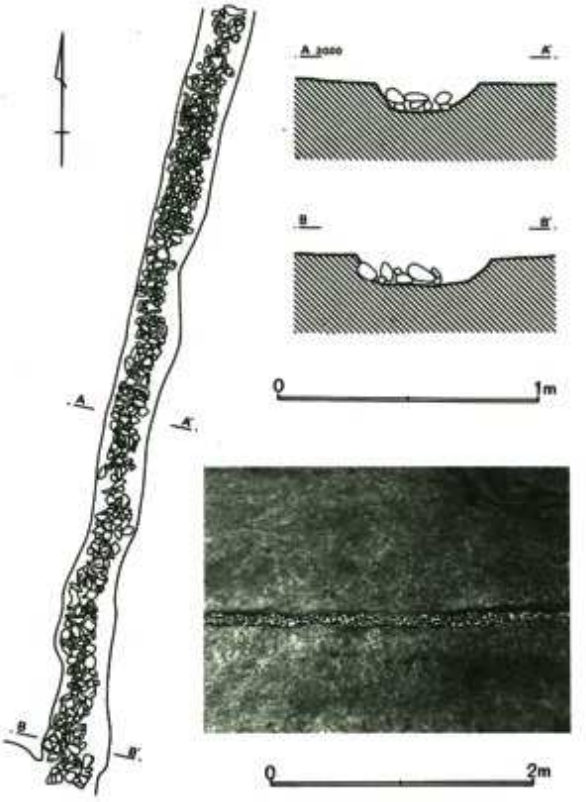
第575図　C区第1～5・7号溝跡土層図

れる。また、H-18区で第7号溝跡が分岐していた。東に6m延び第4号井戸跡と接続する。出土遺物は竜泉窯系と推定される青磁の蓮弁文を施した碗が検出された(第585図8)。

第5号溝跡は第3号溝跡の東約6mにあり、南北方向に48m程確認された。幅は40～90cm、深さは5～15cmである。出土遺物はない。

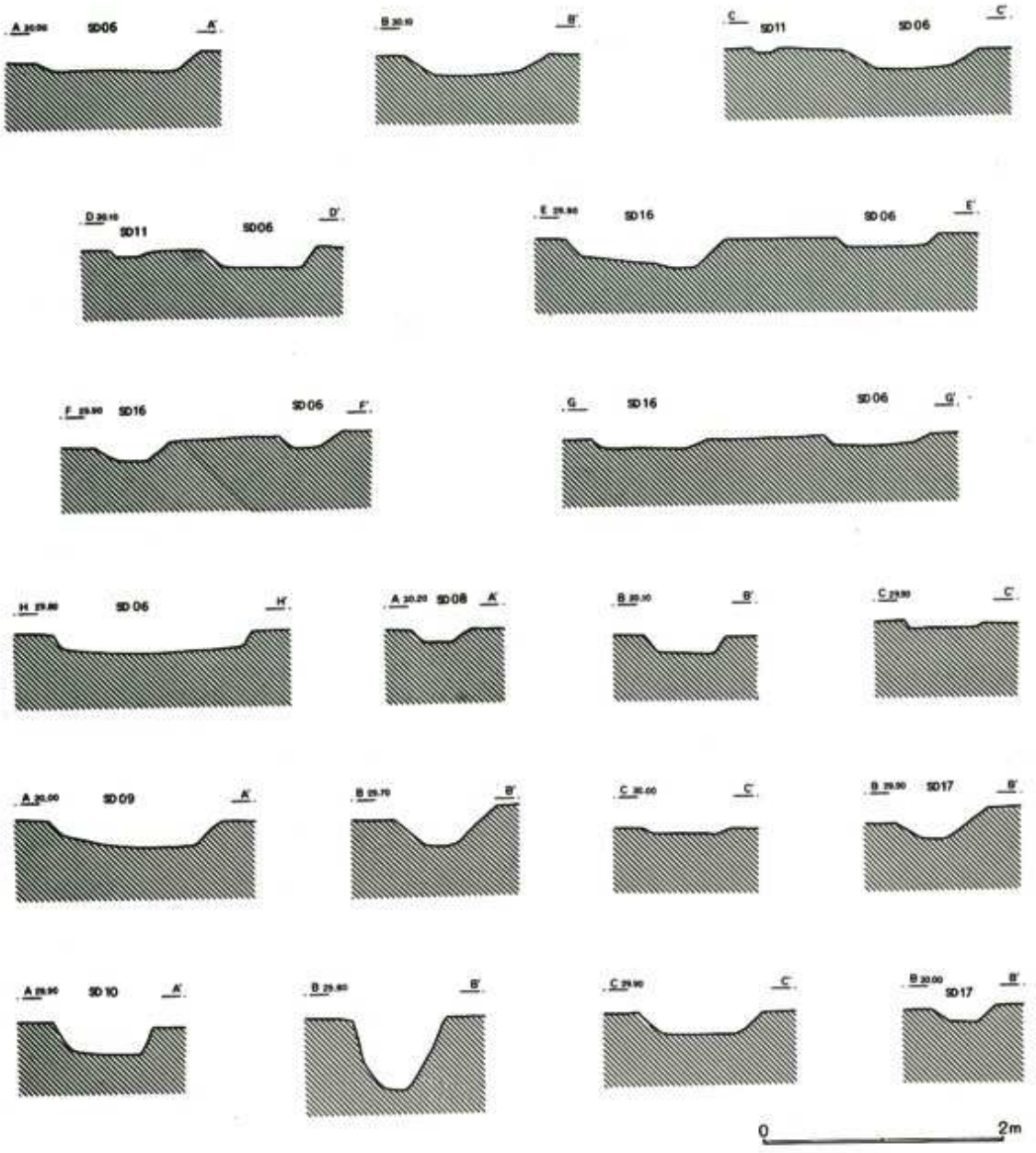
C区第6・8～11・17号溝跡(第572・573図)

第6・8～11・17号溝跡は調査区中央から北東寄りの地区を中心に纏まっている。第17号溝跡を除くと比較的整然とした長方形に溝が配置されていた。一つは第8号溝跡と第9号溝跡で形成される横長の長方形区画、もう一つは第6号溝跡と第10号溝跡で形成される縦長の長方形区画である。溝相互の切り合い関係は不明である。



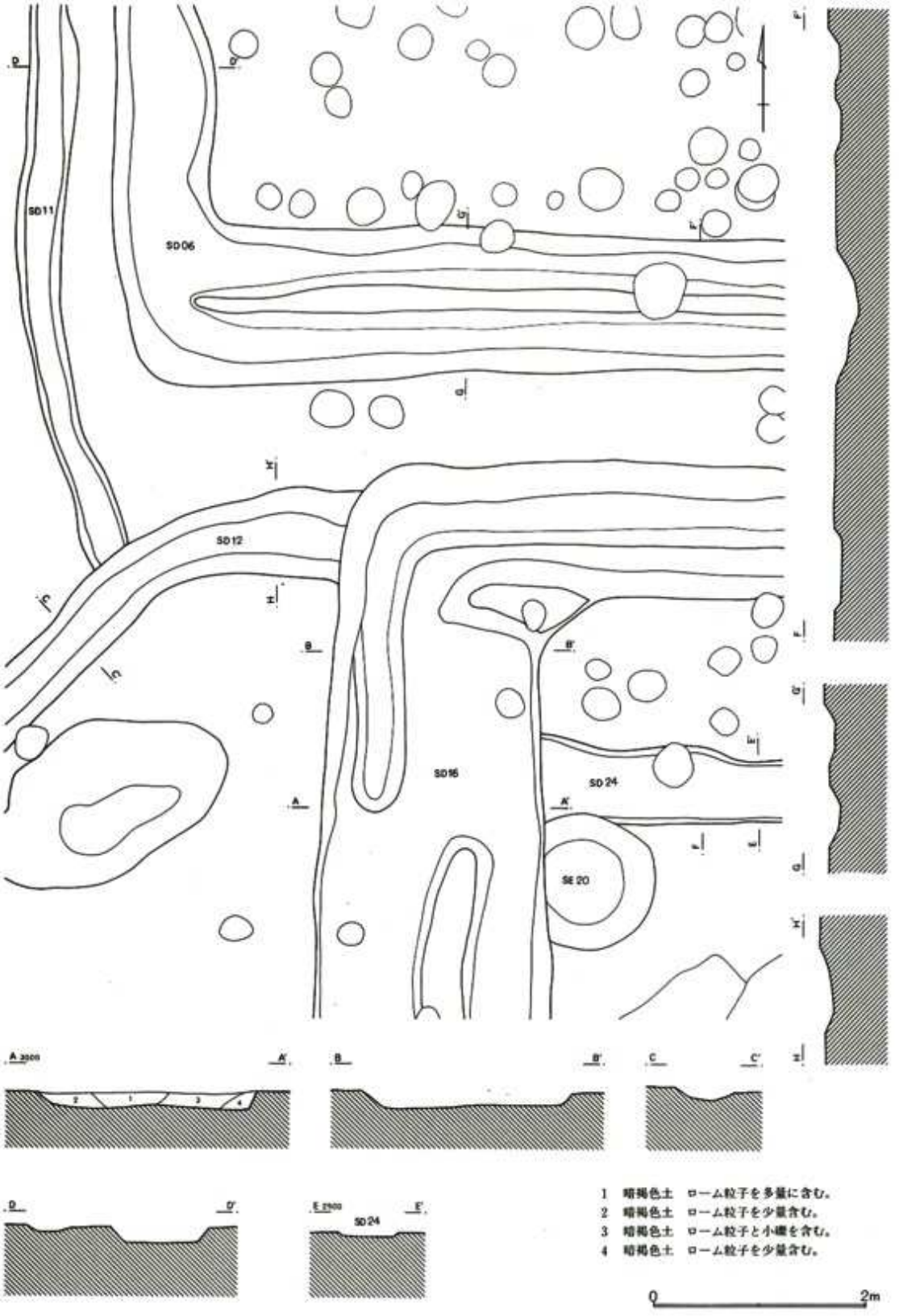
第576図　C区第2号溝跡(部分)

先ず前者について概観すると、第8号溝跡は東西方向に約43m延びる。途中が途切れる部分があり、また西側の限界が判然としないなど不明な点が残る。幅は50～60cm、深さは15cm程と浅い。

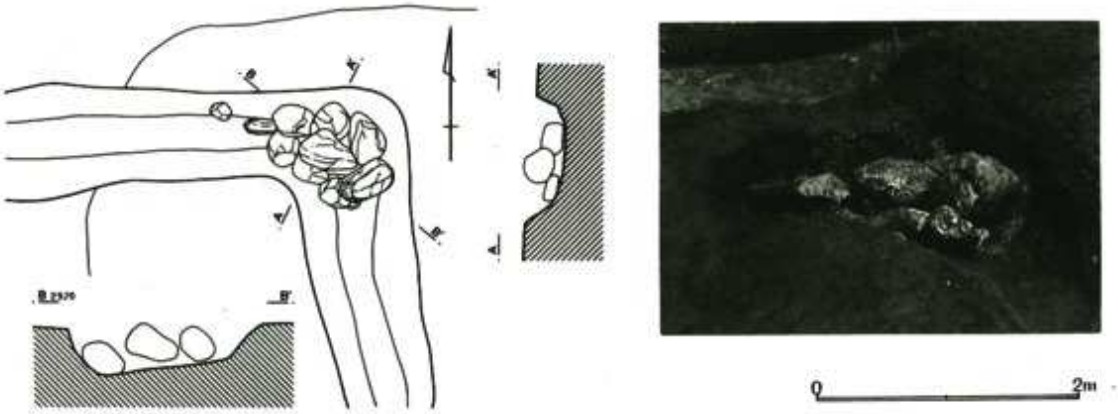


第577図　C区第6・8～11・17号溝跡土層図

第9号溝跡は鍵状に屈曲し、南北辺は16m、東西辺は37mにわたって確認された。西側の限界は周溝墓と重なって不明瞭である。南北辺の傾きは北から約8°西に振れている。規模は幅60～140cm、深さ5～30cmと全体に浅い。北辺東端のコーナー部は一段深く掘り込まれ、人頭大の礫が数個埋設された状態で残されていた(第579図)。第8号溝跡と第9号溝跡東西辺との距離は16～17mを測る。第8号溝跡と第9号溝跡から構成される方形区画の南東コーナー部は現状では60cm程掘り残されており、陸橋部を形成するものと推定される。第6号溝跡が本区画に関与していたとすると東西2つのブロックに分かれることになるが、残念ながら判然としない。



第578図 C区第6・16号溝跡(部分)



第579図　C区第9号溝跡(部分)

続いて後者についてみると、第6号溝跡はG-24区で直角に屈曲し南北に31m、東西に70m延び、南北辺の傾きはほぼ座標北を指す。北端は第17号溝跡に連結して終わっている。ただ、第9号溝跡北側の攪乱は第6号溝跡の延長と考えることもでき、第10号溝跡と連結していた可能性も捨て難い。東西辺の東端近くでは第16号溝跡と重なりながら延び、先端部は第2号敷石状遺構につながって終わる。溝幅は50～140cm、平均120cmほどで、深さは20cm前後の部分が多い。

第10号溝跡はD-26区を起点に西と南にほぼ直角に屈曲していた。東西辺は約22m、南北辺は26m確認された。幅は80～140cm、深さは南北辺北寄りでは60cmと深く、南に行くにしたがって浅くなる。区画の規模は南北長が36m、東西長が26mとなる。

第11号溝跡は第6号溝跡の西側に近接して南北に約14m延びる。北側は第8号溝跡の南3m付近で消えている。南端は第12号溝跡とつながる位置までは確認されたが、その先は不明である。溝幅は20～40cm、深さは10cm以下と浅い。

第17号溝跡は基本的に南北方向に延びるが、北半は大きく北東に向きを変えている。両区画との関係は不明である。幅は50～80cm、深さは20～30cmほどである。

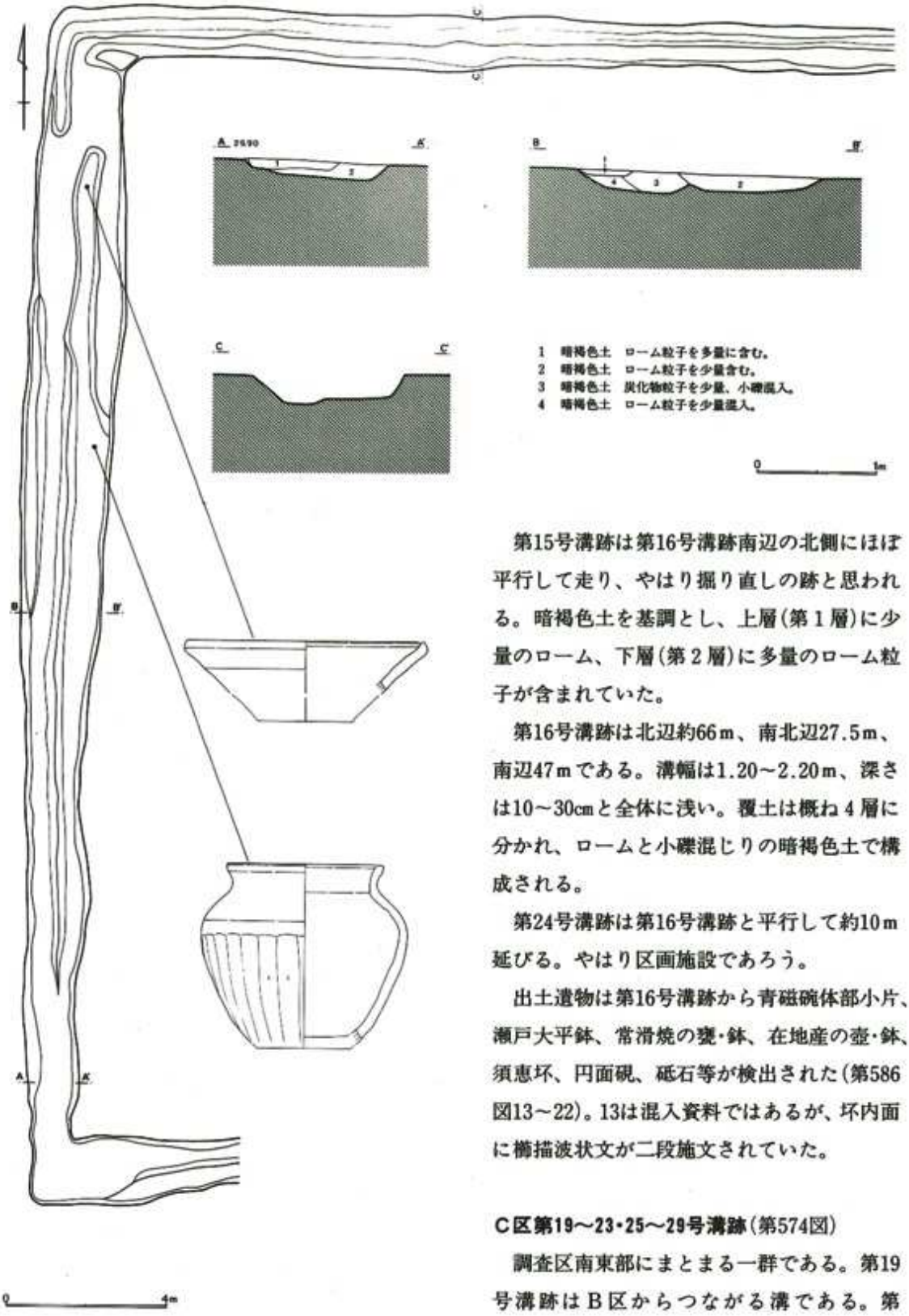
出土遺物は第8号溝跡から内耳鍋底部片(第585図9)、常滑焼の甕と鉢が、第9号溝跡からは板碑片(10)、第10号溝跡から内耳鍋(11)と在地産の鉢(12)、常滑焼の甕胴部片が検出された。溝跡群の性格としては中世後期の屋敷を区画した溝とするのが妥当であろう。

C区第12～16・24号溝跡(第572・573図)

第12号溝跡は第16号溝跡の北東コーナーから南西に向かって26m程延びる。他の溝と走向を異にし、第16号溝跡との新旧関係も不明である。溝幅は50cm前後、深さは15cmを測る。

第13～16号溝跡は一体のものと考えられる。全体的には東に開く「コ」の字形に配置された区画溝である。断面を見ると部分的に2度及至3度の掘り直した状況が確認され、第13～15号溝跡がそれに相当しよう。

第13号溝跡は第15号溝跡から分岐したもので、第14号溝跡は第16号溝跡南北辺の西半部、掘り直した部分に相当するものと考えられる。



第580図　C区第14・16号溝跡(部分)

第15号溝跡は第16号溝跡南辺の北側にほぼ平行して走り、やはり掘り直しの跡と思われる。暗褐色土を基調とし、上層(第1層)に少量のローム、下層(第2層)に多量のローム粒子が含まれていた。

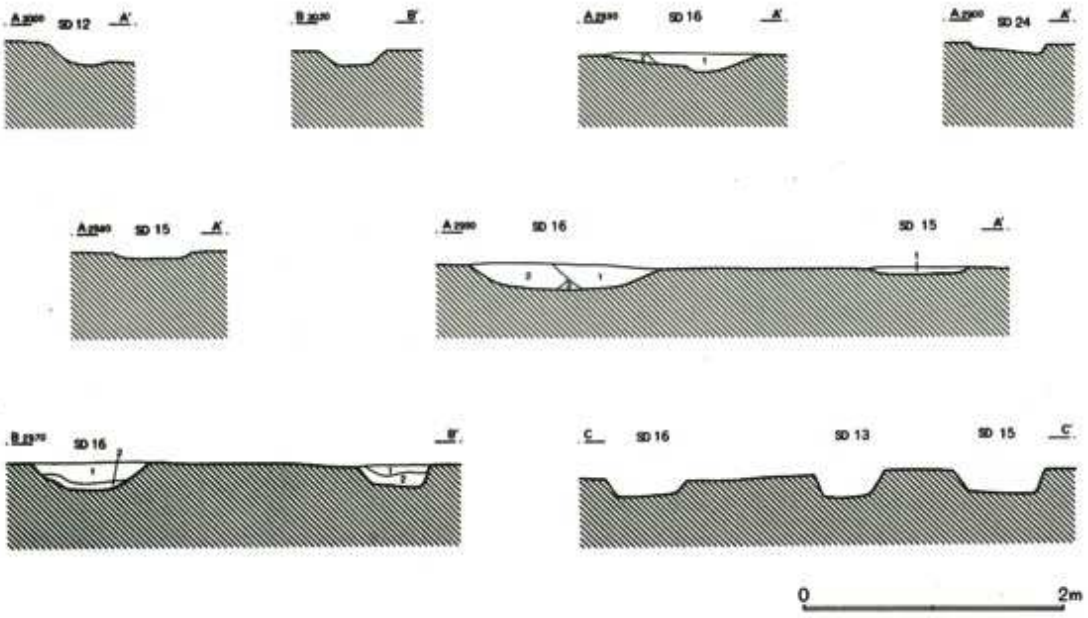
第16号溝跡は北辺約66m、南北辺27.5m、南辺47mである。溝幅は1.20～2.20m、深さは10～30cmと全体に浅い。覆土は概ね4層に分かれ、ロームと小礫混じりの暗褐色土で構成される。

第24号溝跡は第16号溝跡と平行して約10m延びる。やはり区画施設であろう。

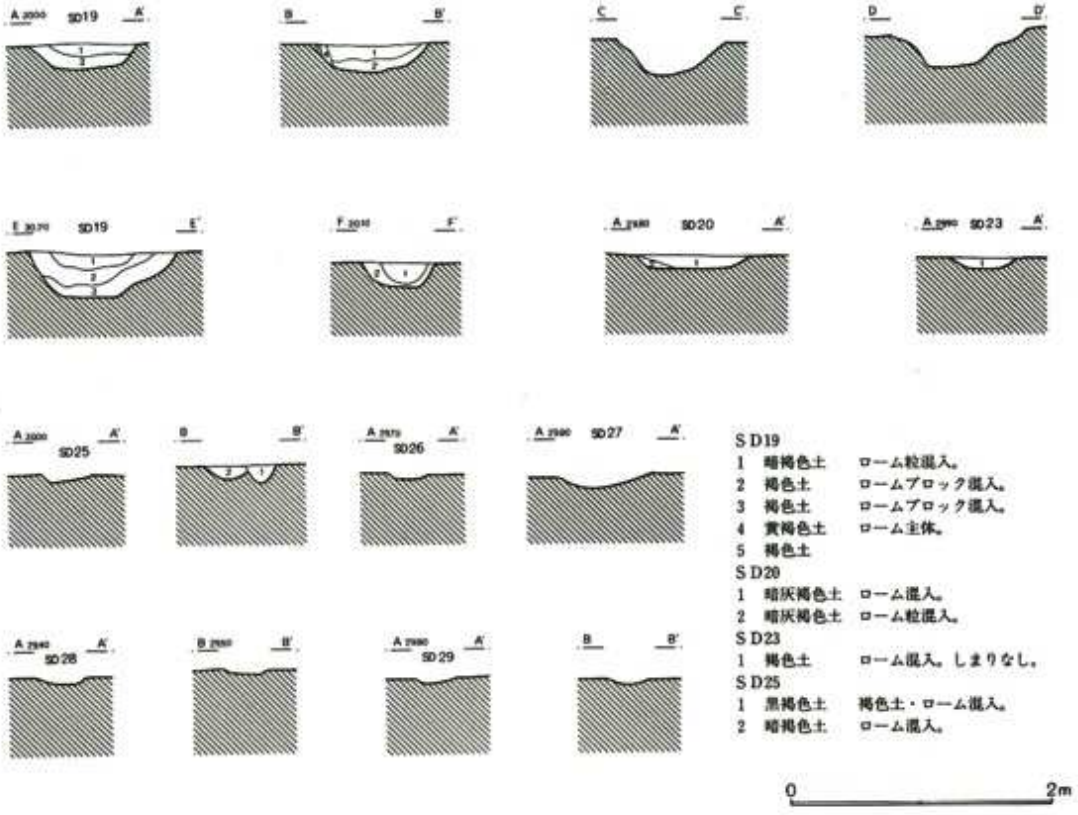
出土遺物は第16号溝跡から青磁碗体部小片、瀬戸大平鉢、常滑焼の甕・鉢、在地産の壺・鉢、須恵坏、円面硯、砥石等が検出された(第586図13～22)。13は混入資料ではあるが、坏内面に櫛描波状文が二段施文されていた。

C区第19～23・25～29号溝跡(第574図)

調査区南東部にまとまる一群である。第19号溝跡はB区からつながる溝である。第20～23号溝跡はほぼ平行して延びる。溝幅は



第581図　C区第12～16・24号溝跡土層図



第582図　C区第19～23・25～29号溝跡土層図

1ｍ前後で内部は２～３条に分岐している。第20号溝跡は暗灰褐色土を基調とし、小礫が比較的多く含まれていた(第１層)。第25号溝跡はやや方位がずれるが同様な掘り込みである。性格は不明。

出土遺物は杭、内耳をもつ焙烙、瀬戸焼の碗が検出された。時期的には近世以降に降るものと思われる。

第27～29号溝跡は南北に延びる一群で、第26号溝跡は第27号溝跡と第28号溝跡をつなぐように東西に延びる。出土遺物はなく性格は不明である。近世以降に降るものと思われる。

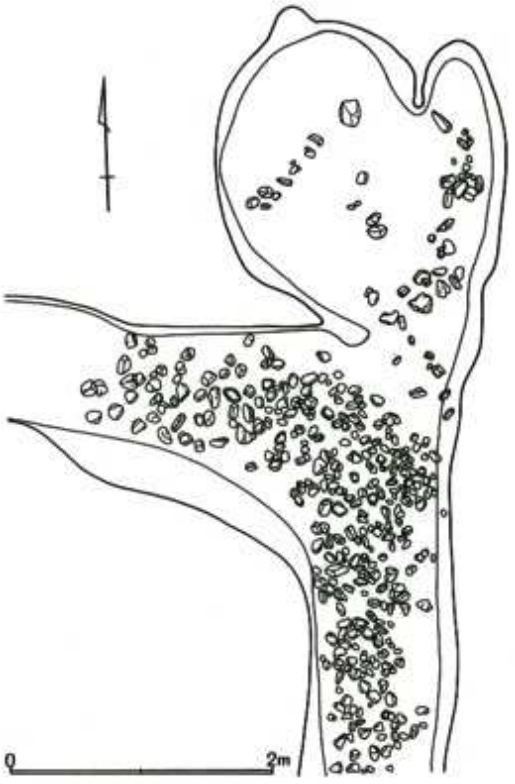
Ｃ区第18・30・31号溝跡(第573図)

調査区北東部にまとまる一群である。

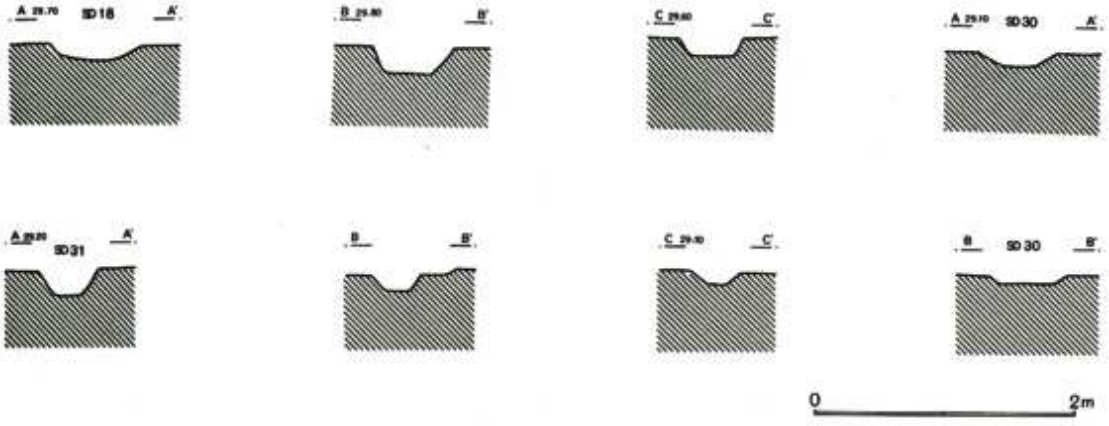
第18号溝跡は北々西～南々東に延びる。第16号溝跡との新旧関係は不明確であるが、本溝跡の方が新しいものと推定される。H-30区で切れるが、その延長上に第28号溝跡が位置し、同一溝の可能性がある。

第30号溝跡は直角に屈曲し、北側に張出し状の土壙を伴う。屈曲部と張出し部にかけて小礫が多量に含まれていた。また、杭群が打ち込まれた状態で残されていたが、直接関わるものかどうかは不明である。

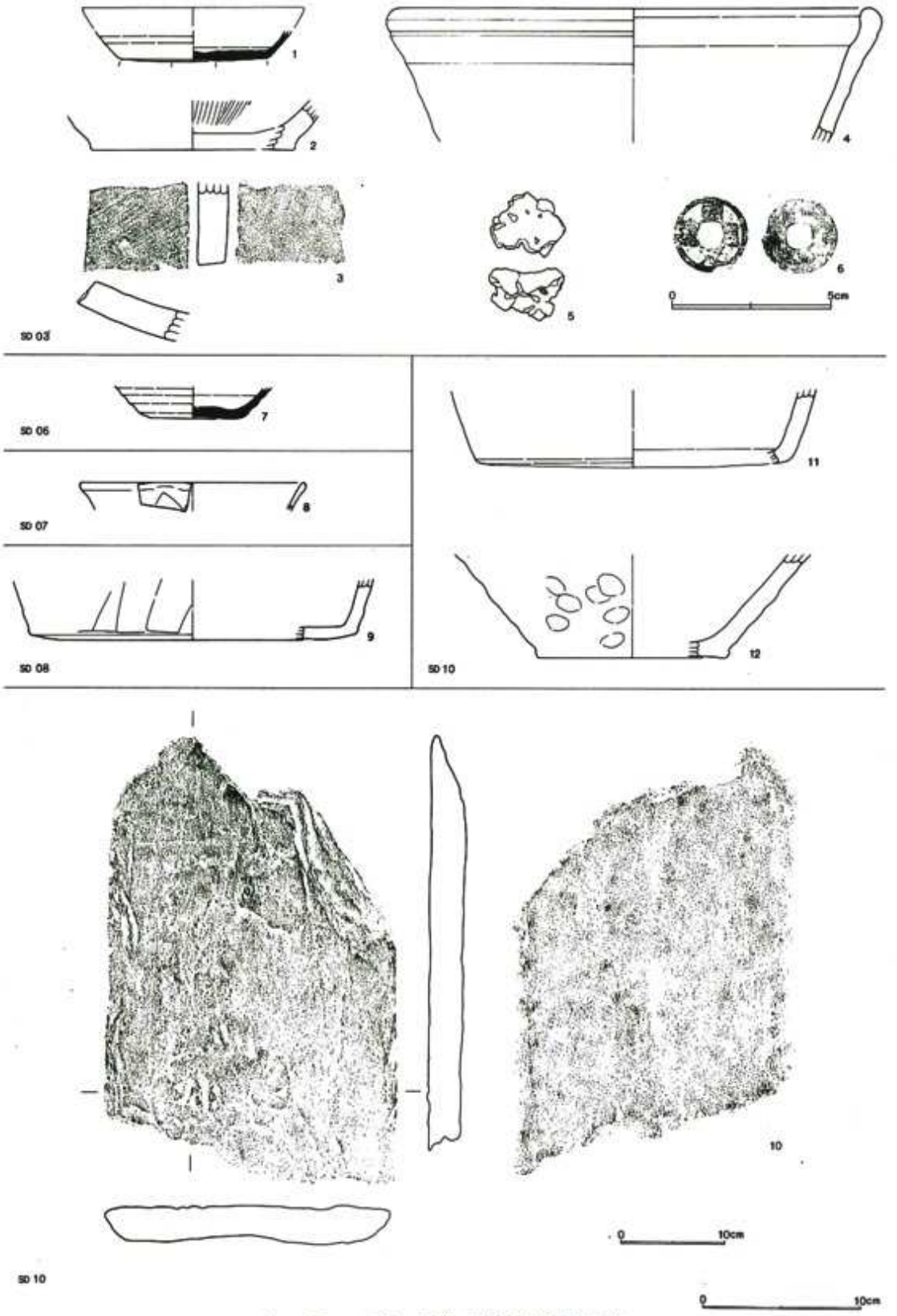
第31号溝跡は北西から南東に延びる溝である。第30号溝跡との新旧関係は不明である。出土遺物は須恵器坏と高盤(第586図28・29)があるが伴うかどうかわからない。



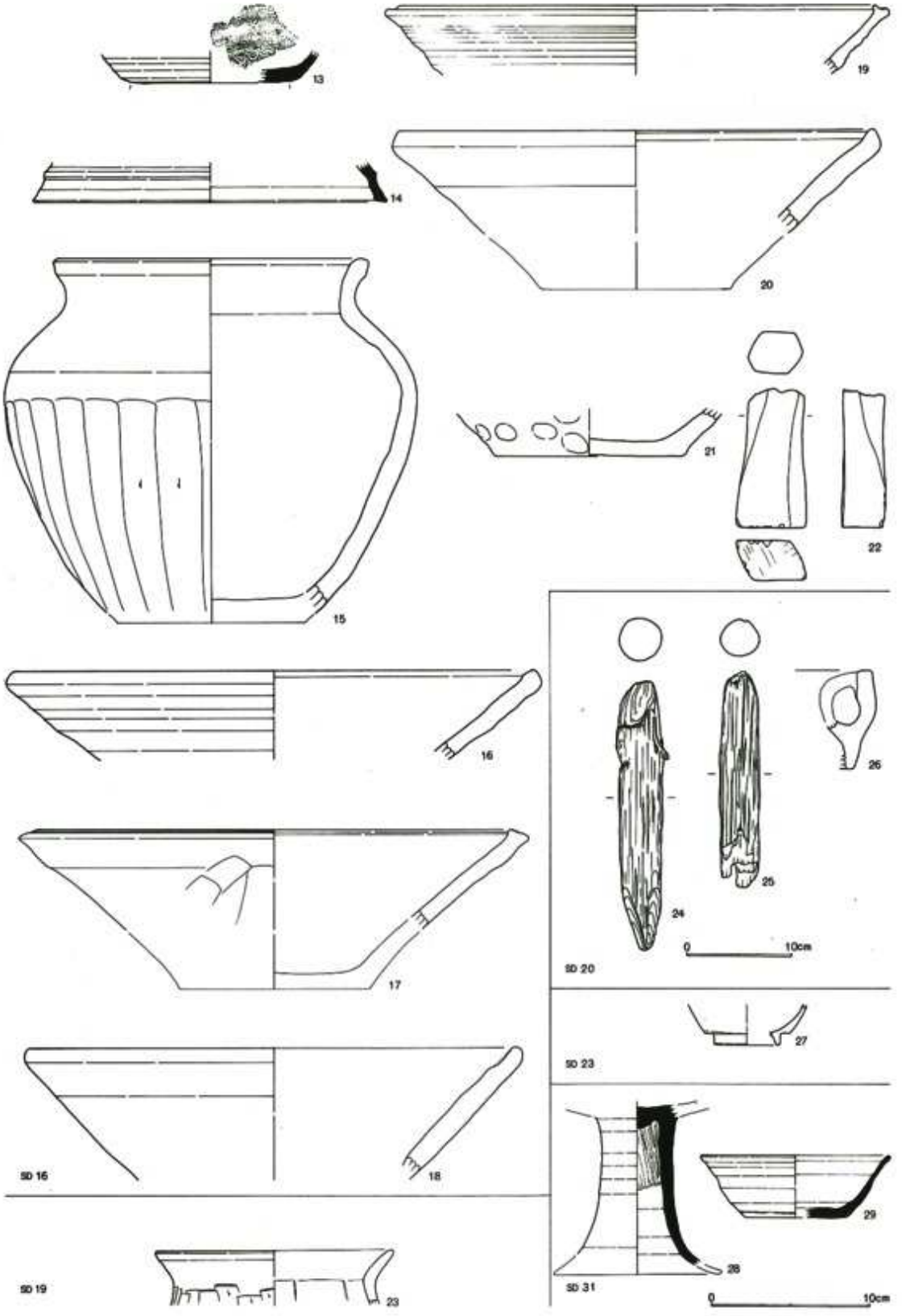
第583図　Ｃ区第30号溝跡(部分)



第584図　Ｃ区第18・30・31号溝跡土層図



第585図　C区中・近世の溝跡出土遺物(1)



第586図　C区中・近世の溝跡出土遺物(2)

C区中・近世の溝跡出土遺物観察表(第585・586図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏		1.9	(9.3)	ABC	A	暗青灰	35%	SD03No2 覆土
2	擂鉢		3.1	(13.0)	A	B	灰褐	10%	SD03覆土
3	平瓦				B	C	黄灰		SD03覆土 中世瓦
4	内耳鍋	(30.0)	8.5		AI	A	灰	10%	SD03覆土
5	椀型滓								SD03覆土 長径4.8cm 短径3.3cm
6	古銭								SD03覆土
7	坏		2.0	5.4	ABC	A	灰	70%	SD06覆土
8	椀	(14.2)	1.8			A	明緑灰	5%	SD07覆土
9	内耳鍋		3.8	20.8	AB	A	にぶい黄橙	5%	SD08覆土
10	板碑								SD09覆土 長径44.9cm 短径27.9cm
11	内耳鍋		4.7	(19.4)	A	A	にぶい黄橙	10%	SD10覆土
12	鉢		6.5	(12.0)	A	A	にぶい黄橙	15%	SD10覆土
13	坏		2.0	(10.0)	ABC	B	灰白	15%	SD16覆土 混入
14	円面硯		2.5	(22.4)	ABC	A	暗灰	5%	SD16覆土 混入
15	壺	(19.0)	22.4		A	B	にぶい黄橙	30%	SD16No3 覆土
16	鉢	(33.0)	5.6		A	C	灰白	10%	SD16覆土
17	鉢	(30.0)	6.3		AD	A	にぶい褐	10%	SD16覆土
18	鉢	(30.6)	8.3		A	C	にぶい橙	10%	SD16No16 覆土
19	鉢	30.0	4.4		A	A	灰白	5%	SD16覆土
20	鉢	(30.0)	6.5		AE	B	灰白	20%	SD16No17 覆土
21	鉢		3.0	(12.0)	A	B	灰	25%	SD16覆土
22	砥石								SD16覆土 残長8.2cm 重量160g
23	小形甕	(15.0)	3.5		ABC	A	にぶい橙	25%	SD19覆土
26	焙烙				AEF	B	浅黄橙		SD20覆土
27	小椀		2.6	(4.0)		A	灰白	20%	SD23覆土
28	高盤		10.2		ABC	A	灰	90%	SD31No11 覆土
29	坏	(11.8)	3.9	(6.4)	ABC	A	灰白	45%	SD31No3 覆土

(6)敷石遺構

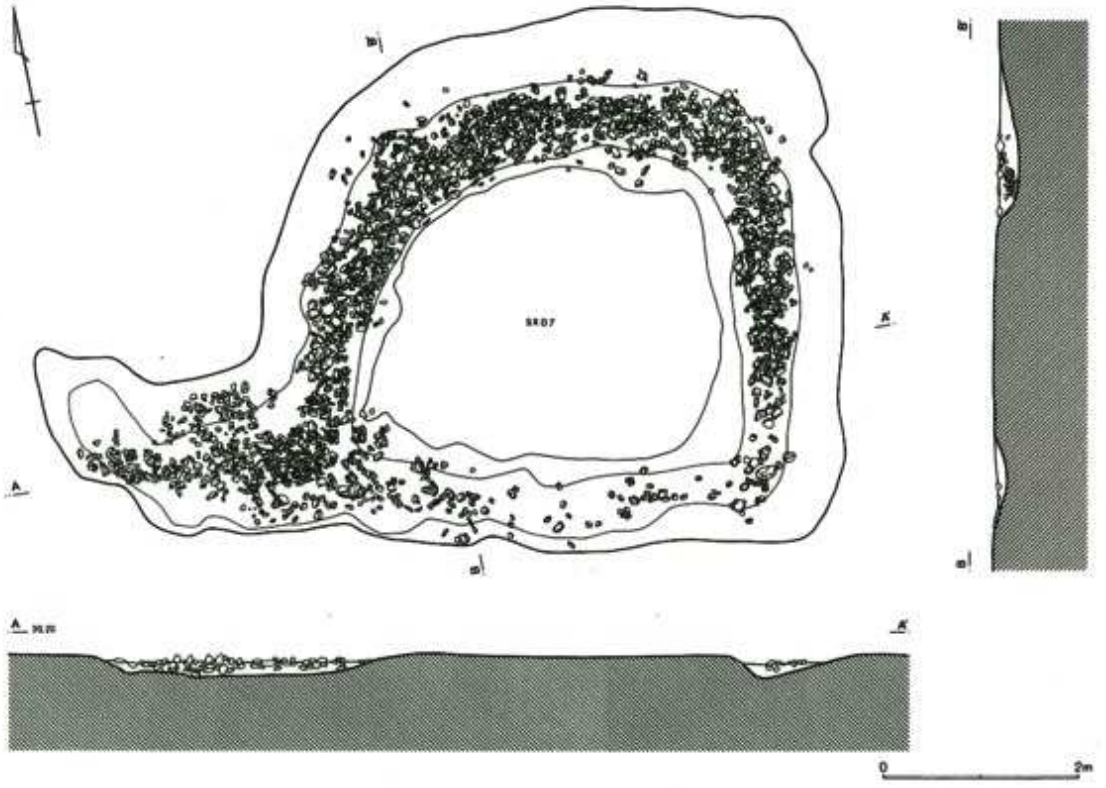
C区第1号敷石遺構(第587図)

E・F-19・20区に位置する。第1号方形周溝墓の方台部上に掘り込まれていた。南側には第3号溝跡がほぼ接する位置にあるが、新旧関係は明確ではない。形態は不整方形に巡る溝状遺構で西側が尾状に張り出す。規模は張り出し部を含めた東西長が13.60m、南北長は溝の外縁部で5.40mである。

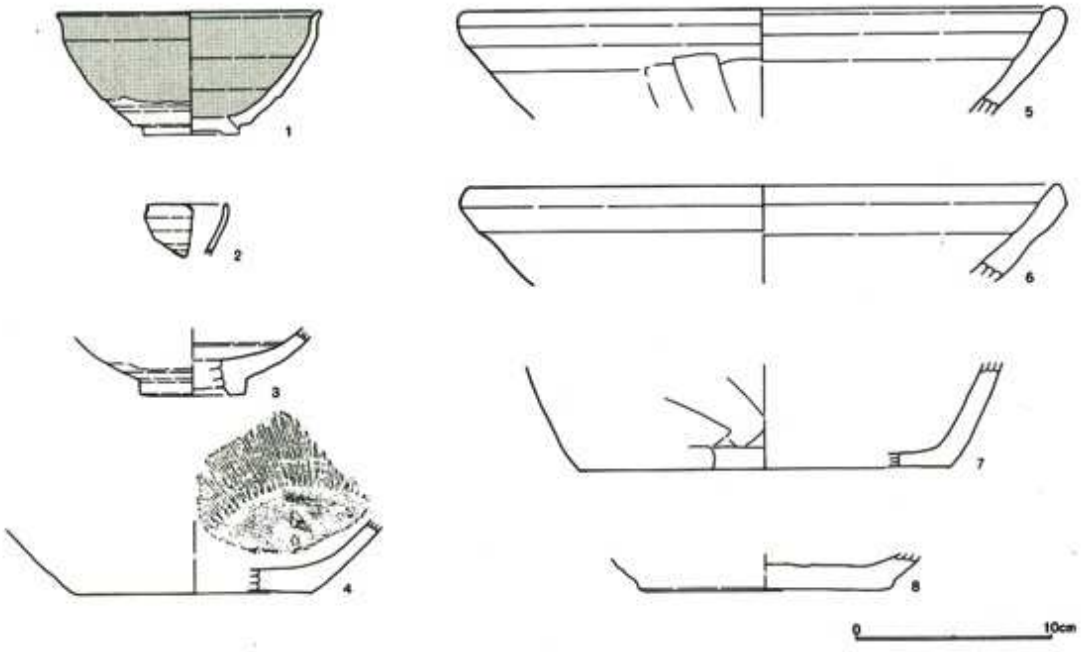
溝は幅1m～1.80mと幅広く、深度は浅く0.10～0.20mとなる。底面は緩やかに凹み、明確な段差は持たないで立上がっていた。溝覆土の状態は不明であるが、上面を中心に拳大の礫が多量に敷き詰められた状態で検出された。溝に囲まれた島状の部分には特に施設は検出されなかった。性格は不明とせざるを得ない。

出土遺物は瀬戸天目茶碗(第588図1)、白磁?(2)、碗(3)、擂鉢(4)、鉢(5・6)、内耳鍋(7)、在地産の壺(8)の他、土釜と常滑焼の甕胴部片が検出された。2は灰色味の強い透明釉が掛かる。

明の白磁か。４の擂鉢内面には細かい摺り目が刻まれている。茶褐色の釉が掛かり、備前系か。



第587図　C区第１号敷石遺構



第588図　C区第１号敷石遺構出土遺物

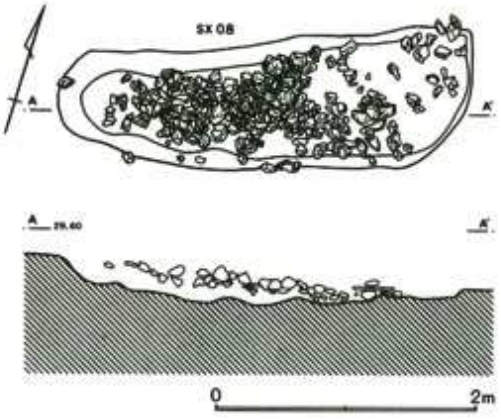
C区第1号敷石遺構出土遺物観察表(第588図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	天目碗	(13.4)	6.0		B	A	灰白	15%	SX07覆土　瀬戸美濃産
2	碗					A	灰白		SX07覆土
3	碗		3.4	(5.2)	B	A	淡黄	20%	SX07覆土　瀬戸美濃産か
4	擂鉢		3.7	(12.0)	C	A	灰茶	20%	SX07覆土
5	鉢	(30.0)	5.5		ABJ	A	にぶい橙	10%	SX07覆土
6	鉢	(30.0)	4.9		AJ	A	灰白	5%	SX07覆土
7	内耳鍋		5.3	(19.0)	AJ	B	灰褐	10%	SX07覆土
8	壺		1.8	(13.0)	AJ	B	灰白	30%	SX07覆土

C区第2号敷石遺構(第589図)

調査区東端のG-30区に位置し、第16号方形周溝墓を切って構築されていた。第6号・16号溝跡の突端にあり、有機的な関連をもつものと推定される。長楕円形の土壙状をなし、規模は長さ3.20m、幅1.05m、深さ0.05～0.20mである。

底面は凹凸が顕著で一定しない。遺構検出面からは拳大の礫が敷き詰められたかの様に多量に出土した。一応敷石遺構としたが、礫の出土レベルを見ると西から東に向かって傾斜し、また西側部には底面と礫の間に間層が入ることから、流れ込み、あるいは一括投棄と見たほうが自然かもしれない。出土遺物はない。



第589図　C区第2号敷石遺構

(7)　火葬墓

C区第1号火葬墓(第590図)

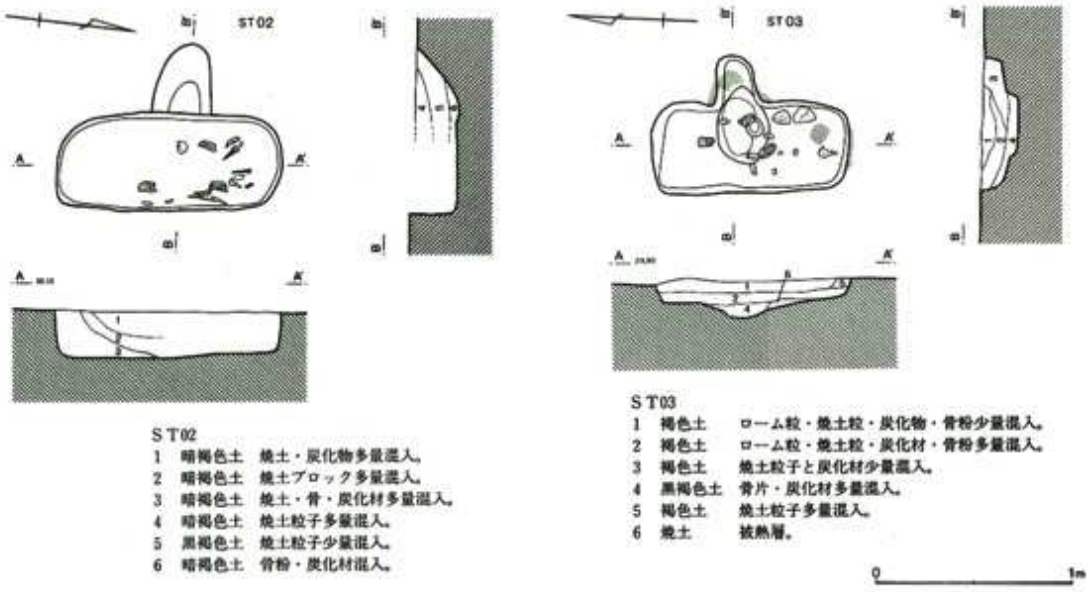
調査区中央部のF-23区に位置し、第14号方形周溝墓の南周溝上に掘り込まれていた。形態は隅丸長方形で、焼成部の北辺中央部に張り出しをもつ。焼成部の規模は長軸1.15m、短軸0.50m、深さ0.23m、張出し部の長さは0.35mである。

焼成部の壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。張出し部は底面に接する位置から斜め上方に延びていた。

覆土は6層に分かれるが詳細な堆積状況は不明である。焼土と炭化材を含む暗褐色土で構成され、下層に骨粉が多く混じっていた。出土遺物はないが中世段階の火葬墓と見てよい。

C区第2号火葬墓(第590図)

E-24区に位置する。形態は長方形で焼成部の東側長辺に張出し部をもつ。規模は長軸1.00m、短



第590図　C区第1・2号火葬墓

軸0.48m、深さ0.20mを測る。張出し部の長さは0.25mである。

焼成部の壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁面は赤褐色に被熱していた。底面は張出し部直下がピット状に深くなっている。

覆土は6層に分かれ、焼土・炭化材と骨粉混じりの褐色土で構成されている。骨は小片、或いは粉状となっており、原形を留めるものはほとんどない。出土遺物はないが、中世の火葬墓と考えられる。

5　時期不明の遺構

(1)　土壙

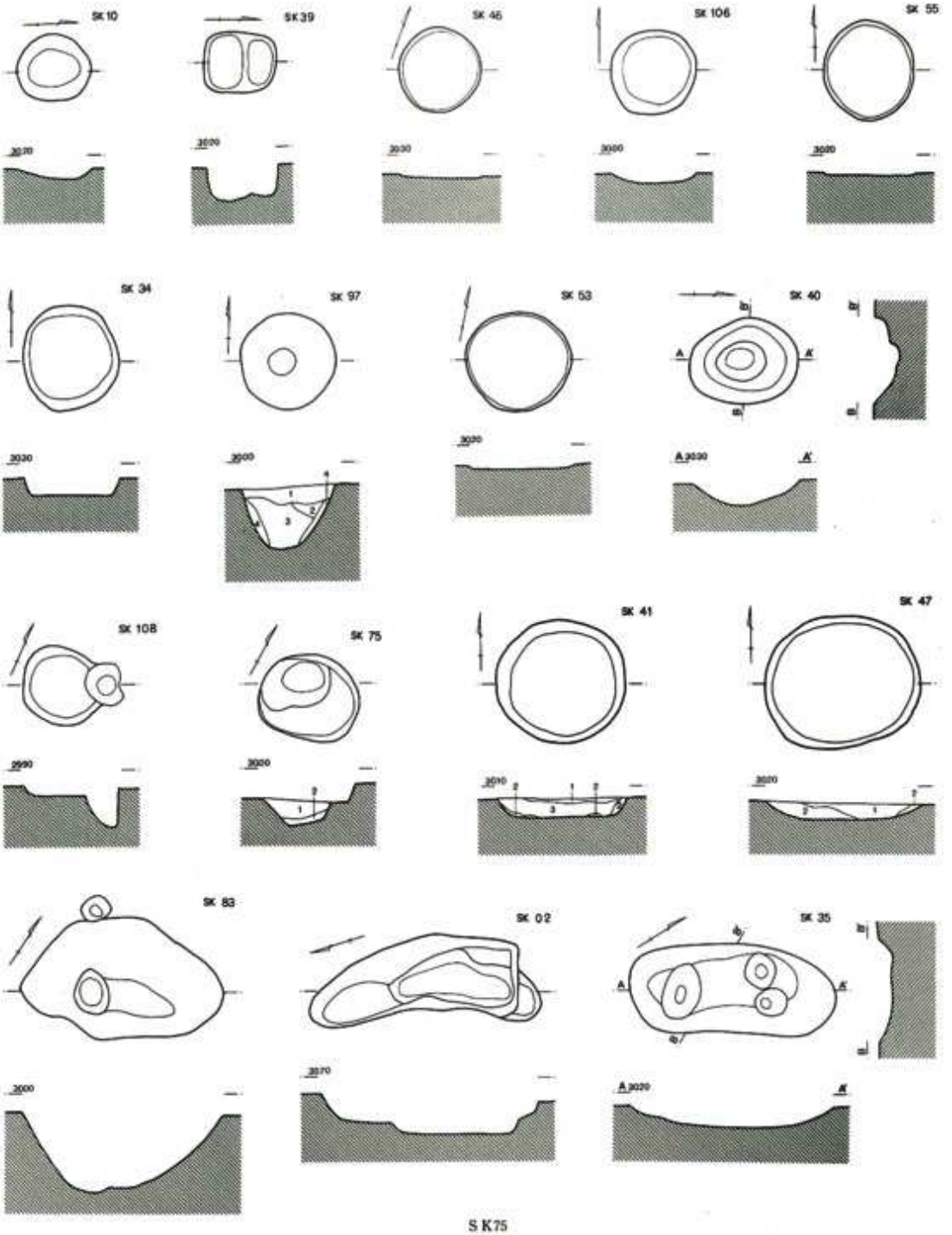
時期不明の土壙は37基検出された(第591～593図)。集落の継続期間から考えて古代～中世段階のものが大半を占めると考えられるが、出土遺物に恵まれず、また覆土の状況からも時期を特定できなかったものである。規模等の詳細は巻末の土壙一覧表に示した。

(2)　井戸跡

C区第28号井戸跡(第594図)

E-22区に位置し、第7号住居跡を切って掘り込まれていた。形態は円形で、規模は直径1.10m、深さ1.20mを測る。側面はほぼ円筒状に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土の詳細は不明。

出土遺物はなく時期は不明とせざるを得ない。

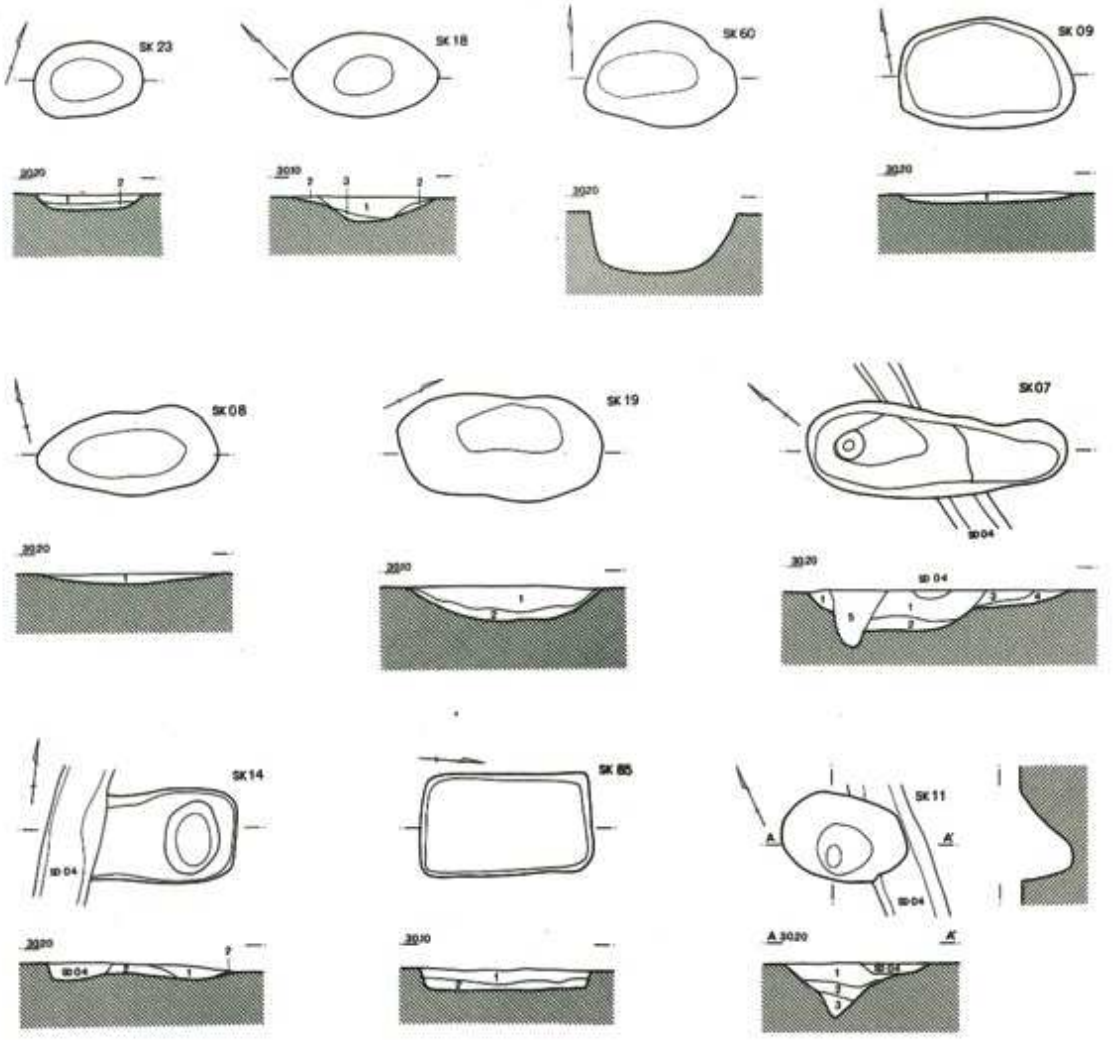


SK41
1　黒褐色土　ローム粒子少量混入。
2　暗黄褐色土　黒褐色土を斑状に混入。
3　灰黒褐色土　ローム粒子少量混入。
SK47
1　黒褐色土　ローム粒子少量混入。
2　暗黄褐色土　ロームブロック少量混入。

SK75
1　黒褐色土　ブロック状のソフトロームを少量混入。シルト質。
2　黒褐色土　ロームブロック・ソフトロームを密に多量混入。
SK97
1　黒暗褐色土　ローム粒子を縞状に混入。粘性なし。
2　黒暗褐色土　ロームブロックを縞状に混入。粘性なし。
3　黒暗褐色土　ローム粒子微量混入。粘性なし。
4　黒暗褐色土　ロームブロック多量混入。粘性ややあり。

0　2m

第591図　C区時期不明の土壙(1)



SK07
1　黒褐色土　ローム粒子少量混入。
2　黒褐色土　ロームブロック少量混入。
3　暗褐色土　ロームブロック少量混入。
4　暗褐色土　ロームブロック多量混入。
5　暗灰褐色土　白色粘土・灰色粘土ブロック・焼土ブロック・ロームブロック混入。粘性なし。

SK08・09
1　黒褐色土　ローム粒・ロームブロック多量、焼土粒・白色粒微量混入。

SK11
1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
2　茶褐色土　ロームブロック少量含む。粘性あり。
3　明褐色土　ロームブロック多量含む。粘性あり。

SK14
1　黒褐色土　ロームを斑状に混入。粘性なし。
2　暗黄褐色土　ローム粒子少量混入。粘性なし。

SK18
1　黒褐色土　濃黒色でローム粒少量混入。
2　暗褐色土　ローム粒子少量混入。
3　暗黄褐色土　ローム主体。暗褐色土混入。

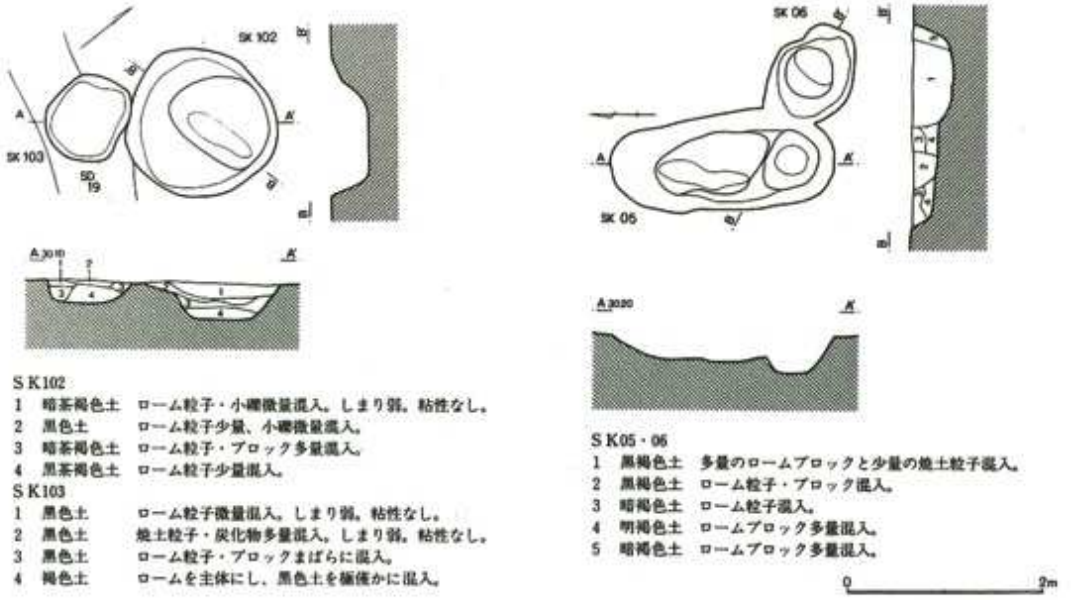
SK19
1　黒褐色土　ローム粒子微量混入。
2　暗黄褐色土　ローム粒子微量混入。

SK23
1　暗褐色土　ロームブロック多量混入。帯状に炭化物混入。
2　暗褐色土　ロームブロック多量混入。

SK85
1　暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子少量混入。
2　黒褐色土

0　2m

第592図　C区時期不明の土壙(2)



第593図　C区時期不明の土壙(3)

C区第29号井戸跡(第594図)

H-24区に位置する。第16号溝跡が上部を貫流するが、新旧関係は不明である。形態は円形で、規模は直径1.32m、深さ0.90mを測る。覆土は7層に分かれ、全体にロームと礫が多く含まれていた。出土遺物はなく、時期は不明である。

C区第30号井戸跡(第594図)

E-29区に位置する。形態は円形で、規模は直径1.36m、深さ1.26mを測る。側面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は一定しない。覆土は黒褐色土を基調とし、下層はシルト質土に移行していた。出土遺物はなく、時期は不明である。

C区第31号井戸跡(第594図)

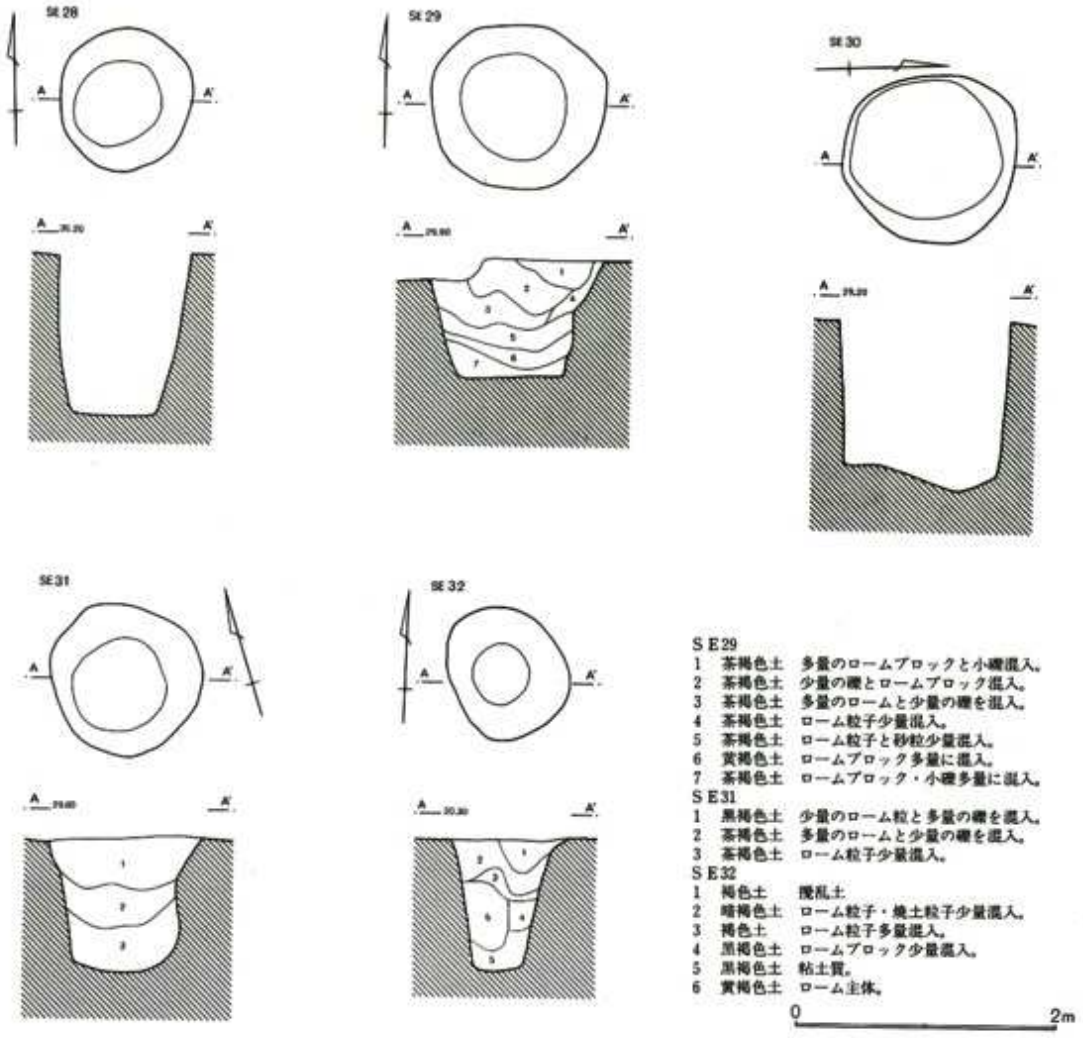
M-29区に位置する。形態は円形で、規模は直径1.14m、深さ1.02mを測る。覆土は3層に分かれ、上層には礫が多く含まれていた。

出土遺物はなく、時期は不明である。

C区第32号井戸跡(第594図)

I-21区に位置する。形態は直径1.02m、深さ1.00mを測る。底面はほぼ平坦で断面逆台形に掘り込まれていた。覆土は6層に分かれ、第5層は黒色の有機質土が堆積していた。

出土遺物はなく時期は不明である。

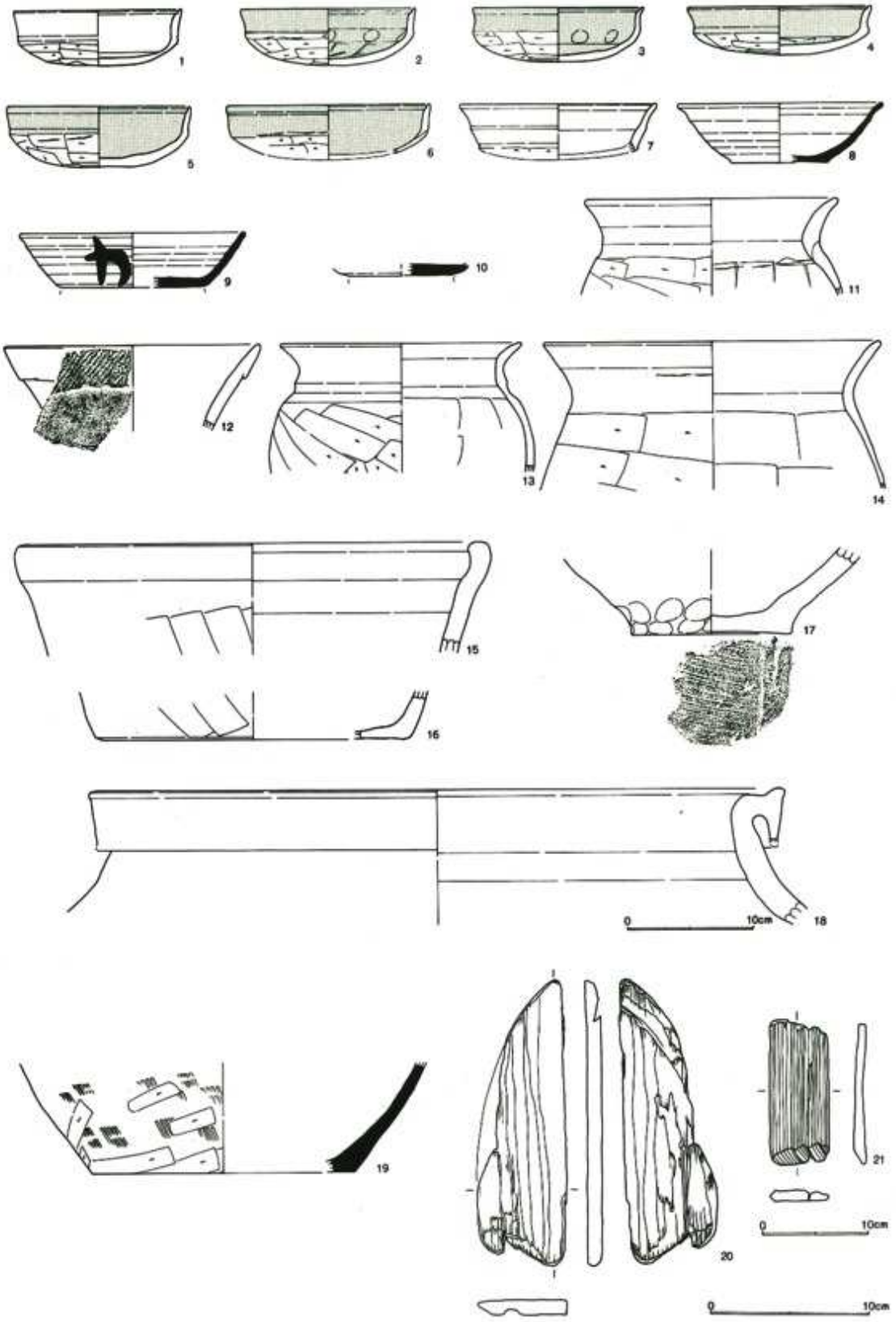


第594図　C区28～32号井戸跡

6　ピット出土遺物

稲荷前遺跡からは数百にのぼる単独ピットが検出された。その大半は時期、性格ともに明らかにできないものであった。柱痕が認められたピットも多数存在し、おそらく建物の柱穴と推定された例もあるが、残念ながら組み合わせが明らかにできなかった。ここでは単独ピットから出土した遺物のうち、図化可能なものを取り上げて掲載するに留め、個別の遺構図は省略した。ピットの位置に関しては各時期の遺構分布図に示した。本来は各時期に分割して報告すべきであったが、一括して報告する。

特に注目して良いのは調査区中央部に位置する第６号掘立柱建物跡の周囲から検出されたピット群である。第595図１～３、５～７はいずれもそれに該当するものである。調査では明確にできなかったが７世紀代の掘立柱建物跡を想定すべきかもしれない。



第595図　C区ピット出土遺物

第595図１～６は比企型坏、12は古墳時代前期の壺で口縁複合部にはＬＲの単節縄文が施文される。17は中世の在地系の鉢と思われる。底部は回転糸切り痕が残る。18は常滑焼の甕である。20はP_{62}から、21はP_{89}からそれぞれ出土した木製品である。前者は楕円形の板状製品の破片で側縁部に沿って切り込みが入る。性格は不明である。

C区ピット出土遺物観察表(第595図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.5	3.5		ABC	A	にぶい橙	60%	P-59覆土　無彩
2	坏	11.0	3.6		ABJ	A	にぶい橙	10%	P-81底面　赤彩
3	坏	10.7	3.4		ABC	A	橙	80%	P-89No1　覆土　赤彩
4	坏	11.5	3.0		AB	B	にぶい橙	60%	P-124No1　覆土　赤彩
5	坏	11.5	3.8		ABC	A	橙	60%	P-59覆土　赤彩
6	坏	(12.7)	3.1		ABC	A	にぶい黄橙	15%	P-83覆土　赤彩
7	坏	(12.2)	3.0		ABE	B	浅黄橙	10%	P-55覆土
8	坏	(12.6)	3.7	6.0	ABC	C	にぶい黄橙	35%	F-29, P-2覆土
9	坏	14.1	3.4	9.0	ABC	A	灰	45%	P-53覆土
10	坏		0.7	6.5	ABC	A	緑灰	25%	P-232覆土
11	小形甕	(15.6)	6.1		ABEJ	A	橙	30%	I-21, P-21覆土
12	壺	(16.0)	5.4		ABC	C	灰褐	10%	P-221覆土
13	小形甕	(15.0)	8.1		ABCJ	C	にぶい橙	20%	P-56覆土
14	甕	(21.0)	9.3		ABE	A	橙	15%	P-62覆土
15	内耳鍋	(28.2)	7.0		ABE	B	灰褐	10%	P-49覆土
16	内耳鍋		3.0	(19.0)	AI	A	淡橙	5%	F-29, P-1覆土
17	鉢		5.3	(10.0)	AE	A	浅黄	40%	P-23覆土
18	甕	(54.0)	10.6		AD	A	暗赤褐	5%	P-49覆土
19	鉢		6.9	(16.6)	ABC	A	灰	20%	P-21覆土

7　グリッド・表採遺物他

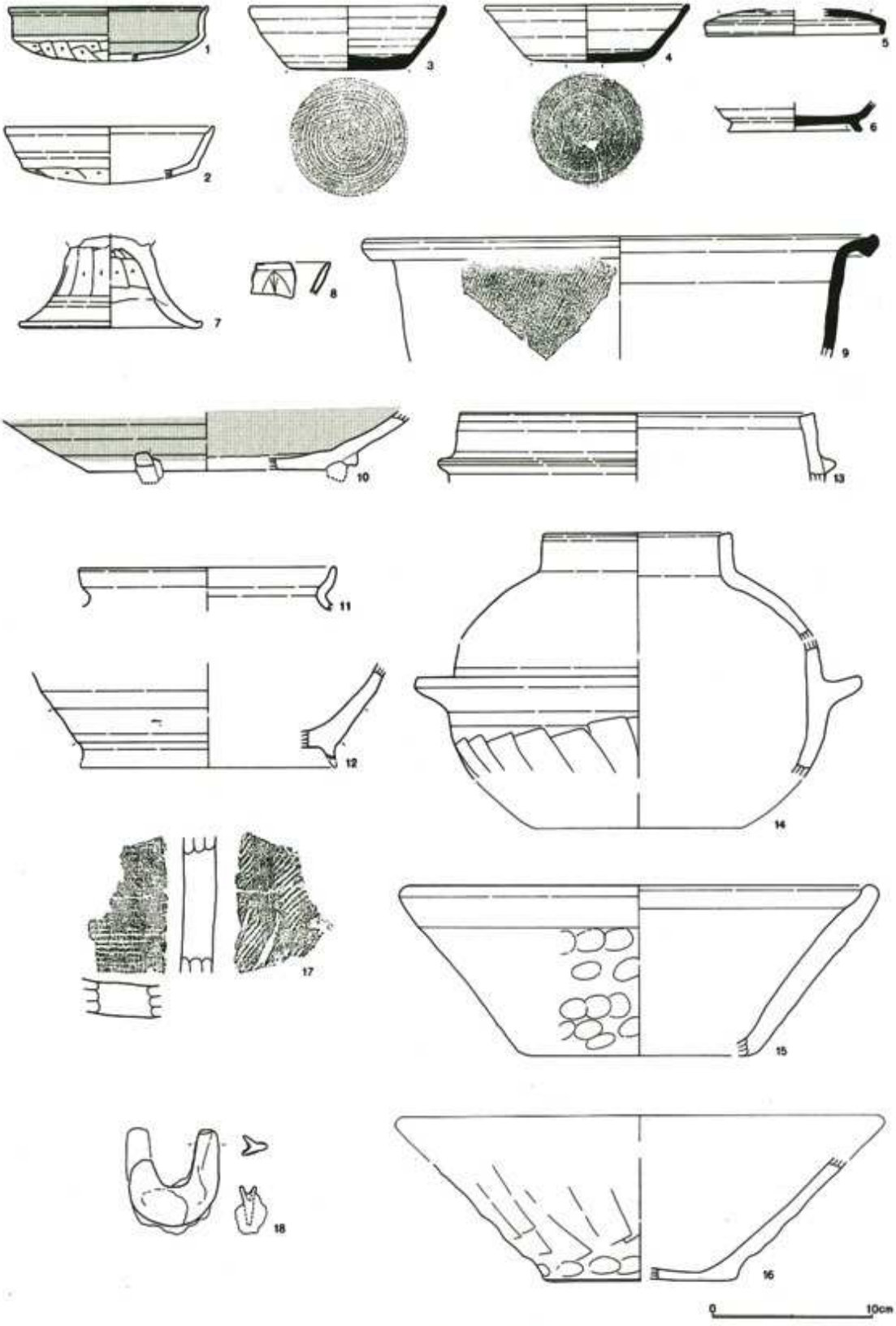
(1)　グリッド出土遺物

ここでは遺構に伴わずに出土した遺物のうち、出土位置がある程度(グリッド単位)判明するものを掲載した(第596図)。

第596図８は竜泉窯系青磁碗の口縁部小片である。外面には鎬蓮弁文が施されている。

14は土釜で、胴部中位に鍔が付く。胴部と口縁部は接合しないが同一個体と考えられる。

18はU字形鋤先で、耳部の片方を欠いている。刃部には銹が厚く覆っているが、耳部の断面形態から見て鋤先とみて誤りない。長さは6.0cm、幅5.7cmと通例と比較して著しく小形で、とても実用に供されたものとは考えられない。I-29区の遺構確認面から出土したもので、周囲を精査したが遺構は検出できなかった。おそらく農耕儀礼に伴う祭祀に使用されたものと推定される。



第596図　C区グリッド出土遺物

C区グリッド出土遺物観察表（第596図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	3.4		ABC	B	にぶい橙	30%	F-24区　赤彩
2	坏	(13.0)	3.3		AB	B	にぶい橙	25%	J—26—b区
3	坏	(12.2)	4.0	7.4	ABC	A	灰白	60%	F—22—n区
4	坏	12.7	3.5	7.0	ABC	A	緑灰	95%	F-22-n区
5	蓋	(10.9)	1.6		ABC	A	灰	30%	H-26区
6	高台坏		1.8	8.3	ABC	A	灰白	55%	F-22-f区
7	高坏		5.7	(11.5)	ABC	A	橙	55%	J-22-b区
8	碗					A	オリーブ灰		H-20区　竜泉窯系
9	鉢	(31.8)	7.6		ABC	A	灰	15%	F-22-j区
10	三足盤		3.6	(15.0)	AB	A	浅黄橙	20%	G-21-h区　竜泉窯系
11	甕	(16.0)	2.7		ABCJ	C	橙	15%	F-27-l区
12	鉢		6.1	(16.0)	AJ	A	灰白	10%	J-23-d区　常滑系
13	羽釜	(22.0)	4.3		AJ	A	にぶい黄橙	5%	G-20-p区
14	土釜	15.3			ABE	A	淡黄	20%	G-21-h区
15	鉢	(28.8)	10.6	(13.2)	AF	B	にぶい黄橙	20%	G-24区
16	鉢		7.6	(12.0)	AI	B	灰	25%	G-21-h区
17	平瓦				ACJ	B	浅黄橙		F-22-j区
18	鋤先								I-29区　長さ6.0cm　幅5.7cm

（2）　表採遺物

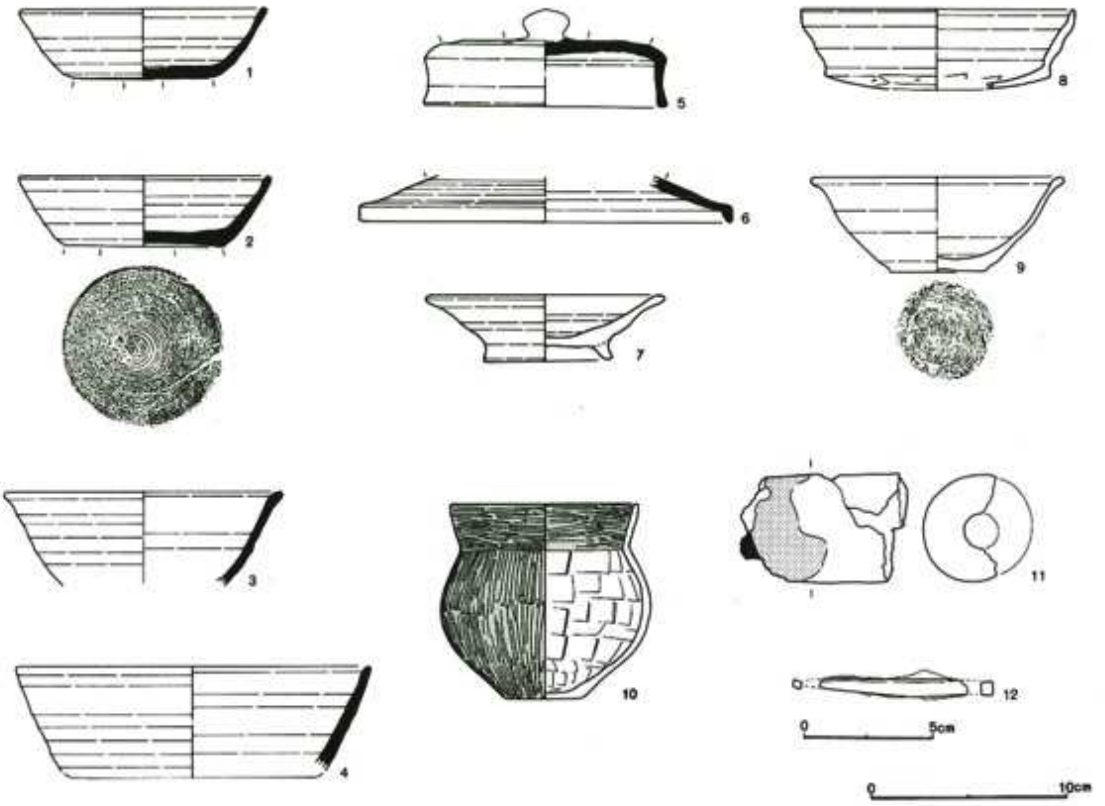
表面採集、表土除去段階で出土したものを第597図にまとめて掲載する。

第597図7の高台付皿は胎土が粗く、還元焔焼成を受けた痕跡が見られない。ロクロ整形土師質土器といえよう。9も同様である。

10は小形の坩である。ほぼ完形品であるが出土位置が不明。周溝墓に伴う遺物の可能性が高いであろう。11は鞴羽口、12は鉄釘と思われる。

C区表採遺物観察表（第597図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	3.6	7.0	ABC	A	灰	35%	SR06周辺
2	坏	12.8	4.1	8.0	ABC	A	紫灰	90%	表採
3	椀	(14.0)	4.7		ABCE	C	褐灰	30%	表採
4	椀	(18.0)	5.3		ABC	B	暗灰	5%	表採
5	蓋	(12.4)	3.5		ABC	A	灰白	45%	表採
6	蓋	(18.8)	2.3		BC	A	青灰	10%	表採
7	高台皿	11.8	3.4	6.3	ABCE	B	褐灰	95%	トレンチ
8	坏	(13.8)	4.0		ABC	B	にぶい褐	10%	表採
9	坏	(12.7)	4.8	4.8	ACE	D	浅黄橙	40%	トレンチ
10	小形壺	9.5	9.9	3.7	ABC	B	浅黄橙	100%	出土遺構不明　赤彩
11	鞴羽口								表採　残長8.6cm　最大径5.7cm
12	釘								表採　残長5.7cm



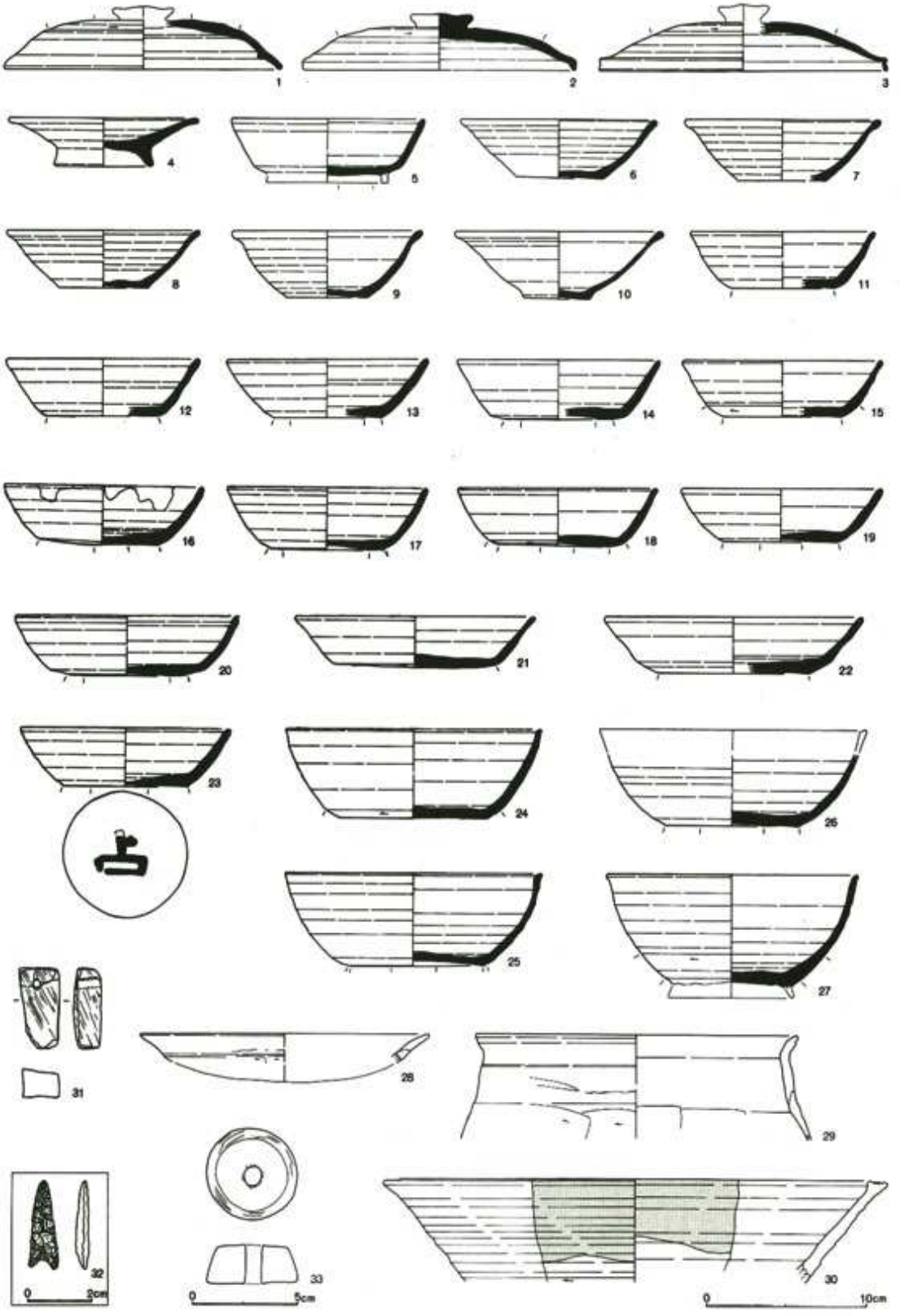
第597図　C区表採遺物

（3）　A区補遺

胎土分析資料を中心に稲荷前遺跡A区の一部の遺物が未掲載であることが判明した。不手際をお詫びして訂正すると共にここにまとめて報告する。

A区出土遺物観察表（第598図）

番号	器　種	口　径	器高	底　径	胎　　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(17.2)	3.1		ABCJ	D	灰白	25%	SJ124-No.25　胎土分析
2	蓋	16.9	3.5		ABC	A	灰白	50%	SJ125-No.55　胎土分析
3	蓋	(17.8)	3.1		ABC	A	白	40%	SJ31-No.190,235　胎土分析
4	高台皿	(11.6)	3.0	5.9	ABE	A	灰白	70%	SK120　胎土分析
5	高台坏	(11.9)	3.5		ABC	A	灰	20%	胎土分析
6	坏	12.1	3.7	5.3	ABC	A	にぶい黄橙	70%	SJ45-No.30
7	坏	(12.0)	3.8	(5.5)	AC	B	にぶい橙	40%	SJ45-No.41
8	坏	(11.8)	3.6	5.5	ABC	C	灰白	40%	SJ45-No.64
9	坏	(11.7)	4.2	(5.0)	ABC	B	灰白	20%	SJ45　覆土
10	坏	12.8	4.3	4.1	ABC	A	にぶい橙	70%	SJ59　胎土分析
11	坏	(11.4)	3.5	(6.3)	BC	A	青灰	15%	SJ37-No.40
12	坏	(11.9)	3.6	(7.0)	ABC	A	灰白	20%	SJ92-No.8　胎土分析
13	坏	12.5	3.7	6.7	ABC	A	明オリーブ灰	15%	SJ31-No.41,42　胎土分析



第598図　A区出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
14	坏	(12.6)	3.7	6.8	ABC	A	明緑灰	25%	SJ31-No.47 胎土分析
15	坏	(12.2)	3.5	(7.3)	ABC	A	灰	20%	SJ37-No.45
16	坏	12.4	3.7	7.5	ABC	A	明オリーブ灰	95%	SJ59-No.289
17	坏	12.5	3.9	7.4	ABC	A	灰白	40%	SJ31-452 胎土分析
18	坏	12.3	3.7	6.9	ABC	A	灰	70%	SJ31-No.3,4 胎土分析
19	坏	12.5	3.3	7.2	ABC	A	灰白	30%	SJ31-390,408 胎土分析
20	坏	(13.8)	3.8	7.6	ABC	A	灰白	40%	SJ31-No.2 胎土分析
21	坏	14.9	3.2	10.1	ABC	A	オリーブ灰	80%	SJ67-2086
22	坏	(16.0)	3.5	(9.4)	ABCJ	B	浅黄	25%	SJ90 胎土分析
23	坏	13.0	3.7	7.9	ABC	A	灰白	70%	SJ31-No.11 胎土分析
24	椀	(16.0)	5.5	(9.2)	ABC	A	灰白	35%	SJ90 胎土分析
25	椀	16.0	5.8	8.2	ABC	A	緑灰	70%	SJ90 胎土分析
26	椀		4.4	8.2	ABC	A	灰	30%	SJ31-No.354 胎土分析
27	高台椀	15.5	7.0		ABC	B	赤灰	90%	SJ67-No.2080
28	皿	(18.0)	1.8		AB	A	にぶい橙	5%	SJ37-No.84
29	甕	(20.0)	6.5		ABEF	A	にぶい黄橙	10%	SJ37-No.106
30	折縁皿	(29.2)	6.4		AB	A	淡黄	10%	SJ37-No.5 瀬戸美濃系
31	提砥								SJ62,63 全長5.0,最大幅2.5cm
32	紡錘車								SJ45-No.137 径4.3,孔径0.8,厚さ1.8cm
33	石鏃								P-14区 長さ2.75,幅0.9cm 石英製

第4表　稲荷前遺跡C区　遺構新旧対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SJ−01	SJ−03	SJ−45	SJ−85	SB−01	SB−07	SE−28	SK49
02	04	46	24	02		29	SE−20
03	06	47	49	03	11	30	29
04	46	48	19	04	10	SD−01	SD−01
05	47	49	77	05	05	02	02
06	12	50	71	06	04	03	03
07	51	51	25	07		04	04
08	48	52	26	08	08	05	05
09	23	53	28	09	14	06	06
10	27	54	29	10	12	07	07
11	84	55	35	11	13	08	08
12	35	56	31	12	09	08	08
13	69	57	60	13	15	10	10
14	82	58	43	14	03	11	11
15	14	59	80	15	02	12	12
16	01	60	81	17	01	13	15
17	02	61	36	SE−01	SX−02	14	14
18	07	62	40	02	SE−15	15	15
19	08	63	95	03	03	16	16
20	09	64	41	04	22	17	17
21	10	65	61	05	SK1	18	31
22	83	66	65	06	23	19	19
23	11	67	66	07	17	20	20
24	13	68	62	08	14	21	21
25	87	69	64	09	09	22	22
26	79	70	63	10	SX5	23	23
27	17	71	37	11	01	24	24
28	76	72	32	12	SK15	25	25
29	15	73	05	13	18	26	26
30	16	74	45	14	21	27	27
31	18	75	42	15	01	28	28
32	38	76	56	16	06	29	29
33	21	77	57	17	07	30	30
34	22	78	55	18	08	31	30
35	86	79	67	19	04	SX−01	SK56
36	52	80	34	20	05	02	SK81
37	93	81	33	21	24	03	SX−03
38	39	82	88	22	113	04	04
39	72	83	94	23	02	05	07
40	50	84	92	24	16	06	06
41	73	85	70	25		07	01
42	78	86	91	26	30	08	
43	74	87		27	25	09	SK82
44	75						

第5表　C区土壙一覧表(1)

番号	旧番号	位　置	規　模 (長軸×短軸×深さ)	時期	出　土　遺　物	重複関係等
1	71	E・F-17	84× 82×59	中世	土師坏	
2	2	E-18	274× 90×52	不明		
3	58	F-18	310×130×30	不明		
4	28	G-16	263×180×61	中世		
5	54	G-18	226×100×37	不明		
6	55	G-18	100× 84×37	不明		
7	68	G-18	266× 94×59	不明		
8	51	F-18	183× 86×11	不明		
9	53	G-18	176×113× 9	不明		
10	61	G-18	88× 80×17	不明		
11	70	G-18	131× 88×53	不明		
12	34	G-18	82× 63×32	古代	土師坏	SJ18内
13	65	H-18	112× 98× 7	中世	須恵蓋	SJ19内
14	30	H-18	136× 96×12	不明		
15	31	H-18	275×226×29	中世		
16	1	G-29	126×122×10	古代	須恵坏・甕	SR11内
17	2	F・G-29	96× 88×10	不明		SR11内
18	26	H-18	148× 84×26	不明		
19	29	H-18	208×106×38	不明		
20	52	F・G-19	214× 86× 8	五領		
21	57	F・G-19	422×152×13	五領	土師壺	
22	59	F・G-19	97× 96× 4	中世	常滑甕　在地系壺	
23	60	G-19	110× 74×19	不明		
24	33	G-19	98× 77×16	古代		
25	8	H-19	146× 87× 4	中世		SJ23内
26	10	H-19	204× 82×55	中世		SJ23内
27	11	H-20	196× 78×53	中世		SJ23内
28	3	D-20	106× 74×10	不明		SR06内
29	116	F-20	260×124×32	中世		
30	99	F-20	202×202×44	古代	土師質坏・羽釜	
31	64	G-20	116×108×11	古代		SJ22内
32	131	G-20	104×101×12	中世	須恵坏	SJ24・25内
33	137	G-20	151×111×15	中世	常滑甕・内耳鍋 板碑	SJ25内
34	2	G-20・21	122×113×22	不明		
35	1	G-20・21	242×120×46	不明		
36	4	G-21	120×111×12	古代	須恵坏・甕	
37	7	G-21	80× 74×48	中世		SJ06内
38	14	H-21	96× 61×25	中世	土師質坏　古銭	
39	48	E-22	84× 70×40	不明		
40	96	I-21	126×102×30	不明		
41	98	I-21	154×144×21	不明		
42	47	E-22	194× 72×12	中世		
43	96	F-22	116× 82×29	古代		
44	25	F-22	300× 77×30	古代	須恵甕	
45	46	F-22	78× 78×54	古代	須恵坏・甕	
46	119	G-22	100× 96× 6	不明		

第6表　C区土壙一覧表(2)

番号	旧番号	位　置	規　模 (長軸×短軸×深さ)	時期	出　土　遺　物	重複関係等
47	124	G-22	184×156×22	不明		
48	83	G-22	130×126× 7	古代	土師甕	
49	84	G-22	130×114×10	古代	土師甕　須恵坏	
50	12	G-22	126×124×18	古代	須恵甕	
51	120	G-22	118× 72× 9	中世		
52	123	G-22	190× 70× 8	中世		
53	121	G-22	122×116× 5	不明		
54	74	G-22	156×116× 9	不明		
55	122	G-22	118×106× 3	不明		
56	20	H-22	120×114×31	中世	在地系鉢　鉄釉皿	SJ39・40内
57	72	H-22	194×140×24	古代	土師坏・甕・壺　須恵坏・甕	SJ40内
58		E-23・2	216×190×50	古代		SJ46内
59	73	H-22	92× 82×12	古代	土師甕	SJ40内
60	93	I-22	106×100×12	不明		
61	95	I-22	106×100×12	古代	土師甕　須恵椀	
62	19	F・G-23	178×122×19	古代	土師坏・甕　須恵坏・椀・支脚	
63	18	G-23	190×122×32	古代	須恵坏・椀・盤・甕・鉢・蓋他	
64	11	F・G-23	120×102×28	中世		
65	103	J-24	194×122×11	中世		SD16内
66	136	G-23	132×112×15	古代	土師甕・須恵坏	
67	13	G-23	130× 80×21	古代	土師甕　須恵坏・甕	SJ48内
68	135	G-23	112×110×12	古代	土師坏	
69	17	G-23	80× 68×11	中世		SJ48内
70	35	G-23	72× 58× 9	中世		SJ48内
71	23	H-23	94× 63×10	中世	土師質皿	SJ48内
72	39	H-23	82× 70×33	古代	土師甕　須恵蓋	SJ48内
73		H・I-23	110× 78×29	不明		SJ50内
74	75	H-23	120×114×17	古代	土師坏・甕	
75	94	H-23	120×102×55	不明		SJ49内
76	92	H-23	135× 54×37	古代	須恵坏	SJ49内
77	44	F-24	482×354×50	古代	土師坏・甕・台付甕他　須恵坏	
78	39	F-24	104× 81×10	古代		SJ53内
79	43	F-24	176× 90×17	古代	須恵坏・椀	
80		F-24	130×112×14	古代		
81		F-24	150× 88×12	古代		
82	1	D-24	130×104×73	不明		SR02内
83	102	G・H-24	238×140×96	不明		
84	101	H-24	214 82×12	古代		
85	37	E-25	176×102×20	不明		
86	1	F・G-28・2	108×106× 6	古代	土師甕	SR05内
87		F-25	112×104×24	古代		
88	87	H-25	162×142×41	古代	土師坏　須恵坏	
89	90	H-25	178×158×30	古代	土師坏・甕・壺	
90		H-25	102× 92×38	古代		
91	88	H-25	174×166×30	古代		
92	89	I-25	178×152×25	古代		

第7表　C区土壙一覧表(3)

番号	旧番号	位　置	規　模 (長軸×短軸×深さ)	時期	出　土　遺　物	重複関係等
93		F-26	100× 96×25	古代		SJ72内
94	91	H-23	85× 85×30	中世		SJ49内
95		G-26	130×108×17	不明		SJ79内
96	111	G-26	222×206×23	古代		
97	104	J-26	115×113×79	不明		
98	10	F-27	236×180×11	古代	土師坏　転石	SJ73内
99	27	F-27	148× 85×22	古代	土師坏　須恵坏・高台坏　紡錘車	SJ73内
100		H-27	130× 80× 9	古代		
101		H-27	68× 40× 3	古代		
102	126	M-27	152×150×38	不明		
103	107	M-27	93× 90×21	不明		
104	1	F-28	115×110×24	中世		SR05内
105	1	F-28	210×170×17	中世		SR05内
106	3	F-28	101× 98×14	不明		SR05内
107	2	F-28	122×114×61	古代		SR05内
108	9	F-28・29	120× 92×13	不明		SR05内
109	7	F-28	88× 70×22	中世	鋳造滓	SR05内
110	8	F-28・29	112× 93×15	中世		SR05内
111	6	F-28	163× 74× 9	中世		SR05内
112	5	F-28	94× 74× 4	中世		SR05内
113	4	F-28	125×124× 9	中世		SR05内
114	3	F・G-28	160× 70× 6	古代		SR05内
115	2	F・G-28	182×122× 6	古代		SR05内

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第145集

稲荷前遺跡（B・C区）

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告

－Ⅷ－

（第２分冊）

平成６年10月20日　印刷

平成６年10月31日　発行

発行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

TEL　(0493) 39－3955

印刷　巧和工芸印刷株式会社